垂水廃寺 Ⅱ
宇野地区遺跡群 Ⅰ

―― 福岡県築上郡新吉富村所在遺跡群の調査 ――

新吉富村文化財調査報告書　第12集

1999

新吉富村教育委員会

垂水廃寺 Ⅱ
宇野地区遺跡群 Ⅰ

―― 福岡県築上郡新吉富村所在遺跡群の調査 ――

新吉富村文化財調査報告書　第12集

1999

新吉富村教育委員会

序

この報告書は県営圃場整備事業に伴う正ノ坪・安雲ハタガタ遺跡、また垂水廃寺についての発掘調査記録であり、新吉富村文化財調査報告書第12集としてとりまとめたものです。

先人が残してくれた文化財は、現在に生きる私たちではなく、子々孫々にまで伝え残さねばならない貴重な財産でもあります。この大切な文化財を保護し、長く後世に伝え残すとともに、その適切な活用を図ることは、私どもに与えられた大きな課題であります。

幸いにも新吉富村では、大ノ瀬下大坪遺跡を国指定史跡として保存することができました。しかしながらその反面で、消滅してしまう遺跡も村内には多数存在いたします。ここに報告します正ノ坪・安雲ハタガタ遺跡も調査終了後には圃場整備のため消滅してしまいました。はなはだ残念ではありますが、この報告書が新吉富村の歴史を学ぶ上で、また埋蔵文化財をより深く理解していただく上でご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々、ならびに諸関係機関の方々に対しまして心よりお礼を申し上げます。

平成11年３月31日

新吉富村教育委員会

教育長　　高橋　時夫

例　言

1．本書は、福岡県築上郡新吉富村教育委員会が事業主体となって実施した村内遺跡の発掘調査の報告である。

2．発掘調査・報告書作製は、国および福岡県の補助事業として、福岡県教育庁総務部文化財保護課（旧指導第二部文化課）、同京築教育事務所の協力を得て実施した。

3．出土遺物は、福岡県立九州歴史資料館において、福岡県文化財保護課岩瀬正信氏の指導の下で、整理・復原を行った。

4．掲載した図は、遺構を矢野・吉村・飛野・坪根千賀子・原田和代・木下秀子・高畑由美子・三好きよみ、遺物は吉村・飛野・杉原敏之・大野愛里・西田美代子・丸山小夜子・辻啓子が作製し、杉原敏之・豊福弥生・原カヨ子が製図を行ったものである。

5．掲載した写真は、遺構を矢野・吉村・飛野が、遺物は九州歴史資料館において同館参事補佐石丸洋氏の指導の下、文化財保護課北岡伸一氏が撮影したものを使用した。

6．使用した方位は主として磁北である。それ以外については特記した。

7．本書の執筆・編集は矢野（Ⅱ）・吉村（Ⅲ－1）・飛野（その他）が行い、編集は3者が協力してこれにあたった。

本文目次

本文頁

Ⅰ．はじめに …… 1

Ⅱ．位置と環境 …… 3

Ⅲ．調査の内容 …… 8

1）垂水廃寺跡 …… 8

2）正ノ坪遺跡 …… 25

3）安雲ハタガタ遺跡 …… 30

Ⅳ．おわりに …… 43

図版目次

図版１　上；垂水廃寺周辺航空写真（上が北）　下；垂水廃寺遠景（南西から・空中写真）

垂水廃寺

図版２　上；調査区全景（西から）　中；掘立柱建物跡ＳＢ030（南西から）
下；同整地層検出状況（北隅・北西から）

図版３　上；同整地層検出状況（西隅・北西から）　中；整地層断ち割り状況（北東から）
下；柱掘形断ち割り状況（北東から）

図版４　上；溝状遺構ＳＤ033全景（南から）　中；同南半部（南西から）
下；同遺物出土状況１（北西から）

図版５　上；同遺物出土状況２（北西から）　中；同遺物出土状況３（北西から）
下；溝状遺構ＳＤ032全景（西から）

図版６　各遺構・層位出土瓦類１

図版７　各遺構・層位出土瓦類２

図版８　各遺構・層位出土瓦類３

図版９　各遺構・層位出土瓦類４

図版10　各遺構・層位出土土器

正ノ坪遺跡

図版11　上；正ノ坪遺跡全景（南東から）　中；同中央付近（北東から）
下；同西端付近（北西から）

図版12　正ノ坪遺跡出土遺物

安雲ハタガタ遺跡

図版13　上；安雲ハタガタ遺跡全景（調査前・北東から）下；同全景（調査後・北東から）

図版14　上；１号竪穴式住居跡（西から）　中；同カマド左側土坑（南西から）
下；同東辺土坑（北西から）

図版15　上；２号竪穴式住居跡遺物出土状態(北西から）　中；同完掘後（北西から）
下；同カマド（北東から）

図版16　上；同Ａ群遺物出土状態（南東から）　中；同Ｂ群遺物出土状態（西から）
下；同Ｂ群遺物出土状態（北西から）

図版17　上；掘立柱建物跡群（北西から）　下；１・３号掘立柱建物跡（南西から）

図版18　上；２号掘立柱建物跡（南西から）　中；４・５号掘立柱建物跡（北西から）

図版19　上；溝状遺構（北東から）　中；調査風景（住居跡）
下；調査風景（２号住居跡）

図版20　出土遺物１（１・２号住居跡）

図版21　出土遺物２（２号住居跡ほか）

挿図目次

本文頁

第１図　垂水廃寺跡・宇野地区遺跡群調査位置図（1／10,000）……2
第２図　周辺遺跡分布地図（1／25,000）……4
第３図　垂水廃寺周辺の調査区域図（1／2,000）……8
第４図　層位模式図……9
第５図　垂水廃寺遺構配置図（1／100）……10
第６図　ＳＢ031実測図（1／30）……11
第７図　ＳＢ030実測図（1／80）……12
第８図　ＳＤ033遺物出土状況実測図（1／30）……13
第９図　軒丸瓦実測図（1／4）……14
第10図　軒平瓦実測図１（1／6）……15
第11図　軒平瓦実測図２（1／6・1／3）……16
第12図　丸瓦実測図（1／6）……17
第13図　平瓦実測図（1／6）……18
第14図　熨斗瓦実測図（1／4）……19
第15図　叩文集成図（1／4）……20
第16図　各遺構・層位出土土器実測図１（1／4）……21
第17図　各遺構・層位出土土器実測図２（1／3・1／4）……22
第18図　垂水廃寺関係遺構配置状況図……24
第19図　正ノ坪遺跡遺構配置図（1／400）……折込
第20図　正ノ坪遺跡出土遺物実測図（1／3）……26
第21図　安雲ハタガタ遺跡遺構配置図（1／600）……30
第22図　１号竪穴式住居跡実測図（1／40）……折込
第23図　１号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1／3）……31
第24図　２号竪穴式住居跡実測図（1／40）……32
第25図　２号竪穴式住居跡出土遺物実測図１（1／3）……34
第26図　２号竪穴式住居跡出土遺物実測図２（1／3）……35
第27図　１・３号掘立柱建物跡実測図（1／40）……36
第28図　２号掘立柱建物跡実測図（1／40）……37
第29図　４・５号掘立柱建物跡実測図（1／40）……38
第30図　１号土坑出土石製品実測図（1／4）……39
第31図　土坑実測図（1／40）……40
第32図　土坑出土遺物実測図（1／3）……40
第33図　溝状遺構実測図（1／40）……41
第34図　その他の出土遺物実測図１（1／3）……41
第35図　その他の出土遺物実測図２（1／1）……42
第36図　三毛門放生田遺跡周辺地籍図（1／5,000）……44
第37図　小石原泉遺跡周辺地籍図（1／5,000）……45

Ⅰ．はじめに

福岡県築上郡新吉富村は、福岡県最東端、一級河川山国川を挟んで大分県中津市に接する農村地帯である。中でも山国川の支流友枝川と小河川の黒川に挟まれた東西１㎞、南北２㎞ほどの地区は良好に条里遺構が残存し、精美な方形区画で埋められていた。しかし、この地区にも圃場整備事業が計画され、平成６年度から施行されることとなった。計画地は大字宇野・安雲の約74haを対象とする大規模なものである。事業地全域を対象とする試掘調査では、約10haにおよぶ発掘調査対象地が予想された。事業地の北端を走る一般国道10号豊前バイパス路線内で、畿内系の初期土師器を出土する住居跡、古式須恵器を出土し、いわゆるオンドル状遺構を伴う住居跡や古代官道の調査など、地域の歴史にとって画期的な発見が相次いだ直後であった。周辺には、住宅街に位置するために推定寺域が工事対象外となった垂水廃寺跡も位置する

宇野地区圃場整備事業が施工される以前、吉岡・尻高の圃場整備事業、牛頭天王公園整備事業、山田地区開発（照日遺跡群）などに伴う発掘調査で、村教育委員会は毎年のように福岡県教育委員会の応援をえて事業を消化してきた。しかし、今回の事業は規模・時間的制約などから判断して到底県教育委員会の応援で凌げるものではなく、文化財専門職員の採用を迫られた。結果、６年12月、村教育委員会は文化財専門嘱託職員を雇用、翌年４月より正規職員として採用するにいたった。

ここで報告する正ノ坪・安雲ハタガタ遺跡はそれより以前、６年11月までに福岡県教育庁京築教育事務所の応援をえて発掘調査を行ったものである。

また垂水廃寺については、推定寺域内で果樹（無花果）の植樹を行うとの報を聞き及び、出土瓦以外まだ詳細が判明していない同遺跡の実像に少しでも近づければと考え、地権者に発掘を快諾していただいたものである。

発掘調査・報告書作成にいたる関係者は以下の通り。

新吉富村教育委員会

教　育　長	平井晋（平成６年～９年）・高橋時夫（９年～）
教育課長	小川周一（６年～同７年）・武井一彦（７年～）
社会教育係長	末吉秋男（６～８）・筒井陽子（９年～）
主事（文化財担当）	村上英之（６年）・矢野和昭（７年～）

福岡県教育庁京築教育事務所

飛野博文（６年～８年）・小池史哲（９・10年）

福岡県教育庁指導第二部文化課（現総務部文化財保護課）

木下修・吉村靖徳（７・10年）

なお、発掘調査に際しては地元在住の方々を初めとして多くの方々のご協力を得た。記して謝意を表します。（敬称略）

新吉富村産業課・同宇野地区土地改良区・新吉富村文化財保存会・㈱黒田実郎、福岡県教育庁京築教育事務所生涯学習課・同北筑後教育事務所生涯学習課・福岡県総務部文化財保護課・同太宰府事務所・同甘木事務所・福岡県立九州歴史資料館横田賢次郎・杉原敏之、福岡県文化財保護指導委員宮本工・同濱島三司、豊前市教育委員会栗焼憲児、大平村教育委員会末永浩一。



第１図　垂水廃寺跡・宇野地区遺跡群調査位置図

Ⅱ．位置と環境

1．地理的環境

新吉富村は福岡県の東南端、築上郡東部に位置し、「豊かな空と水と緑の里」をキャッチフレーズとした農業を基幹産業とする人口約4,200人ほどの農村である。東は一級河川山国川を隔てて大分県中津市と接しており、西は佐井川を挟んで豊前市に、北は周防灘に面する吉富町に、南は雁股山を望む大平村にそれぞれ接している。地形を見ると山国川と佐井川の下流域にひらけ、犬ヶ岳連峰の雄、雁股山系の松尾山の標高373m地点より、山国川の潮止め堤のすぐ上流地点に達する東西最大幅2.8km、南北7.8kmの細長い形をしており、面積13.14k㎡で、福岡県のなかでも大島村に次いで２番目に小さい村である。

地質学的には中津平野西部、安雲面と呼ばれる段丘上に位置する。安雲面は山国川の下流部における支流である友枝川流域では河岸段丘として、佐井川、岩岳川流域では開析扇状地としてみられるきわめて低平な面で、深さ１～２ｍの旧河道に起源する開析谷が多く分布する[註1]。標高50ｍ以下の平坦部では、５ｍ差の等高線が約500ｍから600ｍの幅で走り、佐井川より黒川に向けては南下し、黒川より友枝川に向けては東進している。

2．歴史的環境

明治22年５月、町村制の施行により西吉富村・南吉富村が誕生、昭和30年３月、この二村が合併発足したものが現在の新吉富村である。また、築上郡は明治29年に築城郡・上毛郡の両郡が合併したものである。この地域はかつては開発の遅れにより遺跡の空白地帯であったが、昭和50年代になってから圃場整備事業、国道10号線バイパス建設事業や各種の大規模開発事業に伴う調査によって、急速に考古学的資料も増えつつある。

新吉富村をふくめた周辺地域での旧石器文化の解明は、今後の研究にまつものが大きいが、本耶馬渓町枌洞穴下層部[註2]、豊前市青畑向原遺跡[註3]、大平村桑野遺跡、上の熊遺跡などで遺物が採集されている。

縄文時代の遺跡も、その数は乏しいがいくつかの遺跡が発見されている。草創期についてはいまだ解明されていないが、本耶馬渓町枌洞穴[註4]の調査では、早期、前期、中期、後期の生活跡や墓地が明らかにされた。また、豊前市吉木遺跡[註5]では押型文土器がまとまって出土している。後期に属する遺跡としては中津市の犬丸川沿いの丘陵にある植野貝塚[註6]、後期の土器とともに２個の土偶を出土した高畑遺跡[註7]の他、いずれも大小の河川に近接して位置する大平村原井三ツ江遺跡[註8]・上唐原遺跡[註9]・土佐井遺跡[註10]、新吉富村垂水遺跡[註11]、大分県三光村佐知遺跡[註12]や、豊前市中村石丸遺跡[註13]・小石原泉遺跡[註14]などの集落跡がある。また、大平村東友枝曽根遺跡[註15]では大量の土偶や石棒が出土し、縄文後期の大集落として注目されている。晩期の遺跡についても調査例が乏しいが、晩期中頃の土器や打製石斧が出土した大平村下唐原川下遺跡[註16]があげられる。

弥生時代の遺跡は、弥生時代前期後半から末に近い頃の時期の代表的な遺跡として、新吉富村中桑野遺跡[註17]・牛頭天王遺跡[註18]（この２遺跡は同一集落）があげられる。この遺跡では大型の掘立柱建物跡に加え、中期後半頃の環濠も調査され、この地域の中心的集落と考えられる。中期については、



第2図　周辺遺跡分布図（1／25,000）

1. 尻高畑田遺跡　2. 照日遺跡群　3. 山田古墳　4. 山田窯跡群　5. 友枝瓦窯跡　6. 土佐井ミソンデ遺跡　7. 今蔵遺跡　8. 土佐井遺跡
9. 宇野台古墳　10. 垂水廃寺　11. 垂水遺跡　12. 牛頭天王遺跡　13. 中桑野遺跡　14. 桑野題遺跡　15. 穴ケ葉山古墳群　16. 穴ケ葉山遺跡
17. 穴ケ葉山南古墳群　18. 能満寺古墳群　19. 西方古墳　20. 上ノ熊古墳群　21. 皿山古墳群　22. 上唐原横穴　23. 百留横穴
24. 下唐原居屋敷遺跡　25. 下唐原宮園遺跡　26. 下唐原川下遺跡　27. 古代官道　28. 正ノ坪遺跡　29. 安雲ハタガタ遺跡
A．垂水地区遺跡群　B．宇野代遺跡　C．上桑野遺跡　D．桑野遺跡　E．大塚本遺跡　F．小松原遺跡　G．上ノ熊遺跡　H．金居塚遺跡
I．郷ケ原遺跡

新吉富村垂水高木遺跡[註19]において住居跡が確認されている。後期の遺跡は、新吉富村尻高畑田遺跡[註20]の他、大平村上唐原遺跡[註21]、大分県三光村佐知遺跡などがある。また新吉富村宇野・垂水地区でも、圃場整備事業等に伴う発掘調査で多数の住居跡が確認されており、いくつかの集落は古墳時代に入っても継続して営まれるようである。墓地としては後期の大平村穴ヶ葉山遺跡[註22]、金居塚遺跡[註23]がある。

古墳時代の集落は、中期に属するものはまだ例が乏しく、新吉富村宇野・垂水地区で発見されるのみである。後期の集落は、上唐原遺跡・佐知遺跡・小石原泉遺跡があるが、新吉富村大ノ瀬地区では大ノ瀬下大坪遺跡の調査により6世紀代の大集落が発見されているが、調査自体が内容確認調査のため完全な発掘には及んでいない。

かつて築上郡は北西部の京都、行橋地域と東部の宇佐の二大勢力にはさまれ、前方後円墳は全く知られていなかったが、平成2年に西方古墳[註24]が、同5年には能満寺古墳群[註25]が発見・調査された。中期の前方後円墳としては吉富町楡生山古墳[註26]のみである。調査された後期古墳には、新吉富村の山田古墳[註27]、桑野題古墳[註28]、宇野台古墳[註29]や大平村上の熊古墳群、金居塚古墳群[註30]、穴ヶ葉山古墳[註31]がある。穴ヶ葉山古墳は単室の横穴式石室を主体部とする円墳であり、石室内部に木の葉・鳥・人物などが線刻によって描かれている国指定史跡の円墳である。また前出の山田古墳にも木の葉・鳥などの線刻壁画が見られる。横穴としては、豊前市平原横穴墓群[註32]、大平村百留横穴墓群[註33]、大分県三光村上ノ原横穴墓群[註34]等が知られるが、村内にも徳並横穴墓群や穴井横穴墓群がある。

生産遺跡としては山田古墳のすぐ近くに須恵器の窯跡群である新吉富村山田[註35]・照日窯跡群[註36]がありこれらはやがて瓦窯へと移行する。また、大平村下唐原大久保遺跡[註37]は、九州3例目となる埴輪窯跡であり、古墳時代後期5世紀末から6世紀初めのものと思われるが、ここで焼かれた埴輪の供給先は不明である。

律令期の豊前国には田河・企救・京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐の8郡が置かれた。『和名類聚抄』では「上毛」を「加牟豆美介（カムツミケ）」と記す。『筑後国風土記』逸文には「豊前国上膳県」で筑紫君磐井の跡を失う件がある。また、筑前国観世音寺の梵鐘口縁下端に「上三毛」の線刻があり、この鐘の鋳造は文武天皇2（698）年とされている。他に、『正倉院文書』の大宝2（702）年籍に「豊前国上三毛郡塔里」ならびに「加自久也里」がみられ、「上膳」から「上三毛」、そして三字郡名の「上三毛」が「上毛」になった推移が窺える。また、『日本書紀』（景行天皇の項）に、倭王権の支配に抵抗する「耳垂」と呼ばれる集団が、「御木」の川上（山国川とされる）にいたと記されており、「ミケ」郡が山国川をはさんで「上三毛」と「下三毛」の2郡に分割されたと考えられている。

『和名類聚抄』によると上毛郡の郷は、山田・炊江・多布・上身の4郷となっており、上毛郡は下郡であった。また、大宝2年籍の塔里は『和名類聚抄』にみえる多布郷に継承され、現在の築上郡大平村唐原付近に比定されている。加自久也里は『和名類聚抄』にみえる炊江郷にあてる考え方が有力であり、現在の比定地については豊前市大村から荒堀付近にかけての一帯が考えられている。大宝2年籍では秦姓と勝姓が圧倒的であり、この両者が新羅系渡来人である泰氏に関係する集団であることが指摘されているが、渡来系氏族の存在を考古学的に証明するのは難しい。時代はやや古くなるが、古墳時代の竪穴住居跡に見られるオンドル状遺構（L字状カマド）をもつ竪穴住居跡が一つの手掛かりとなる可能性も指摘されている[註38]。新吉富村近辺では池ノ口遺跡[註39]や佐井川左岸の豊前市小石原泉遺跡[註40]などでオンドル状遺構（L字状カマド）をもつ竪穴住居跡が確認されており、

調査例は徐々に数を増してきている[註41]。

豊前国では田河・京都・仲津・上毛・下毛・宇佐の各郡で古代寺院の存在が確認されているが、屋瓦から渡来系氏族との関わりも推測されている。当地域では山国川を挟んで上毛郡に垂水廃寺[註42]、下毛郡に相原廃寺[註43]があり、両者の距離は約2.5kmである。垂水廃寺は昭和48年～50年にかけて三カ年計画で、村内最初の学術調査が行われ、方二町と推察される寺域が推定されたが、トレンチ調査という制約もあり伽藍配置等まだ判然としない部分が多い。出土瓦は百済系単弁軒丸瓦・重弧文軒平瓦のセットの他、新羅系複弁軒平瓦、唐草文軒平瓦との組合せが考えられている。供給瓦窯としては、大平村友枝瓦窯跡[註44]、新吉富村桑野窯跡[註45]・同山田窯跡[註46]などがある。友枝瓦窯跡は垂水廃寺の南西約2.5kmの所に位置する地下式有階有段の登窯で国指定史跡である。山田窯跡は須恵器も焼成した瓦陶兼業の半地下式無段の登り窯で、垂水廃寺の瓦を焼いているが、軒先瓦は出土していないようである。

また、平成７年度より調査の開始された官道推定線に隣接する大ノ瀬下大坪遺跡[註47]が、上毛郡の郡衙政庁跡に比定されることとなった。また、大ノ瀬下大坪遺跡の南東約0.7kmに位置する池ノ口遺跡においては、従来から官道ルートに推定されていた付近で古代官道と思われる遺構が確認されている。上毛郡衙の正倉は未発見であるが、南に0.7km程離れた下島ヲカ遺跡[註48]では倉とみられる建物跡が２棟確認されており、現在の新吉富村の平野部一帯が上毛郡の中心であったことは、疑いないであろう。

郡は異なるが、山国川を渡った官道推定線上で、東に約2.7kmの所に位置する大分県中津市長者屋敷遺跡[註49]では、下毛郡衙の郡倉が確認されており、墨書土器も出土している[註50]。

当遺跡からわずか0.5km程、東方向に見上げる雄熊山には、古代の烽跡の存在も指摘されるが、現在確認されているのは近世の烽跡のみであり[註51]、今後の調査に期待される。

墓制としては、中桑野遺跡で９世紀代のものと思われる火葬墓が単独で一基検出されている。また中津市相原山首遺跡[註52]は、７世紀から９世紀にかけての群集墳であるが、横穴式石室の使用が途絶え、８世紀中頃から後半に火葬墓へと移行する墓制の変遷がみられる。

中世になると村内では牛王城跡、成恒城跡、緒方城跡、尻高城跡等々幾つかの城跡ががその名をとどめているが、詳細については不明な部分が大きかった。しかしながら大字安雲地内で、中世の居館跡[註53]と思われる遺構が確認されるなど、中世の遺跡もしだいに明らかになりつつある。また、青磁・白磁等の輸入陶磁器を伴う墓坑等も多数検出されており、安雲城跡の名を残す地でもあり宇都宮氏との関連も想定される。

註１　千田　昇他「山国川流域の地形」(『山国川－自然・社会・教育－』　大分大学教育学部　1989)

註２　賀川　光夫「原史」(『本耶馬渓町史』　1987)

註３　小池　史哲「旧石器時代」(『豊前市史　考古資料』　1995)

註４　賀川　光夫「原史」(『本耶馬渓町史』　1987)

註５　福岡県教育委員会「吉木遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第83集　1989)

註６　賀川　光夫「植野貝塚」(『中津市史』　1965)

註７　賀川　光夫「高畑遺跡」(『中津市史』　1965)

註８　大平村教育委員会「原井三ッ江遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第５集　1989)

註９　福岡県教育委員会「上唐原遺跡　Ⅱ」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第５集　1996)

註10　大平村教育委員会「土佐井遺跡群」(『大平村文化財調査報告書』第６集　1990)

註11　渡辺　正気「福岡県築上郡新吉富村垂水遺跡調査報告」(『古文化談叢』第11集　1983)

註12　大分県教育委員会「佐知遺跡」(『大分県文化財調査報告書』第81輯　1989)

註13　福岡県教育委員会「中村石丸遺跡」(『一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第８集　1996)

註14　小池　史哲「小石原泉遺跡」(『豊前市史　考古資料』　1993)

註15　平成10年度、大平村教委が圃場整備事業に伴い調査。現地説明会資料等。

註16　宮本　工「先史・原始時代」(『大平村誌』　1986)

註17　新吉富村教育委員会「中桑野遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第３集　1978)

註18　新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡　垂水高木遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第８集　1994)

註19　新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡　垂水高木遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第８集　1994)

註20　新吉富村教育委員会「尻高畑田遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第７集　1992)

註21　福岡県教育委員会「上唐原遺跡　Ⅰ」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第２集　1995)

註22　大平村教育委員会「穴ヶ葉山遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第８集　1993)

註23　福岡県教育委員会「金居塚遺跡　Ⅱ」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第７集　1997)

註24　福岡県教育委員会「金居塚遺跡　Ⅰ」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第４集　1996)

註25　大平村教育委員会「能満寺古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第９集　1994)

註26　吉富町教育委員会「楡生山古墳」(『吉富町文化財調査報告書』第３集　1991)

註27　北代茂ほか「山田古墳」(『新吉富村誌』1990)

註28　新吉富村教育委員会「桑野題古墳」(『新吉富村文化財調査報告書』第４集　1989)

註29　新吉富村教育委員会「宇野台古墳」(『新吉富村文化財調査報告書』第５集　1990)

註30　福岡県教育委員会「金居塚遺跡　Ⅰ」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第４集　1996)

註31　大平村教育委員会「穴ヶ葉山古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第３集　1985)

註32　丹羽　博「平原横穴墓群」(『豊前市史　考古資料』　1993)

註33　宮本　工「先史・原始時代」(『大平村誌』　1986)

註34　大分県教育委員会「上ノ原横穴墓群Ⅰ～Ⅲ」(『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告（２）～（４）』　1989～91)

註35　新吉富村教育委員会「垂水廃寺」(『新吉富村文化財調査報告書』第２集　1976)

註36　新吉富村教育委員会「照日遺跡群」(『新吉富村文化財調査報告書』第９集　1995)

註37　平成10年度、大平村教委が村道新設工事に伴い調査。現地説明会資料等。

註38　亀田　修一「九州の古墳と寺院－豊前地域の場合－」(『季刊考古学』第60号　雄山閣出版　1997)

註39　福岡県教育委員会「池ノ口遺跡」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第３集　1996)

註40　平成５～７年度にかけて、豊前市教委が豊前東部工業用地造成に伴い調査。

註41　平成6年度より開始された県営圃場整備事業および平成7年度より開始された団体営圃場整備事業に伴い、新吉富村教委が発掘調査。

註42　新吉富村教育委員会「垂水廃寺」(『新吉富村文化財調査報告書』第２集　1976)

註43　中津市教育委員会「相原廃寺Ⅰ～Ⅲ」(『中津市文化財調査報告』第７・８・10集　1989～91)

賀川　光夫「相原廃寺」(『中津市史』　1965)

註44　大平村教育委員会(『友枝瓦窯跡』　1976)

大平村教育委員会「友枝遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第４集　1988)

註45　森田　勉「垂水廃寺」・「友枝瓦窯跡・山田窯跡」(『九州古瓦図録』九州歴史資料館編　1981)

註46　新吉富村教育委員会「垂水廃寺」(『新吉富村文化財調査報告書』第２集　1976)

新吉富村教育委員会「照日遺跡群」(『新吉富村文化財調査報告書』第９集　1995)

註47　新吉富村教育委員会「大ノ瀬下大坪遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第10集　1997)

新吉富村教育委員会「大ノ瀬下大坪遺跡Ⅱ」(『新吉富村文化財調査報告書』第11集　19998)

註48　平成９年度に生涯学習・保健福祉複合センター（仮称）建設に伴い、新吉富村教委が発掘調査。

註49　平成７年度に市営住宅改築に伴い、中津市教委が発掘調査。現地説明会資料、九州古代官衙シンポジウム発表資料等。

高崎　章子「中津市　長者屋敷遺跡について」(『大分・大友土器研究　第17号』大分・大友土器研究会　1997)

註50　高崎　章子「中津・宇佐地方の文字資料」(『大分・大友土器研究　第20号』大分・大友土器研究会　1997)

註51　松本　一男、北代　茂、喜多代　正文「烽火台の跡」(『新吉富村誌』1990)

註52　中津市教育委員会「永添遺跡　中津城跡　ホヤ池窯跡」(1993年度中津地区遺跡群発掘調査概報（VI)』　1994)

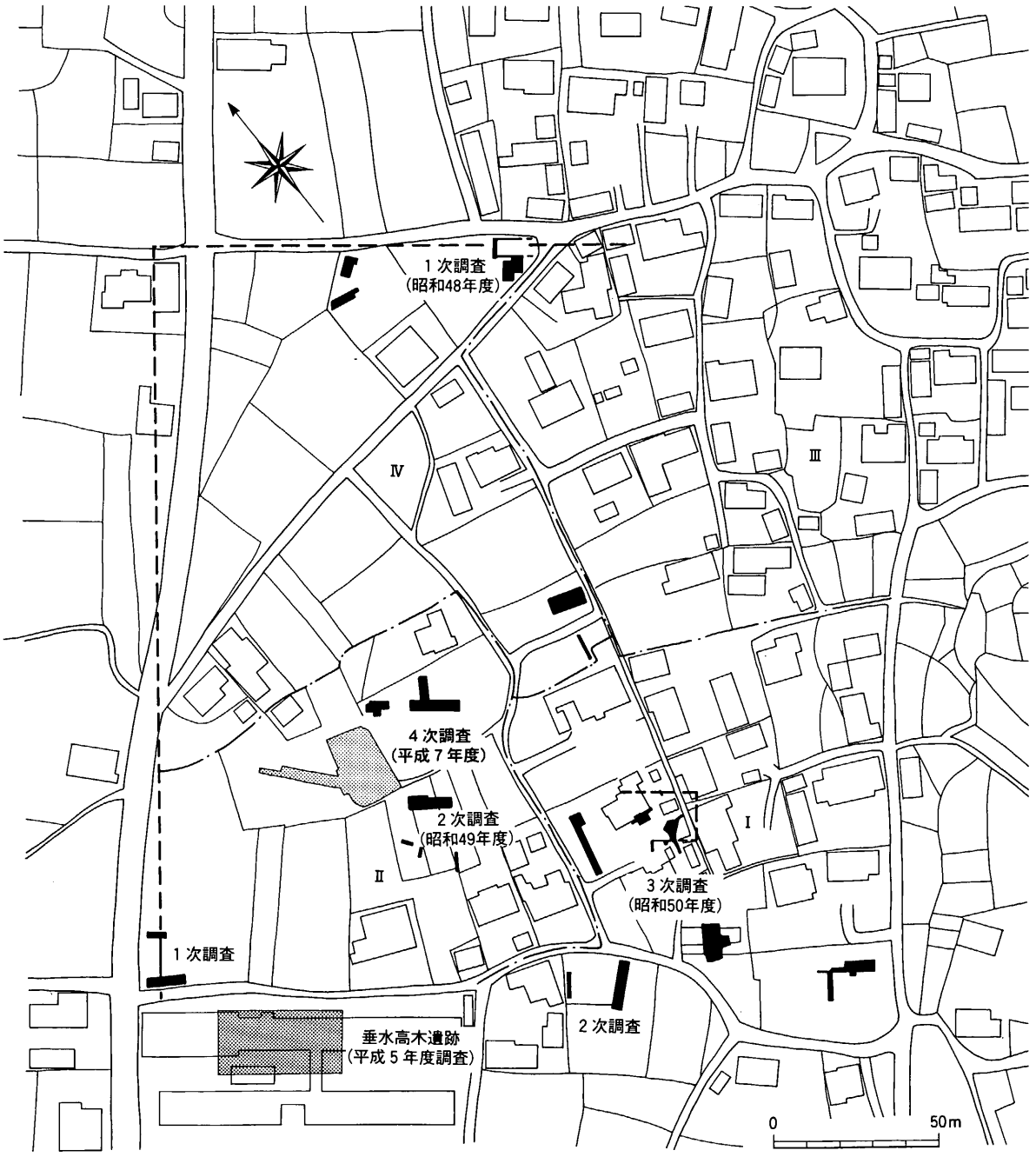
中津市教育委員会、高崎章子氏のご教示による。

註53　平成10年度、新吉富村教委が圃場整備事業に伴い調査。堂ノ本遺跡等。

Ⅲ. 調査の内容

1）垂水廃寺跡

垂水廃寺は、新羅系の精美な瓦当を出土する遺跡として古くから注目されており、昭和48～50年度にかけて範囲確認調査が実施された[註1]。当時、礎石建物の一部を確認したが、調査範囲が狭小であるなどの理由から規模・性格を把握することができず、推定官道に接する方二町の寺域を想定するにとどまった。次いで、平成５年度、推定寺域に隣接する南吉富小学校講堂改築工事に伴い、その建設予定地内の発掘調査を実施した[註2]。ここで、弥生時代の住居跡などとともに、古墳時代後期の住



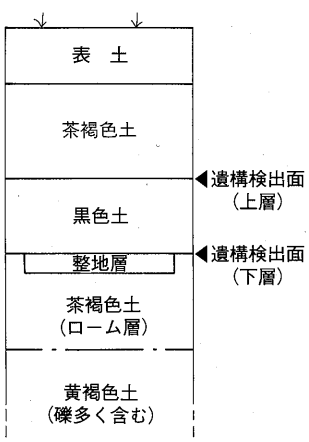
第３図　垂水廃寺周辺の調査区域図（1／2,000）

居跡、廃寺の瓦をカマドの袖に使用した住居跡、そして南北に近く方位をとる大型の掘立柱建物跡などを検出した。方位の全く異なる建物跡の発見は実体不明の廃寺に新たな問題を提起した。

今回の調査原因は推定寺域内に無花果の苗を植樹するということであった。植樹行為そのものはほとんど掘削を伴わないということであるが、無花果の成長に伴い、将来的にかなりの破壊行為を招くことは容易に予想された。内容が不分明な重要遺跡であることに鑑み、村教育委員会が地権者等のご理解を得て事前の発掘調査を行ったものである。

ⅰ）調査概要

今回の発掘調査では上下二層において遺構面を確認した。このうち、上層では掘立柱建物１棟・溝状遺構１条・土坑１基・ピットを含むその他の遺構を、下層では掘立柱建物１棟と溝状遺構１条を検出した（第５図）。



第４図　層位模式図

調査はまず上層の遺構を調査し、その後、試掘で確認していた下層の整地層の広がりと性格を確認することを主目的として実施した。調査の方法については上層の遺構面まで重機で堆積土を除去した後に杭で３ｍ間隔の方眼を組んで地区を設定し、地区名・遺構番号を付して遺物を取り上げた。その際、調査地近くに国土座標が存在しなかったため、磁北を基準とし、発掘区の南東隅より北方向にアルファベット（Ｂ・Ｃ…）、西方向は数字（01・02…）で区割りした。今回の発掘区は既存の地区割りに従うと６ＫＴＭ－Ⅱ－Ｇ区にあたり、小地区はＧＢ01例のように表示される。なお、遺構番号については、現場において遺構種別に関わらず既往の調査からの通しで「Ｓ」番号をつけて遺物を取り上げ、報告段階でそれぞれ略号・遺構番号を付した（ＳＢ：掘立柱建物、ＳＤ：溝状遺構、ＳＫ：土坑、ＳＸ：不整形な土坑状の溜まり・ピット等）。

発掘区の基本層序は、上から表土（耕作土）→茶褐色土（遺物包含層）→黒色土（遺物包含層）→茶褐色粘質土（地山）に至る（第２図）。遺構面は黒色土の上面（上層）と茶褐色土の上面（下層）である。地山は下部に行くに従って礫を多く含む黄褐色土に漸移的に変化する。遺構検出面はほぼ水平で、標高は21.6ｍ前後を測る。

ⅱ）遺　構

（１）上層遺構

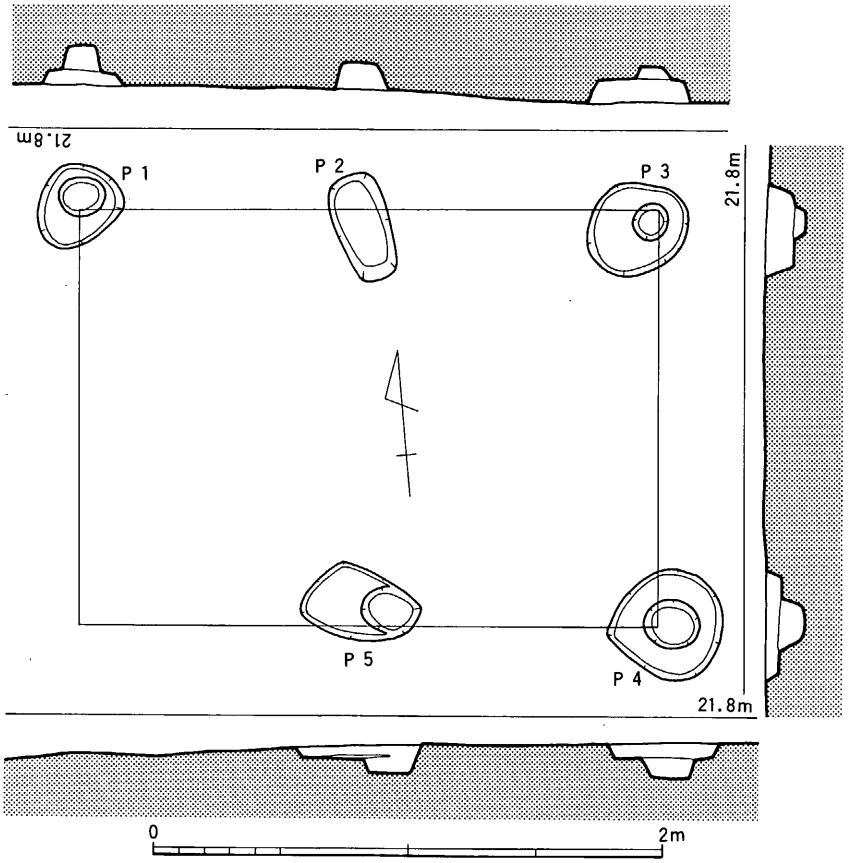
掘立柱建物

ＳＢ031（第４図）

発掘区の北東寄りで検出した１間×２間の東西棟掘立柱建物である。建物規模は梁行1.65ｍ、桁行2.30ｍ。南西側の隅柱は残存していない。隅柱の柱掘形は円形で、径0.35～0.40ｍを測る。側柱の中央の柱掘形（Ｐ２・Ｐ５）は0.20×0.35ｍの長円形を呈する。いずれの掘形にも柱痕跡が確認できないことから柱は抜き取られているものと見られ、また、掘形底部に残る圧痕により柱の径は10㎝程と考えられる。



第5図　垂水廃寺遺構配置図（1／100）



第6図　ＳＢ031実測図（1／30）

溝状遺構

ＳＤ032（図版５、第５図）

発掘区の南壁際で検出した東西方向の溝状遺構。長さ９ｍ分を確認し、さらに発掘区外に延びている。上端幅2.15～3.00ｍ、下端幅0.70～0.80ｍ、深さ0.5ｍを測る。北側にテラスをもつ。

ＳＤ034（第5図）

発掘区の北半部で検出した溝状遺構。長さ６ｍ分を確認したが、さらに発掘区外の北側に延びている。上端幅0.4～1.0ｍ、下端幅0.3～0.6ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は黄茶色土。須恵器の杯身が出土した。

土坑

ＳＫ035（第３図）

発掘区の中央部やや北東寄りで検出した円形の土坑。径1.0ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は黄茶色土。須恵器杯蓋が出土した。

その他の遺構

ＳＸ036（第５図）

発掘区北半部、東壁際で検出した。溜まり状の遺構と考えられ、東側は発掘区外に延びている。深さは0.1～0.3ｍを測り、底面は凹凸が著しい。埋土中には小礫を多く含む。瓦の他近世陶磁器の

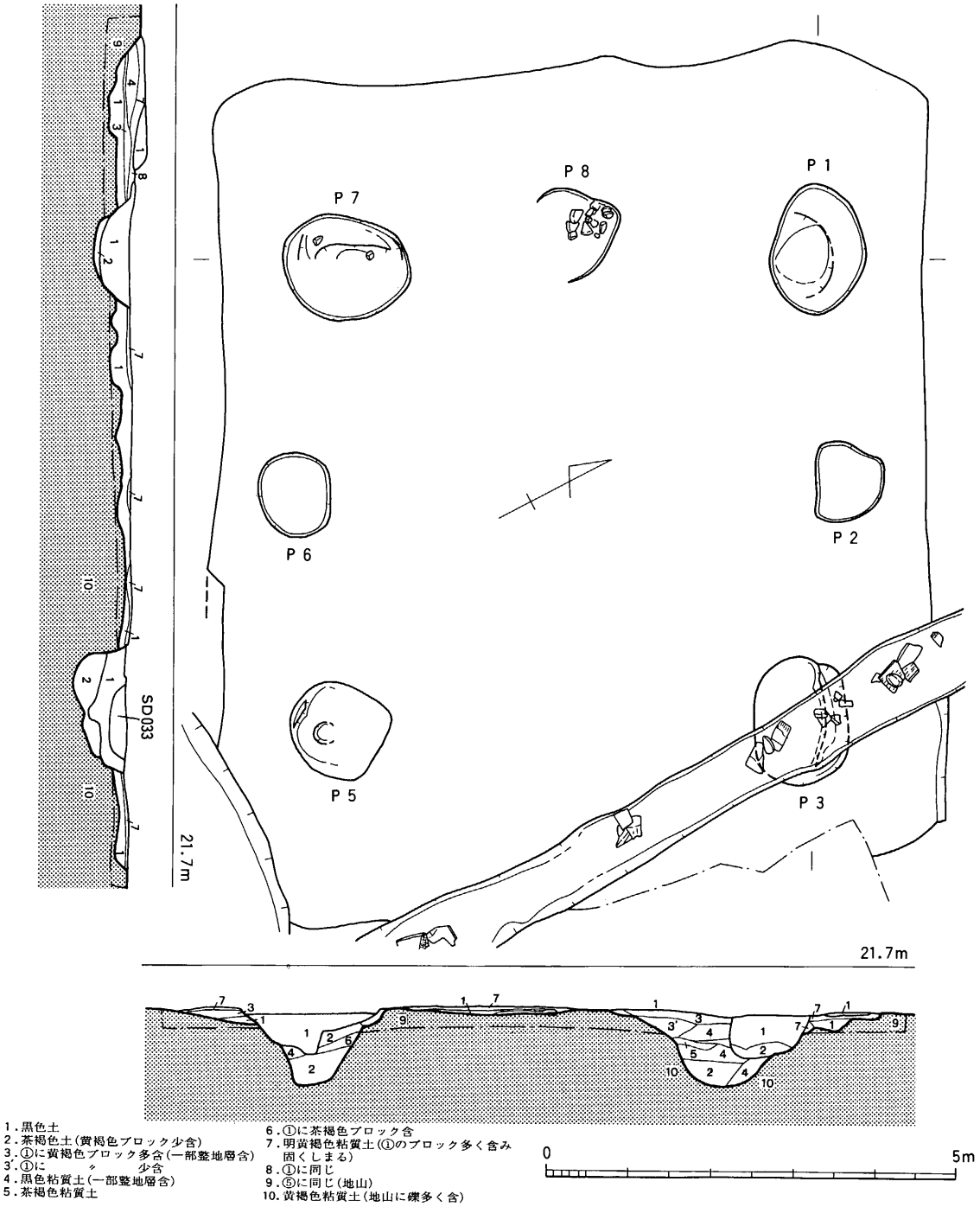
小片が出土した。

ＳＸ037（第５図）

発掘区の中央部で検出したピット。径0.5×0.6m、深さ0.1mを測る。

ＳＸ038（第５図）

発掘区の北東隅部で検出したピット。径0.4m、深さ0.1mを測る。



第７図　ＳＢ030実測図（1／80）

（２）下層遺構

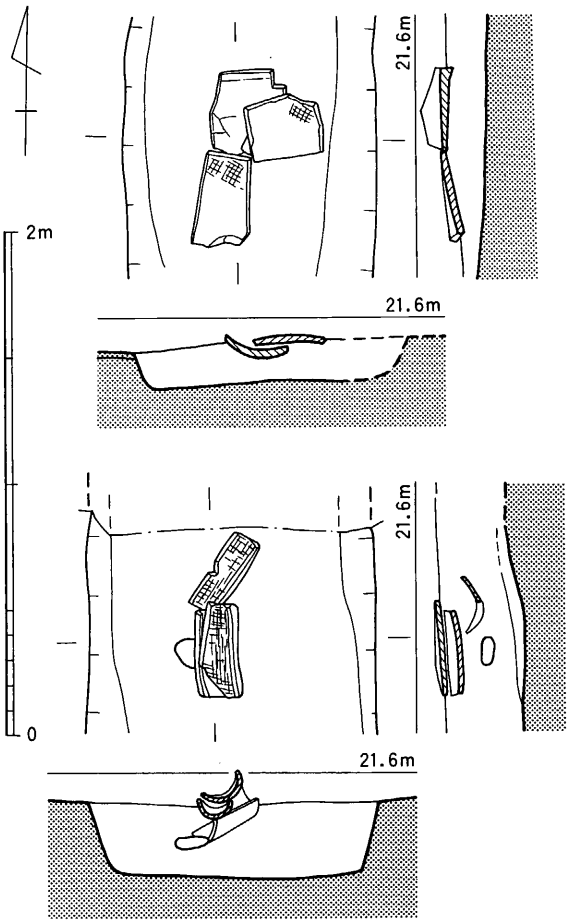
掘立柱建物

ＳＢ030（図版２・３、第７図）

発掘区の南半部で検出した２間×２間の掘立柱建物跡で整地層を伴っている。柱掘形は平面プランを確認した後、幅30cmのトレンチを設けてその幅を掘形底面まで掘り下げたのみである。断面観察では柱はすべて抜き取られているが、建物規模は5.8ｍ×5.8ｍほどに復元される。側柱の中央の柱掘形は隅柱に比べて浅いため、辛うじて確認できたのみである。隅柱の掘形は楕円形ないしは不整円形で1.15ｍ×1.15ｍ～1.15×1.60ｍを測る。掘形埋土の状況を見ると大きく２層に分かれる。上層の黒色土（第７図①）はいずれも下層の掘形の底面まで達していない。また、下層の掘形埋土は版築状をなさず、さらにその形状もばらつきが大きい。これらのことから上下二層の在り方は同一場所での建て替えの痕跡とするのが妥当であると考えられる。Ｐ５・Ｐ７上層の土層の形状を柱痕跡が一部生きたものとすれば、上層も掘立柱建物であると思われる。

建物に伴う整地層の範囲は9.0ｍ×10.4ｍを測る。整地はこの範囲を一旦掘り下げた後に黒色土と黄褐色粘質土のブロックを含む黒色土で埋めて平坦にし、その上に砂礫・小礫を多く含む明黄褐色粘質土（黒色土のブロックを含む）層を載せている。この層は叩き締めが行われたようでひじょうに固くなっている。柱掘形の深さ等から考えると、この建物は基壇状の高まりを有するものであったことが推察されよう。今回確認された建物を取り込む整地は、この基壇状の高まりに伴うものであると性格づけることができる。また、屋根の構造については、建物の梁間・桁間の数値が一致するのに対し整地範囲に長軸・短軸が見られることから、北東－南西棟の軒の出が長い切妻構造になるものと想定できようか。

なお、ＳＢ030は後述するＳＤ033によって切られている。



第８図　SD033遺物出土状況実測図（1／30）

溝状遺構

ＳＤ033（図版４・５、第５・８図）

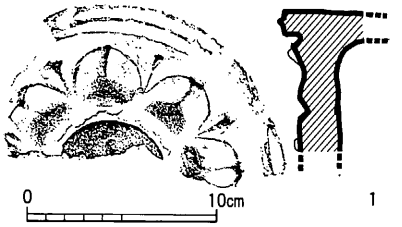
発掘区の東壁際で検出した南北方向に走る溝状遺構である。ＳＢ030の整地層及び柱掘形を切る。長さ19ｍ分確認し、さらに発掘区外に延びる。ＳＤ032に切られる。上端幅0.70～1.15ｍ、下端幅0.50～0.90ｍ、深さ0.30ｍを測る。埋土上層から百済系単弁軒丸瓦・重弧文軒平瓦をはじめとする多くの瓦が出土した。遺構の埋土は黒色土。

（iii）遺　物

瓦類

軒丸瓦（図版６、第９図）

１は百済系単弁軒瓦で、ＳＤ033から出土している。瓦当の1/3ほどが残る。瓦当の周縁には一重圏文を廻し、その中に八葉の単弁と逆三角形の間弁を配す。中房には蓮子の痕跡が２箇所に残る。復原瓦当径16.3㎝、復原中房径6.4㎝を測る。



第９図　軒丸瓦実測図（1／4）

軒平瓦（図版６、第10・11図）

今回の調査では重弧文軒平瓦と扁行唐草文軒平瓦の２種が出土している。以下、大分類は『垂水廃寺』の分類に準拠し、それぞれ第Ⅰ類・第Ⅱ類として説明する[註3]。

第Ⅰ類

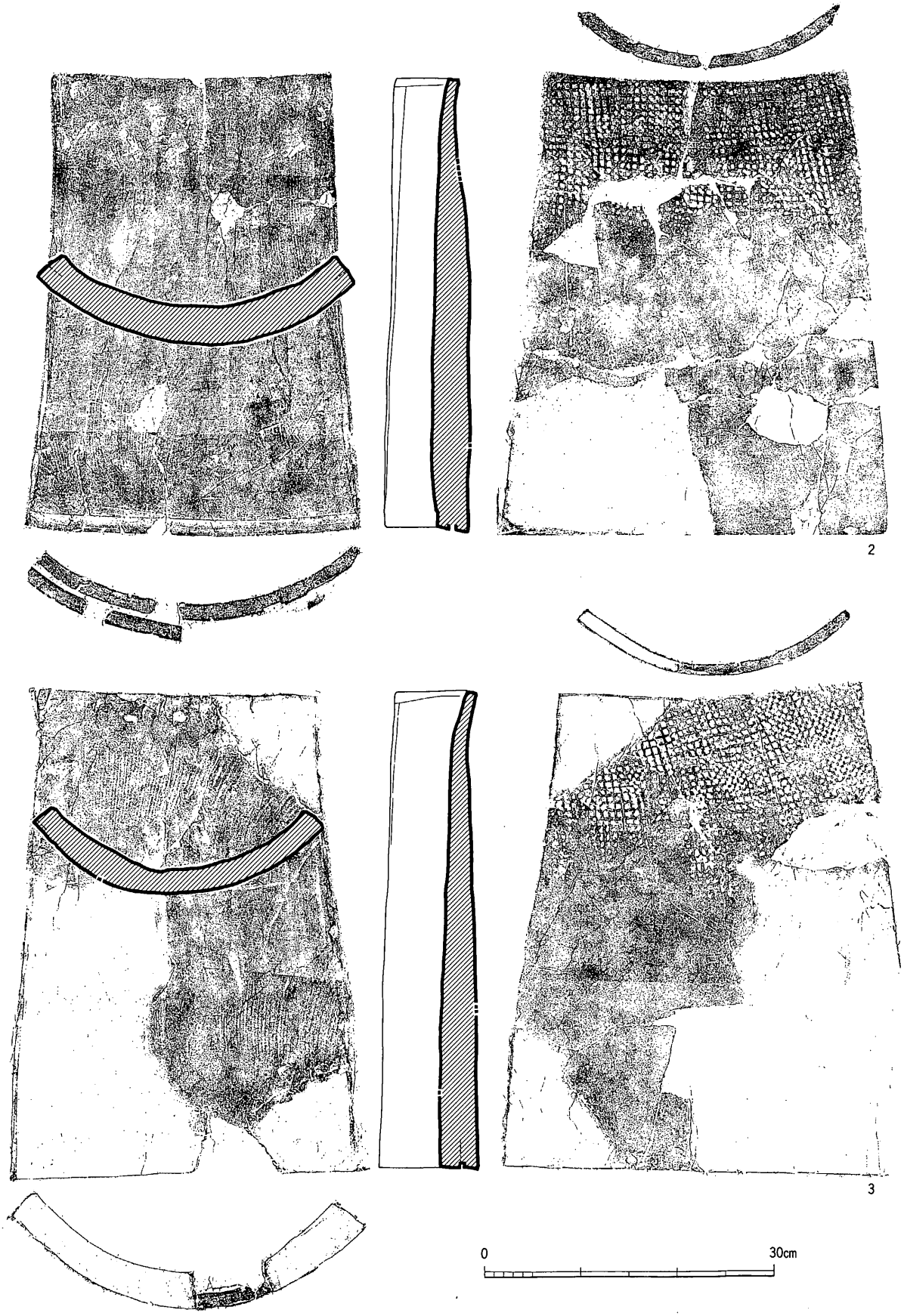
瓦当面に細い１本の沈線をもつ二重弧文の軒平瓦で７点出土し、うちＳＤ033から出土した４点を図示している（２～５）。残りの３点はいずれも小破片で１点はＳＤ032から、他の２点は表土よりの出土である。いずれも顎部に段を持たないタイプで、剥離痕から２枚の粘土板を合わせて成形されていることが知れる。

瓦当面に施された沈線の入れ方には２種が認められる。２～４は幅４～５㎜、深さ４～９㎜で断面形状がコ字形になる（ａ類）。一方、５を含む他の４点は幅２㎜、深さ２㎜で断面形状がＶ字形になる（ｂ類）。両者の瓦当の厚みを見てみるとａ類が3.5～4.2㎝（平均3.9㎝）、ｂ類は3.0～3.4㎝（平均3.1㎝）となり、両者間に厚みの相違がある。第１～３次調査分で図示されているものはすべてｂ類にあたり、その瓦当幅も今回得られた数値幅内で収まっている。

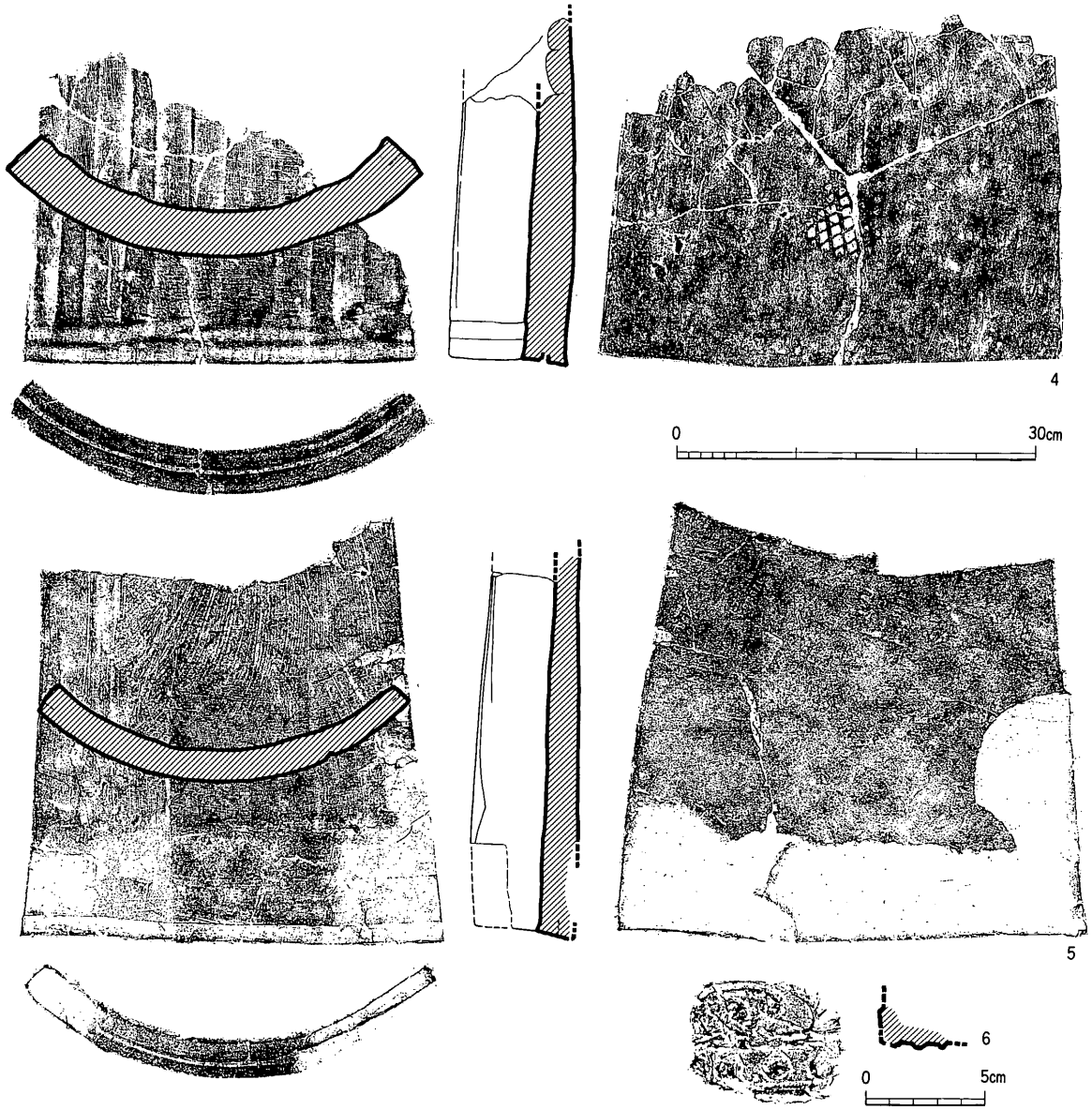
２は全長47.0㎝、狭端幅27.6㎝、広端幅34.0㎝を測る。調整は凸面の狭端側が正方形格子の叩打痕を残し、広端側が叩打後タテ方向のケズリ。広端際はヨコ方向のケズリ。凹面には布目後ナデで、模骨痕が残る。模骨となった桶側板の枚数は８枚を数える。狭端側に幅2.5㎝の叩打具痕が残る。側面の調整はケズリ。剥離面に残る粘土板内側の調整は指おさえ後平行タタキ。３は全長49.7㎝を測る。調整は凹凸面とも２と同様である。側面はケズリ後ナデを行なう。剥離面に残る粘土板内側の調整は板ナデ。４は残存長29.0㎝、広端幅35.0㎝を測る。調整は凸面の広端側に一部斜格子の叩打痕を残すが、ケズリの後タテ方向のナデによって消されている。広端際はヨコ方向のナデ。凹面には12枚分の模骨痕が残っている。側面の調整はケズリ後、部分的にナデを行なう。成形はやはり２枚の粘土板による基本は他と同様である。しかしながら、個々の粘土板の調整がほとんど行われておらず、径2.0～3.5㎝ほどの粘土塊の形状が残ったままになっている（図版７）。粘土塊の切り合いから、狭端側から広端側に向かって成形していることが知れる。５は残存長31.9㎝を測る。調整は凸面の広端側が長方形格子の叩打後ヨコ方向のケズリ。凹面は布目後ナデで、広端際はヨコ方向のケズリ。７枚分の模骨痕が残る。側面はケズリ後、一部ナデを行なう。剥離面に残る粘土板内側の調整はナデで、一部ハケ目を残す。

第Ⅱ類

６は扁行唐草文軒平瓦の瓦当下半部の小破片である。瓦当面の唐草は右流れで、下顎面には３個



第10図　軒平瓦実測図１（1／6）



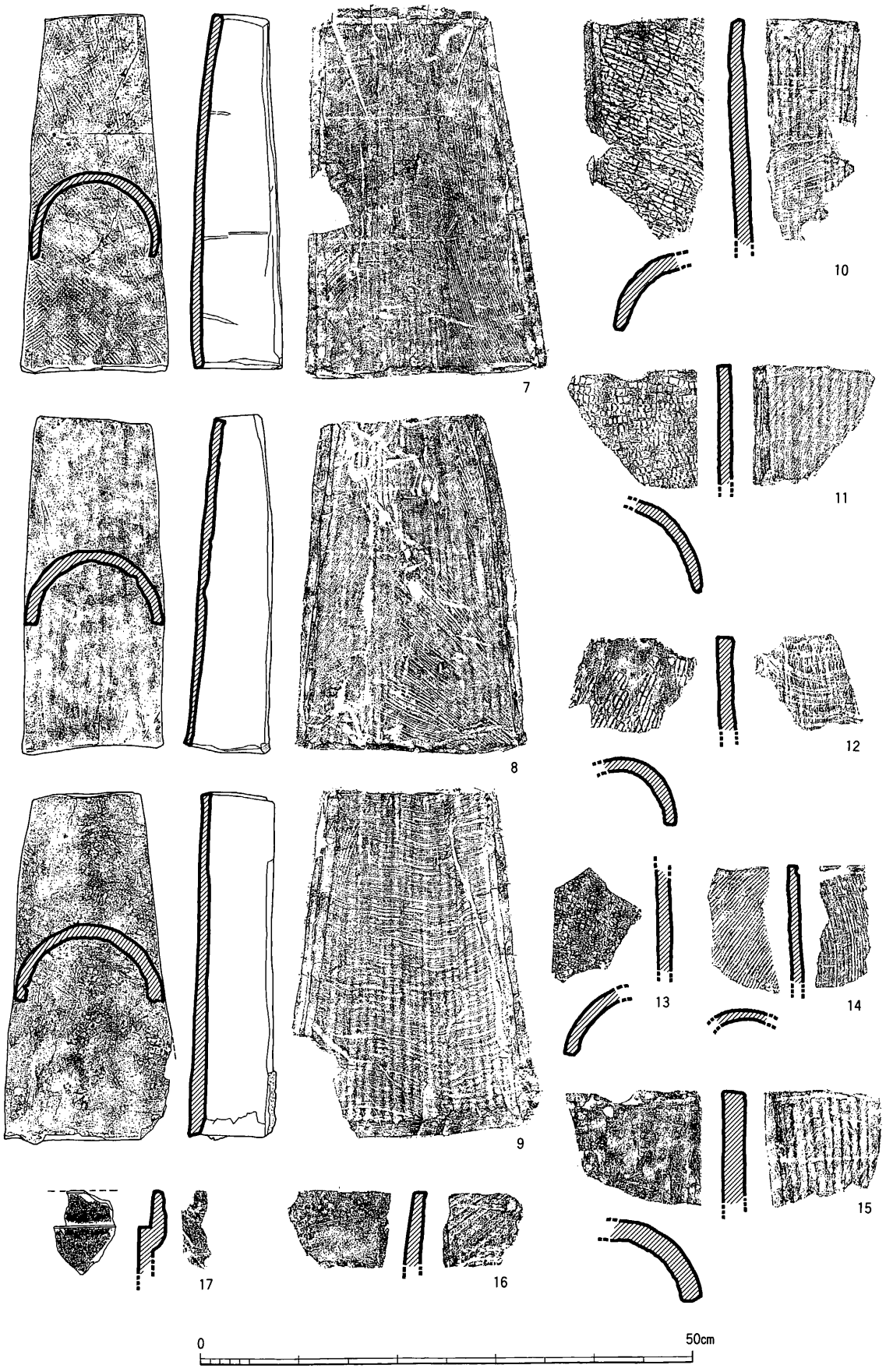
第11図　軒平瓦実測図２（1／6・1／3）

の珠文と界線が認められる。ＳＢ033Ｐ－８の上部黒色土中より出土した。

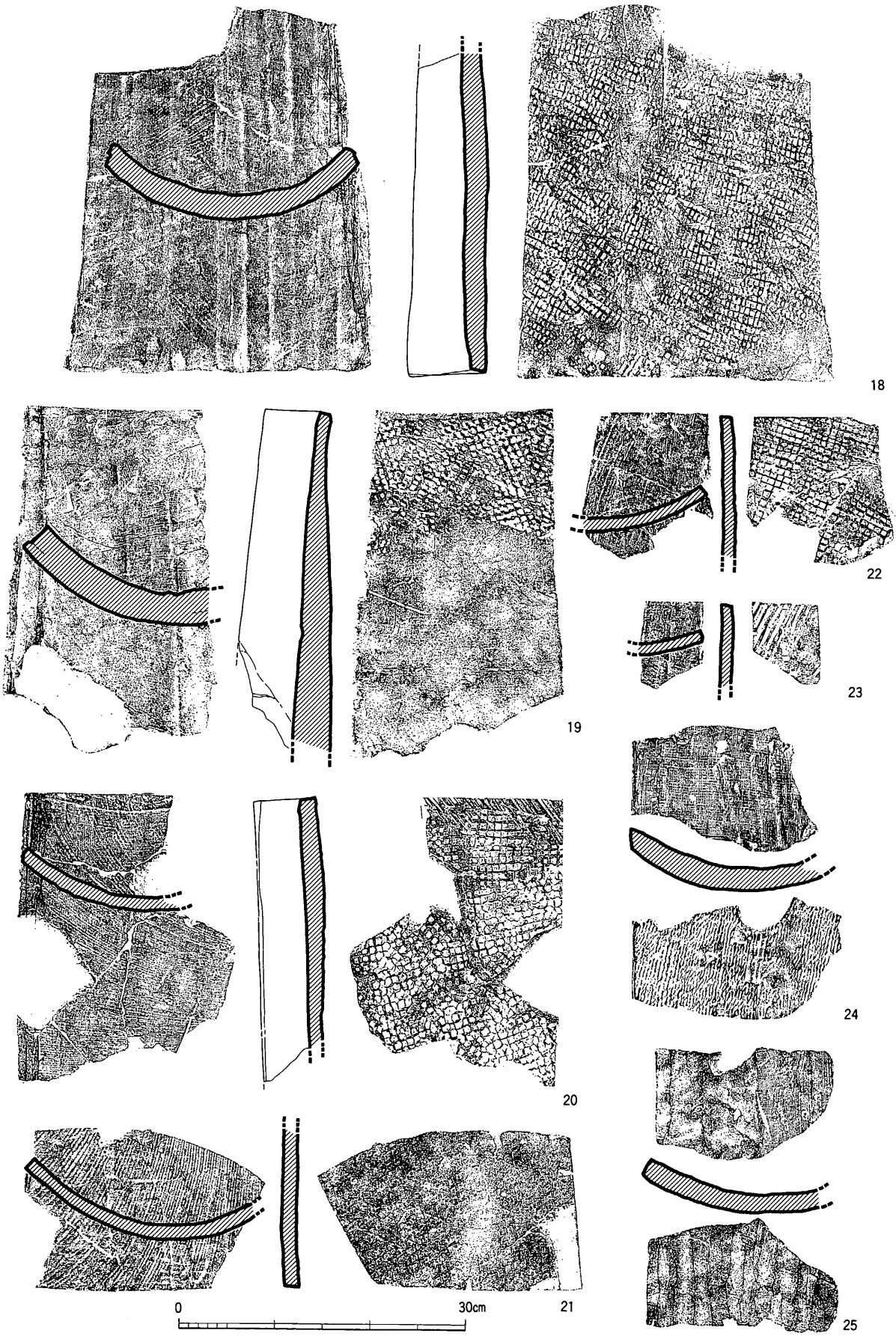
丸瓦（図版６・７、第12図）

丸瓦は総数15点程しか出土していない。このうち完形に近いものはすべて行基葺で、玉縁を持つものが一点のみ出土している。

７は全長36.4cm、狭端幅10.1cm、広端幅15.0cm、厚さ1.3cmを測る。調整は凸面に平行の叩打痕を全面に残し、その上から軽くナデている。凹面には布目が残り、竹状模骨痕が残る。このように竹状模骨を有する丸瓦は百済系単弁軒丸瓦とセットになるものと考えられる。両側縁部付近はハケ様の強いナデ。側面はヘラで分割した後、ナデ調整を行なう。端部はヘラケズリ。８は全長34.4cm、狭端部幅11.8cm、広端部幅14.5cm、厚さ1.3cmを測る。凸面の最終調整は丁寧なナデ、凹面には布目と竹状模骨痕が残る。側はヘラで切り離し、凹面との境には面取りを施す。凸面には自然釉がかか



第12図　丸瓦実測図（1／6）



第13図　平瓦実測図（1／6）

る。9は全長35.4cm、狭端幅11.2cm、広端幅16.7cm、厚さ1.8cmを測る。調整・色調とも8に似るが、凸面には細かい格子の叩打痕が、凹面には竹状模骨痕が残る。凸面には自然釉が残る。7～9はSD033より出土。10は凸面に長方形格子に数本の直線が横切る叩打痕を残すもの。凹面には竹状模骨痕と模骨の綴じ紐痕跡が残る。残存長23.0cm、厚さ1.9cmを測る。11は凸面に長方形格子の叩打痕を残すもの。凹面には竹状模骨痕が残る。残存長12.0cm、厚さ1.7cmを測る。10・11は表土より出土。12は凸面に平行の叩打痕を残すもの。残存長10.9cm、厚さ2.1cm。SX036より出土。13は凸面に細かい格子の叩打痕を残すもの。厚さ1.9cm。14は凸面に細かい平行叩きを持つもの。器壁が薄く1.3cmを測る。ピット出土。15は残存長12.5cm、厚さ2.6cm。調整は凸面が正方形格子の叩き、縦方向のケズリ後ナデ。SD036より出土。16は残存長7.9cm、厚さ1.8cmを測る。凹面に竹状模骨痕が残る。17は唯一玉縁となるもの。

平瓦（図版7、第13図）

平瓦は総数140点あまりが出土し、そのうち8点を図示した。

18は残存長39.0cm、広端幅28.4cm、厚さ2.6cmを測る。調整は凸面に長方形格子に数本の直線が横切る叩打痕を全面に残す。凹面には布目と12枚分の模骨痕が残る。側面の切り離しは粘土帯中位までヘラを入れ模骨をはずした後に打ち割っており、その後ヘラで削って調整する。19は残存長31.6cmを測る。調整は凸面の狭端際は正方形格子の叩打痕を残し、他はタタキの後ヘラケズリを行なう。18・19はSD033より出土。20は残存長29.4cm、厚さ2.2cmを測る。調整は凸面に正方形格子の叩打痕を残し、凹面は布目痕が残る。SD030掘形上部の新期ピットより出土。21は残存長16.8cmを測る。調整は凸面は斜格子の叩打痕を残し、凸面には布目が残る。黒色土より出土。23は残存長8.8cmで厚みは22と同じで薄く仕上げられている。凸面は平行の叩打痕を、凹面には布目を残す。24は残存長12.5cm、厚さ2.7cmを測る。凸面に縄目の叩打痕を、凹面に布目を残す。22～24はSD032より出土。25は残存長11.5cm、厚さ2.4cmを測る。調整は両面ともケズリ。凹面には布目を残す。黒色土より出土。

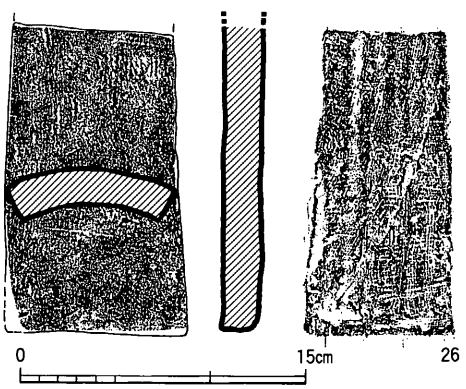
熨斗瓦（図版7、第14図）

26は残存長16.5cm、残存幅9.6cm、厚さ2.2cmを測る。凸面は縄目の叩打痕がわずかに残るが、ケズリとナデによってほとんど消されている。側面はケズリの後ナデ調整を行なう。表土より出土。

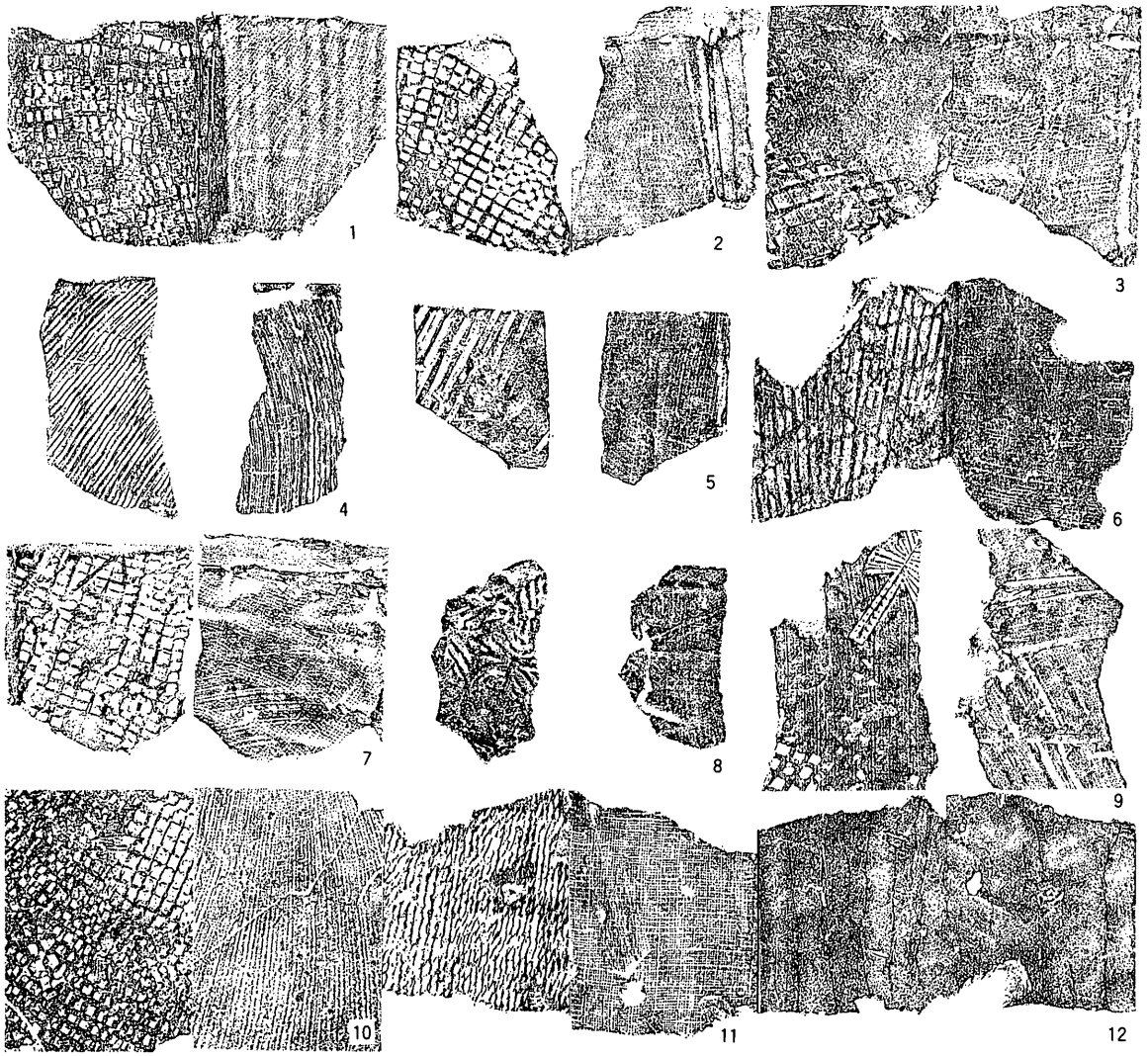
叩文様（第15図）

今回出土した瓦は150点あまりを数え、この中には多種にわたる叩文様が存在する。分類については『垂水廃寺』に従って記述することとする。

叩文様は凹凸面とも布目であるG類を除いたA～F類と、今回分類に加えたH類の7種が認められる。A類は格子文で、正方形・長方形・斜格子の3種がある（1・2・3）。この類は最も出土量が多く、丸瓦7点、平瓦80点が出土している。B類は平行文で原体の幅が狭いものと広いものがある（4・5）。前者は器壁が全体に薄いものが多く、須恵器甕にみられる叩打痕と共通する。丸瓦4点、平瓦20点が出土している。C類は平行文あるいは格子文に数本の直線が横切るものである（6・7）丸瓦1点、平瓦5点が出土。D類は蜘蛛の



第14図　熨斗瓦実測図（1／4）



第15図　叩文集成図（1／4）

脚状文と草葉文がある（８・９）。後者には正方形格子の叩きが伴う。平瓦４点出土。Ｅ類は二種の叩打具が用いられるもので、今回は格子２種の類が出土した（10）。平瓦１点出土。Ｆ類は縄目文で、これまでの出土傾向と同様、Ａ類についで出土量が多い。丸瓦１点、平瓦40点出土。Ｈ類は内外面ともケズリ調整を行なうもので丸瓦１点が出土した。

ここで軒平瓦と叩文の関係に触れてみると叩文が残る４点ともＡ類で、うち２点が正方形格子、１点が長方形格子、１点が斜格子となり、これは先の調査の結果と同様である。このことから重弧文軒平瓦にはＡ類の叩文が伴うものが基本であることが窺えよう。

土器類

ここでは下層面より古い遺構からの混入と考えられる出土土器類について記述する。

弥生土器（第16図）

壺（27～37）　27～35は壺の肩部の破片。27～32・34は羽状文を施す。33は上部に三角文、下部に二重弧文をいずれも貝殻腹縁にて施文する。35は屈曲部に貝殻腹縁による刻目突帯を有すもので、その下部に竹管文を配する。調整はいずれも内外面ともミガキを施し、33の内面のみはナデ調

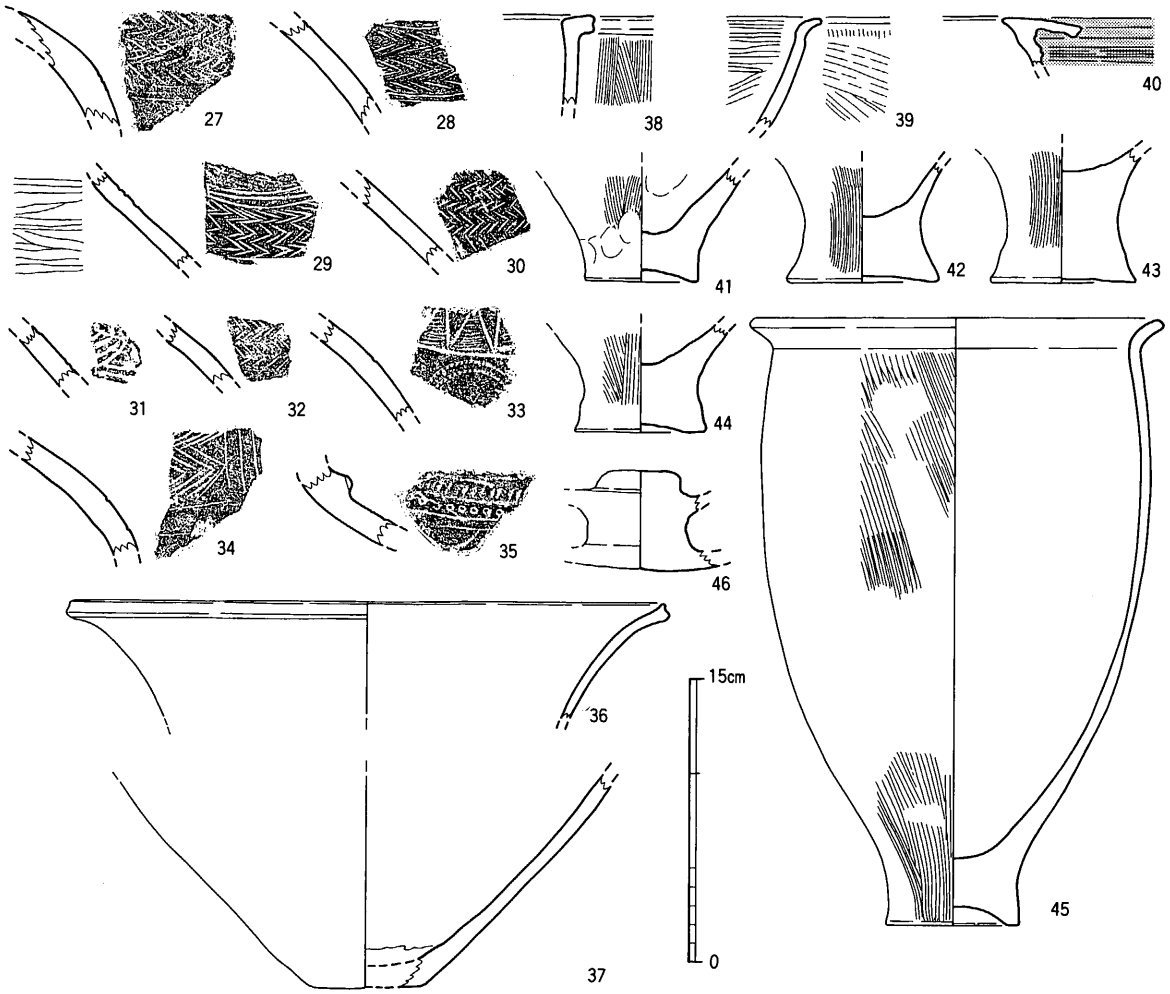
整。色調は27・28・30・32が黄灰色、29が明黄褐色、31・34が黄褐色、33が橙褐色、35が暗茶褐色。胎土は概して精良で、33のみは砂粒を多く含む。36・37は広口壺で同一個体の可能性もある。35は復元口径31.6cm、37は復元底径6.0cm。

甕（38～45）　38～40は口縁部の破片。38の調整は外面がタテ方向のハケ、内面は板ナデ。39は鉢となる可能性が高い。調整は外面がナナメ方向のハケ、内面はヨコ方向のミガキ。40は口縁部下に2条一対の突帯を廻す。調整は、内面がナデ、外面がヨコナデ。外面には丹塗りを施す。色調はいずれも黄褐色。41～44は底部の破片。調整は外面がタテないしはナナメ方向のハケ、内面はナデ。底径は41が6.0cm、42が8.0cm、43が7.6cm、44が4.0cm。43・44は復元値。45の調整は口縁部がヨコナデ、外面がナナメ方向のハケ、内面はナデ。復元口径21.8cm、復元底径7.0cm、器高32.0cm。

蓋（46）　胎土・色調等から弥生土器と考えられるが、あるいは歴史時代の所産である可能性もある。つまみの端部は欠損しているがそれほど延びるとは考えられない。色調は暗黄褐色を呈し、胎土は精良である。

須恵器（図版8、第17図）

杯身（47～52）　法量は口径10.2～12.4cm、器高3.1～4.9cm。調整は口縁部から体部外面がヨコナデ、底部内面がナデ、底部外面は回転ヘラケズリ。47～49・51は黒色土、50はＳＤ034、52はＳＸ039より出土。



第16図　各遺構・層位出土土器実測図1（1／4）

杯蓋（53～55）　53・55の法量は口径11.4cm・11.9cm、残存高2.1cm・2.4cm。調整は口縁部がヨコナデ、天井部は回転ヘラケズリ。53の天井部内面はナデ調整。55は復元口径16.0cm。ＳＫ035より出土。

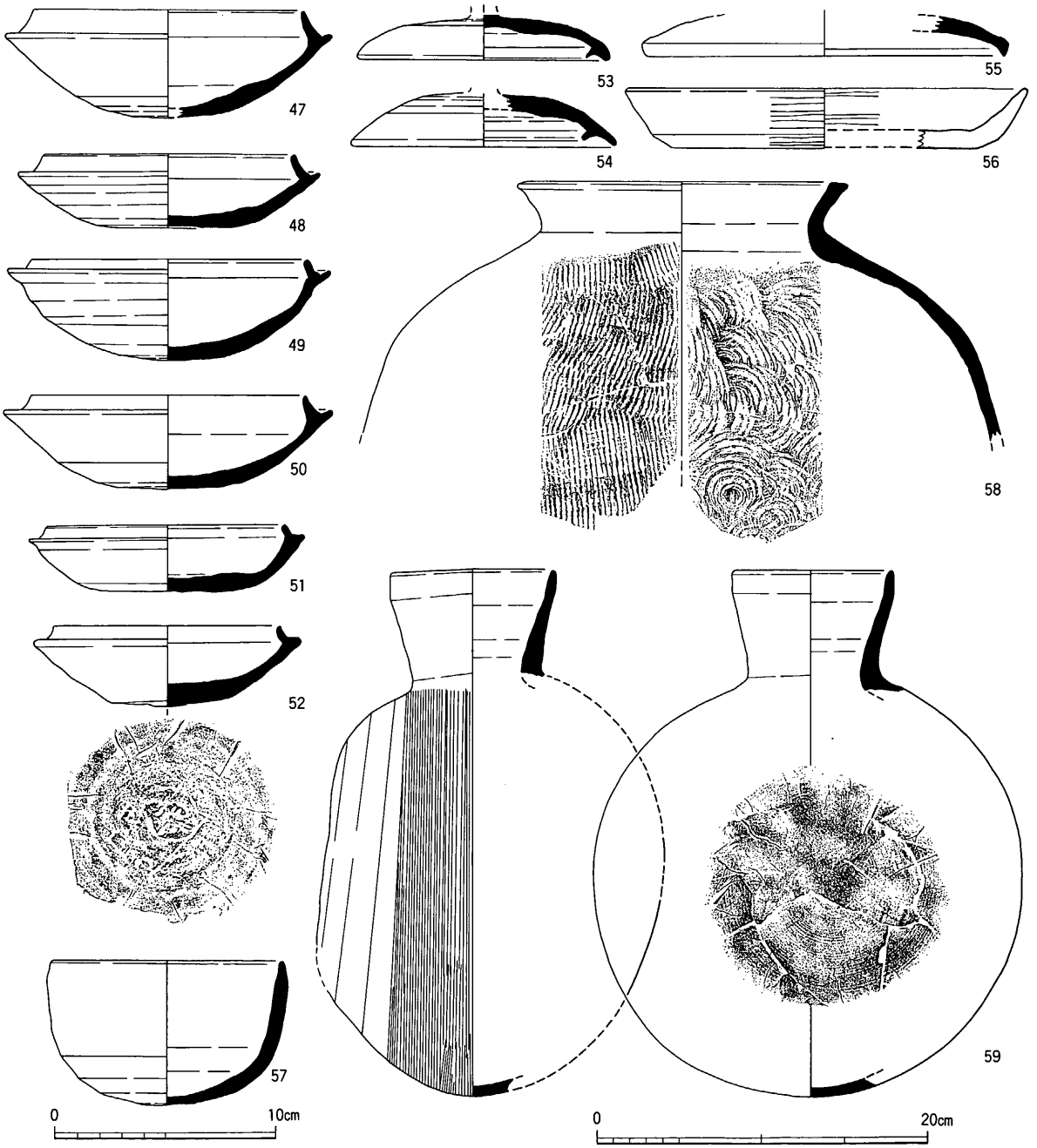
椀（57）　法量は復元口径10.5cm、器高6.6cm。ＳＤ032より出土。

甕（58）　復元口径19.8cm。外面は平行叩き、内面にはアテ具痕が残る。

提瓶（59）　口径9.9cm、器高31.9cm。調整は口縁部がヨコナデ、体部外面はカキ目及び回転ヘラケズリ。ＳＤ034より出土。

土師器（図版８、第17図）

皿（56）　復元口径18.0cm、復元底径15.8cm、器高2.7cm。調整は内外面とも回転ヘラミガキ。底部外面は回転ヘラケズリを施す。色調は橙褐色で胎土は精良。ＳＸ039より出土。



第17図　各遺構・層位出土土器実測図２（1／3・1／4）

（iv）小　結

垂水廃寺は新羅系瓦の出土地として、昭和初期からその存在が注目されていた。そのような垂水廃寺における推定寺域内での発掘調査は今回で第４次を数えることになる。なお、寺域については畦畔の方向や瓦の分布等から方２町に推定されている。以下、これまでの調査成果を概観し、今回検出した遺構との関係について言及して今後の問題点としたい。

新吉富村教育委員会では国・県の補助事業として、昭和48年度より３カ年にわたり範囲確認等の発掘調査を実施している。初年度には寺域確定のための調査が行われ北辺部及び南西隅部において北門跡・築地痕跡（ＳＢ025・ＳＡ020）を確認した。また、２年度には寺域南限の調査を（ＳＤ015)、翌３年度には寺域東半部の調査において南面する東西棟の礎石建物ＳＢ010（推定金堂跡）等を検出し、一連の調査によって寺域を推定し得る大きな成果を上げている。

また、平成５年度には、南吉富小学校講堂改築に伴って推定寺域南限の南側近接地において調査が実施されている。この調査では６世紀後半～末にかけての竪穴住居跡の他、創建以前のものと考えられる掘立柱建物（１号建物跡）が検出されている。また、７世紀後半から８世紀後半の竪穴住居跡・溝等、垂水廃寺創建期を含む時期の遺構が確認されている。これら検出された竪穴住居の軸の検討や第２次調査で確認された溝（ＳＤ015）の延長と考えられる遺構の埋没年代から、垂水廃寺は７世紀後半に創建され８世紀後半には廃寺となった可能性が高いことが指摘されている。ただ、溝１についてはおそらく寺院廃絶後に旧寺域内に延びる溝であると考えられる。

以上のように寺域の北限と西限については、ＳＢ025・ＳＡ020が、また、南限については鎌倉期の溝ＳＤ015がその在り方から寺域を示すものとされている。一方、東限は近年調査された大ノ瀬下大坪遺跡（推定上毛郡衙）の東側で確認された官道が条里に沿って南東に向かっており、これはＳＡ020を東に折り返した部分にあたることから、寺域は方2町の推定でほぼ間違いないものと思われる。

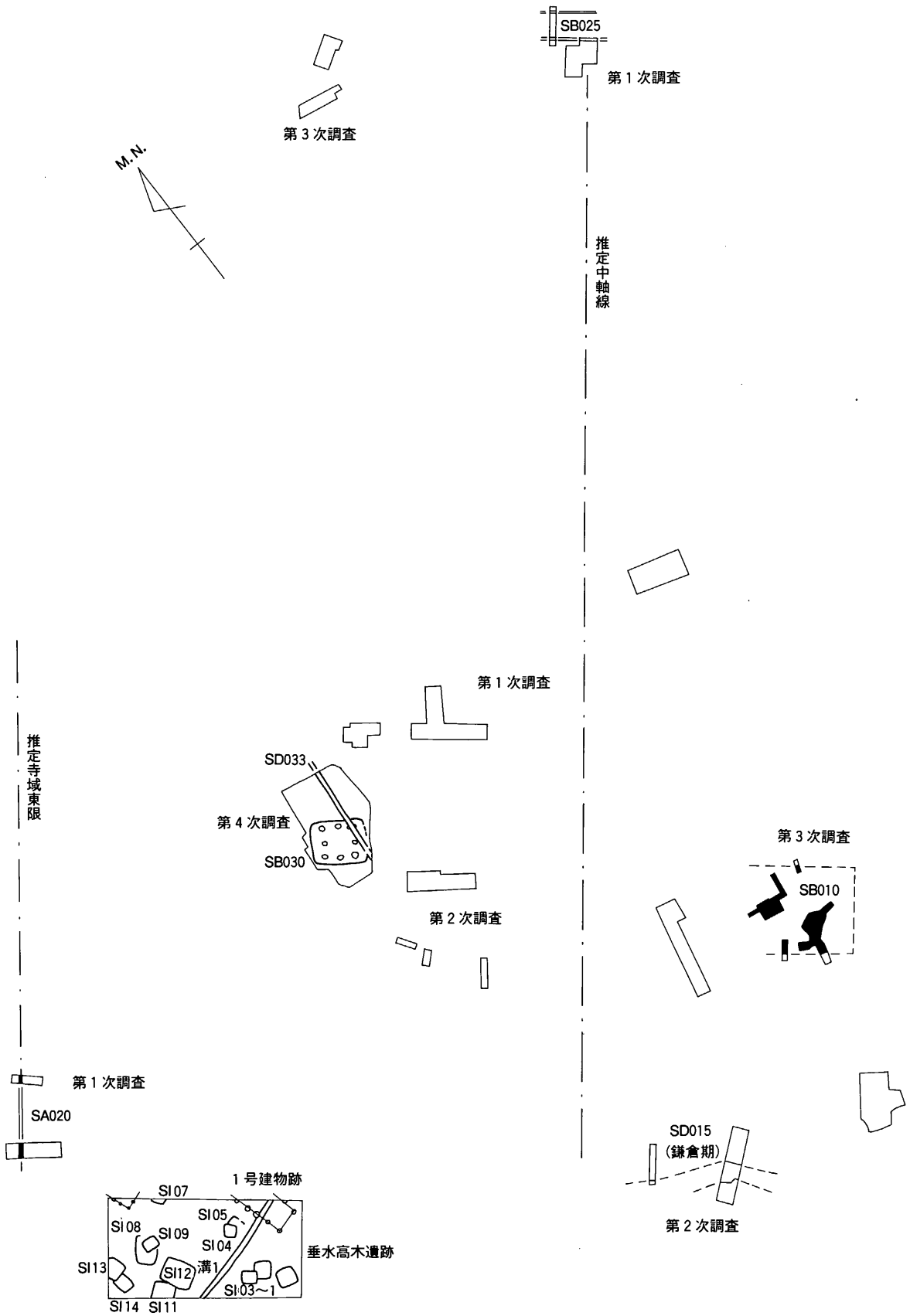
今回の調査地はこの推定寺域内の南西部にあたり、下層遺構面において寺院に関連すると考えられる２時期の遺構を確認している。まず、ＳＤ033は軸をほぼ南北（磁北）にとり、推定寺域の軸とは異なっている。この溝の上層からは百済系単弁軒丸瓦や重弧文軒平瓦のほか、完形の丸瓦・平瓦が一括出土しておりここでＳＢ010を含む寺域との先後関係が問題となる。瓦以外の出土土器が皆無のため時期の詳細には言及し得ないものの、中軸線の東に存在し金堂跡と推定されるＳＢ010との関係から見ると、瓦を含む溝の存続時期は少なくともＳＢ010より新しく考えた方が妥当であろう。ＳＤ033の方位については、現在に残る条里とは異なる地割となるものと同一方向を示し、そういった意味あいにおいては示唆的ではある。一方、掘立柱ＳＢ030はＳＤ033よりも古く、またＳＢ010を西に折り返した位置に近いが、規模や構造からみるとこれに対峙するものである可能性は低いであろう。そう考えるとあるいは垂水廃寺創建以前の草堂的な建物と解釈することもあながち否定できない。

なお、第18図は国土座標に載せたものではなく、位置関係を把握するために地形図にあてはめて作成したものであることを付記しておく。

註１　森田勉編「垂水廃寺」(『新吉富村文化財調査報告』第２集　1976)

註２　杉原敏之「垂水高木遺跡」(『新吉富村文化財調査報告』第８集　1994)

註３　註１に同じ。



第18図　垂水廃寺関係遺構配置状況図



第19図　正ノ坪遺跡遺構配置図（1／400）

2）正ノ坪遺跡

調査対象地は国道10号バイパスと村道が交差する地点の北西に当たり、調査面積はほぼ6,000㎡を測る。調査対象地の西側から北にかけて谷状地形が入っている。

バイパス路線内では、この正ノ坪遺跡に隣接する地区で三ツ溝遺跡、そして先の交差点を挟む南側で長田遺跡が調査されている。三ツ溝遺跡では幅２～３ｍ、深さ0.8ｍの溝状遺構などが検出され、長田遺跡では６世紀後半～末頃の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡、溝などを検出し、瓦片も出土する。

ｉ）概　要

調査対象地は北から西へかけて谷状の落ち込みが入り、東および南は国道10号バイパスおよび村道で画されている。地内の最高所は南辺中央付近で標高24.7ｍを測り、北東角で24.3ｍ、北西の南北溝付近で24.1ｍとなる。ほぼ平坦に造成されているといってよい。

試掘調査で柱穴を確認したことから全面発掘を行ったが、遺構配置図に見るように住居跡や建物跡などはなかった。ただ、散漫ながらほぼ全域に柱穴が分布し、また、不整形の浅い土坑（ＳＸを冠する）が掘削されていた。これらの落ち込みは深さ10㎝内外、立上がりも不明瞭であり、したがって遺構配置図では線が完周しないままのものもある。

埋土はくすんだ黄褐色で、地山土に似ている。このことは、これらの不整形土坑の掘削・埋没が短期間になされ、かつ自然埋没ではないことを示すと考えている。

ii）遺構と遺物

上記の不整形土坑から出土したもので、いずれも細片化する。全体でパンケース1箱ほどが出土したのみである。以下で出土遺構の概要と遺物について説明を加える。

ＳＸ１

調査区東端中央付近に位置する。東西長25ｍ前後、南北長は北半で不明瞭となるが約12ｍまで確認できる。ＳＸ12としたものと連続していたかも知れない。

出土遺物（図版12、第20図１・２）　１は肉厚土師質の甕あるいは鍋の小片。口端部が外傾する面をなし、頸部内面に明瞭な稜線をもつ。外面が灰黒色、内面が灰黄褐色を呈し、胎土に微砂粒を多く含む。２も土師質の鍋の口縁部小片。頸部外面は外彎するが、同内面は明瞭な稜線をもつ。外面は熱を受けたものか淡灰色となり調整も雑だが、内面は灰黄褐色を呈し、丁寧に刷毛目を施す。

ＳＸ４

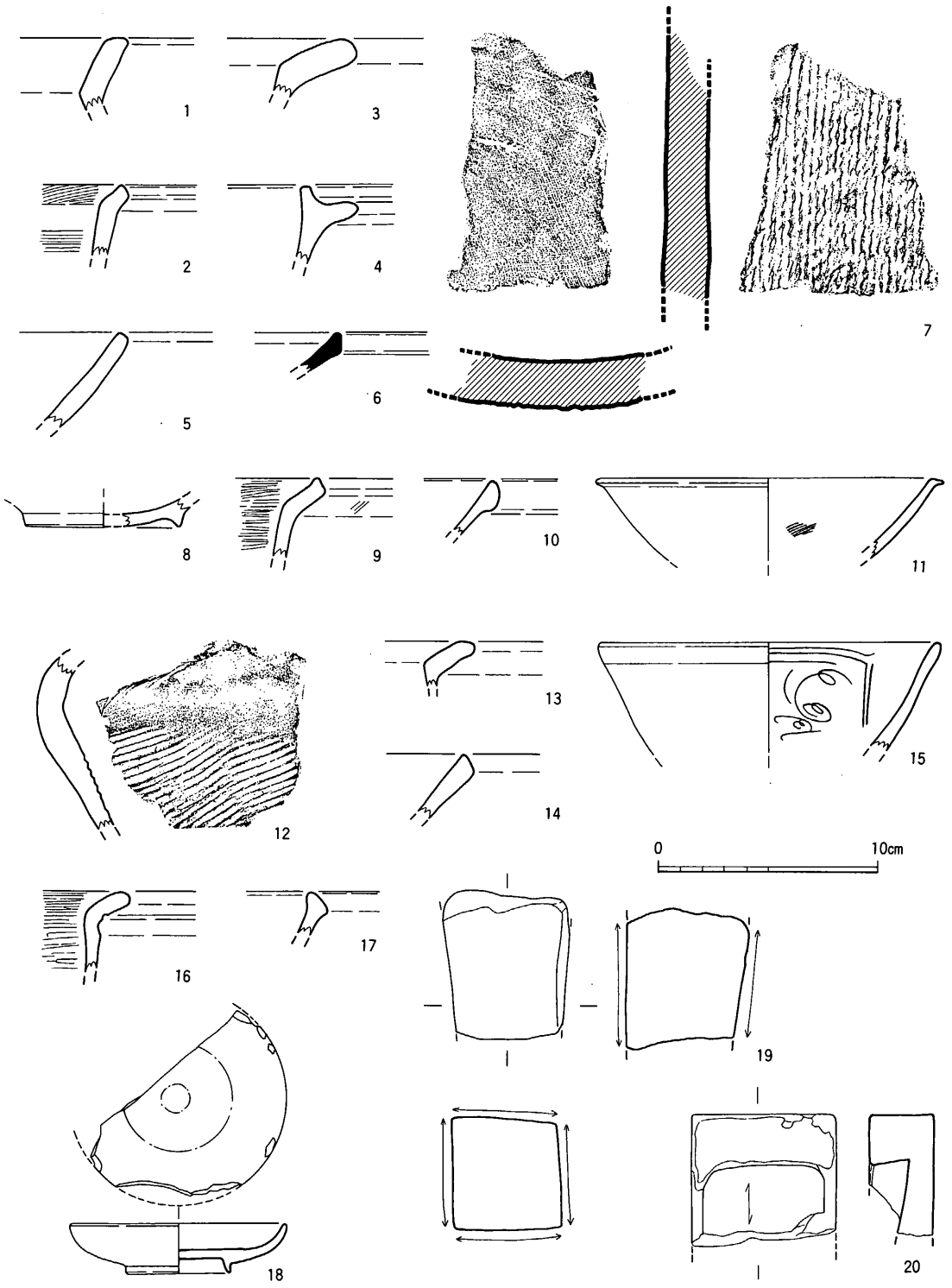
調査区中央付近の南に位置し、東西長約16ｍ、南北長17ｍまでを確認するが、北端を走る近現代の溝（水路）以北ははっきりしない。

出土遺物（図版12、第20図３・４）　この２点も土師質である。３は１と同様の土器で、より大型のようである。器表が荒れる。４は羽釜で、口端部に面をもち、鍔先端は薄くなって終わる。全

面に灰赤褐色～灰褐色を呈するが、体部の一部が灰黒色になる。全体に丁寧な調整がなされる。

ＳＸ５

調査区中央に位置するもので、東西長22ｍ、南北長10ｍ強を測る。内部にも微妙な傾斜変換線が認められるが、それでも最大の深さは0.2ｍほどに過ぎない。



第20図　正ノ坪遺跡出土遺物実測図（1／3）

出土遺物（図版12、第20図５～７）　５は砂粒が小さいものの胎土が非常に粗く、全体に暗灰色を呈する。調整痕が残っていないが縄文土器と思われる。６は東播系の須恵器摺鉢で胎土・調整ともに丁寧に造られる。全体に灰色であるが、口縁部外面の一部が黒化する。７は平瓦片。器表は灰黒色、器肉が灰黄褐色を呈する焼成不良品だが、胎土にほとんど砂粒を含まない。凹面に斜位に走る細線と細かな布目が残り、凸面に縄蓆叩きが残る。

ＳＸ６

ＳＸ５の北に近接する東西長約６ｍ、南北長８ｍほどの落ち込みで、東辺ははっきりしない。

出土遺物（図版12、第20図８）　断面三角形の高台をもつ椀小片で、外面は黄白～灰白色、内面が黄褐色～暗灰色を呈することから内黒の黒色土器である可能性がある。外底面は回転篦切りのようである。

ＳＸ８

ＳＸ６の東に位置する。径４ｍほどの不整円形を呈する。深さは７㎝ほど。

出土遺物（第20図19）　19は黄褐色砂岩製の砥石。図下方で折損するが、４面を使用している。非常に目が細かい。

ＳＸ９

ＳＸ８の北東に近接する径１～２ｍの円形土坑。深さは最大で８㎝ほどである。

出土遺物（図版12、第20図９）　９は２に似る土師器鍋の口縁部小片で、２に比して屈折部が長く、それとともに口端部の内側へのつまみ上げが目立つ。内面は灰黄褐色を呈し横方向の細密な刷毛目で、外面は一部に刷毛目が見えるが、残存部は指撫でを主体とするようである。同部は煤けて灰黒色となる。

ＳＸ11

調査区東端中ほどに位置する。東西長４ｍ、南北長18ｍほどの溝状を呈するが、これも深さは最大で10㎝ほどである。

出土遺物（図版12、第20図10・11）　10は大型の玉縁を有する白磁椀で、釉は黄味を帯びる半透明。小片であるが、この種のものとしては上質に属するものであろう。11は口縁部を外折する白磁椀で、やはり釉調は黄味を帯びる。内面には口縁部下位に横方向の沈線、さらに下位に櫛描文を刻むが、いずれも繊細なものである。

ＳＸ12

ＳＸ11の北西に近接し、東西長12ｍ、南北長９ｍほどの規模である。ＳＸ13に連続し、上述したようにＳＸ１にも連続していた可能性がある。

出土遺物（図版12、第20図12）　12は須恵器甕の残片であるが、外面が灰黒色、内面が灰色、器肉が灰色を呈する焼成の甘いものである。体部外面にシャープな平行叩きが残るが、頸部以上は横撫で、内面も横撫でのようである。

ＳＸ13

西辺がはっきりしないが、東西長16ｍ、南北長12ｍ以上を測る。

出土遺物（図版12、第20図13～15）　13は１・２に似た形態の土師器甕だが、小振りである。やはり頸部内面に明瞭な稜線を有し、その稜から下位に黒色の付着物がある。器表は非常に荒れる。14は東播系須恵器摺鉢。６に比べて口縁部の肥厚が増すが、まだ小規模である。口縁部外面のみ黒色化し、それ以外の部分は灰色である。全面を丁寧な横撫でで調整する。15は龍泉窯系青磁椀。内面に劃花文が見られる。外面では口縁部下位に小さな段を刻むようである。釉は淡い灰緑色の透明度の低いもの。

表採資料（第20図16～20）

16は土師質の甕（鍋）である。口縁部はく字形に反転し、内面は丸くなる。外面では反転部直上に鋭い沈線を刻み、その下位は強く横撫でされて窪む。胎土は非常に良好で、外面の横撫で以下は丁寧な篦削りで、内面はこれも丁寧な横撫での後に雑な篦磨きを施す。17も土師質で、摺鉢であろう。東播系摺鉢のように口縁部を断面三角形に肥厚させる。

18は染付磁器の皿で、ほぼ1/2が残存する。口縁部内面および見込み外周に二重の圏線を描き、体部内面と見込み中心に花文（？）を描く。施文は輪郭がシャープで、濃青色に発色する。また、見込みの圏線・花文の間は釉を掻き取り、外面が面取りされた華奢な高台の畳付も露胎である。露体部は赤味を帯び、釉が施される部分は純白に近い不透明に発色する。

20は灰白色を呈する砂岩製の硯。造りはシャープである。

iii）小　結

京築地方でも中世遺跡の調査例が増えてきたがまだ断片的なものであり、良好な資料に恵まれていない。したがって周辺の調査例を参考に年代を考えてみたい。まず、標識資料となる青磁・白磁は量的に少ないもののほぼ12世紀後半代を中心とするものである[註1]。鍋類に関しても資料が少ないが大分県宇佐市弥勒寺跡の報告で13世紀前半に比定されるものに形態が似る[註2]。他の土器も若干の時間幅をもつにしても相近い時期のものと思われる。したがって、これらの不整形土坑は12世紀後半～13世紀前半に刻まれたものと考えることができよう。

さて、この正ノ坪遺跡の不整形土坑であるが、表採資料を除けばこれらの土坑群出土遺物より新しい遺構・遺物が存在せず、また、小片が多いことから不確実な部分があるが土坑出土遺物がほぼ同一時期を示しているらしいことなどから、これらが一気に形成されたことを思わせる。類似の遺構は次に報告する安雲ハタガタ遺跡でも検出したものの類例はまだ乏しいが、新潟県に類例があるという。現報告にはあたっていないので、やや長くなるが能登健氏の記述を引用する[註3]。

「凹地遺構とは地表面に浅く掘りくぼめた耕作面で、53ヶ所が検出されている。その形態は一定せず、配列にも規則性がない。平面形は不定形なものが多く、最大面積のものが399㎡で最小面積のものは100㎡を下回る。遺構の確認面は底面に近いところであり当時の掘削深度は明確ではないが、おおよそ20～30ｍ程度であろう。底面の周囲に浅い溝が回るものもある。それぞれの凹地遺構は確保された用水の均等配分を目的としたと考えられる溝で連結されているが、単独に存在するものもある。しかし、単独のものは遺構の確認面より上位で連結されていた溝を想定す

ることもできる。報告書によると、奈良・平安時代の遺物包含層を掘り込んでおり、埋没土中から中世遺物が出土していることから、その成立は近世初期まで下る可能性を含めつつ、中世と考えられている。」

ここで「凹地遺構」と呼ばれるものは湧水を利用するために掘りくぼめた小規模水田と解釈されている。連結する溝を確認していないが、後世の開墾を考慮すれば正ノ坪遺跡で検出した不整形土坑群も位置関係から見て本来的に連続あるいは連結されていたと考える余地は十分ある。同様な性格を有していたと考えることは可能である。

近年、この村内城ヶ森遺跡や大平村今蔵遺跡、豊前市小石原泉遺跡・同三毛門放生田遺跡[註4]などで中世の居館跡と思われる遺構が相次いで発見されている。その中で唯一報告書が刊行されたのが三毛門放生田遺跡である。調査区内の屋敷地はほぼ60×25mの二重の溝に囲まれた範囲であるが、地形から推測してその規模は100×50m以上におよぶと思われる大規模なものである。切合関係のない分散した掘立柱建物跡6棟を検出しており、出土遺物から13世紀前半に比定されている。小石原泉遺跡や今蔵遺跡なども筆者が見た範囲では同安窯系・龍泉窯系青磁や白磁玉縁椀などに表徴される時期の遺物が出土している。それらが廃絶時期を示すものか、存続時期の一端を示すものかは報告をまたなければならないが、いずれにしても12世紀後半～13世紀前半という時期に、この地域で大規模な屋敷地を構える有力者が輩出したことが推測される。

正ノ坪遺跡などで見られた不整形土坑と先の居館遺跡が奇しくも相近い年代を示す点は重要であろう。それらとの関連で不整形土坑群を解釈すれば、大規模な居館を造営しうるほどに成長した有力者層がさらなる権力基盤の維持・拡大を図って開墾に力を尽くしたことが推測される。

ちなみに、本遺跡の属する古代上毛郡衙は西に程近い村内大ノ瀬下大坪遺跡で確認された。そこでは時期を確定するにいたっていないが初期（８世紀代）の遺構に後出する、大いに方位を異にする建物跡と柵列を検出している。一方、12世紀末頃、上毛郡司宗成・俊忠と田部太子との間の吉富名をめぐる相論が記録されている。両者は宇佐宮祠官であり上毛郡司でもあった田部一族といわれ、当地の開発領主であったらしい。いわば一族内の諍いのようであるが[註5]、いずれにしても吉富名といい、上毛郡司といいいずれも現代のこの宇野地区と無関係ではなかろう。

註１　横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－形式分類と編年を中心として－」（『九州歴史資料館研究論集』４、1978）ほか

註２　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館「弥勒寺－宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査報告書」「（『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書』第7集、1989）

註３　福岡県教育委員会「三毛門放生田遺跡」（『福岡県文化財調査報告書』第121集、1995）

註４　能登健「中・近世の農業」（『考古学による日本歴史』16　産業Ⅰ、1996）

註５　有川宜博「第四編中世　第一章　荘園公領制と上毛地方」（『豊前市史』上巻、1991）

3）安雲ハタガタ遺跡

この調査地は県道野地塔田線と村西部を南北に走る段丘下端を蛇行して北流する小河川黒川の交差する地点の北東脇に位置する。また、調査地のすぐ東にもやはり小河川の岩瀬川が南北に走り、遺跡はその間の微高地上にのる。標高は28.6mほどである。

調査地の南端は削平されるようで散在する柱穴を検出したのみであるが、それが幸いして1×1間、1×2間の掘立柱建物跡を確認できた。調査区北端付近で2軒の竪穴式住居跡を検出したが、以北は一段下がり、調査時にも常時湧水していた。

i）遺構と遺物

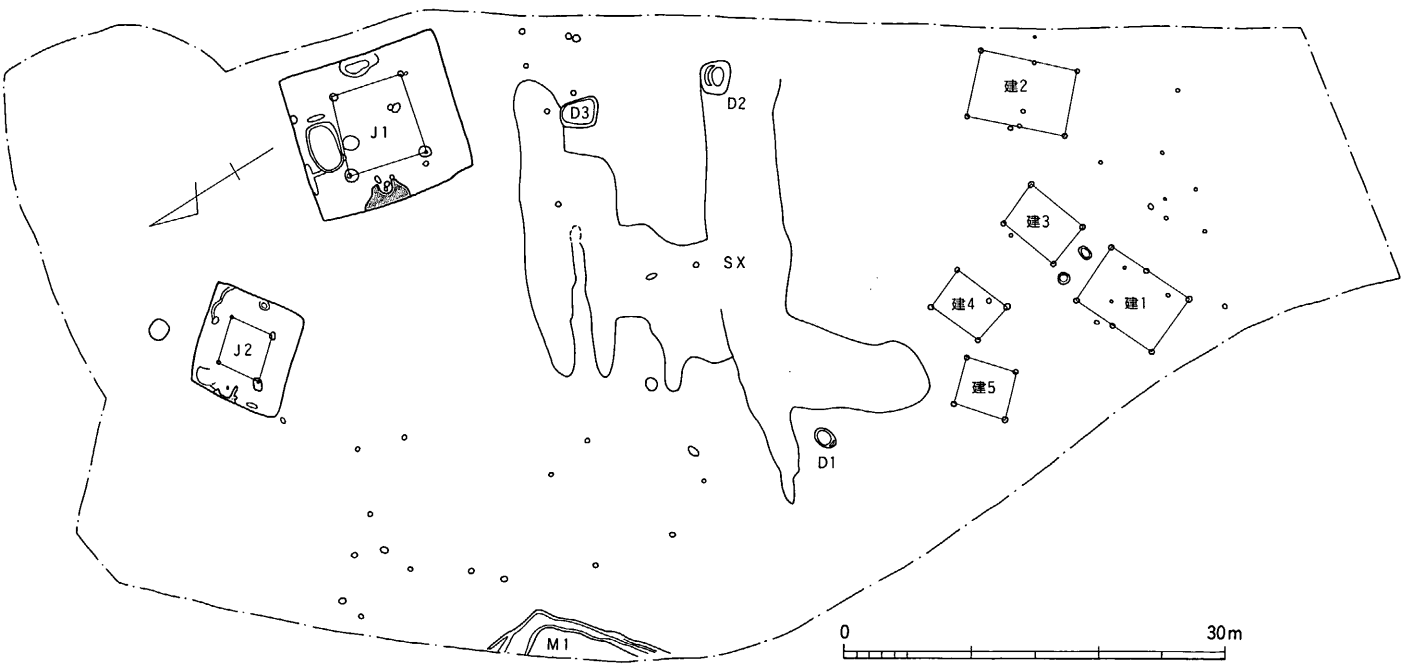
1号竪穴式住居跡（図版14、第22図）

調査区北東角付近に位置する。

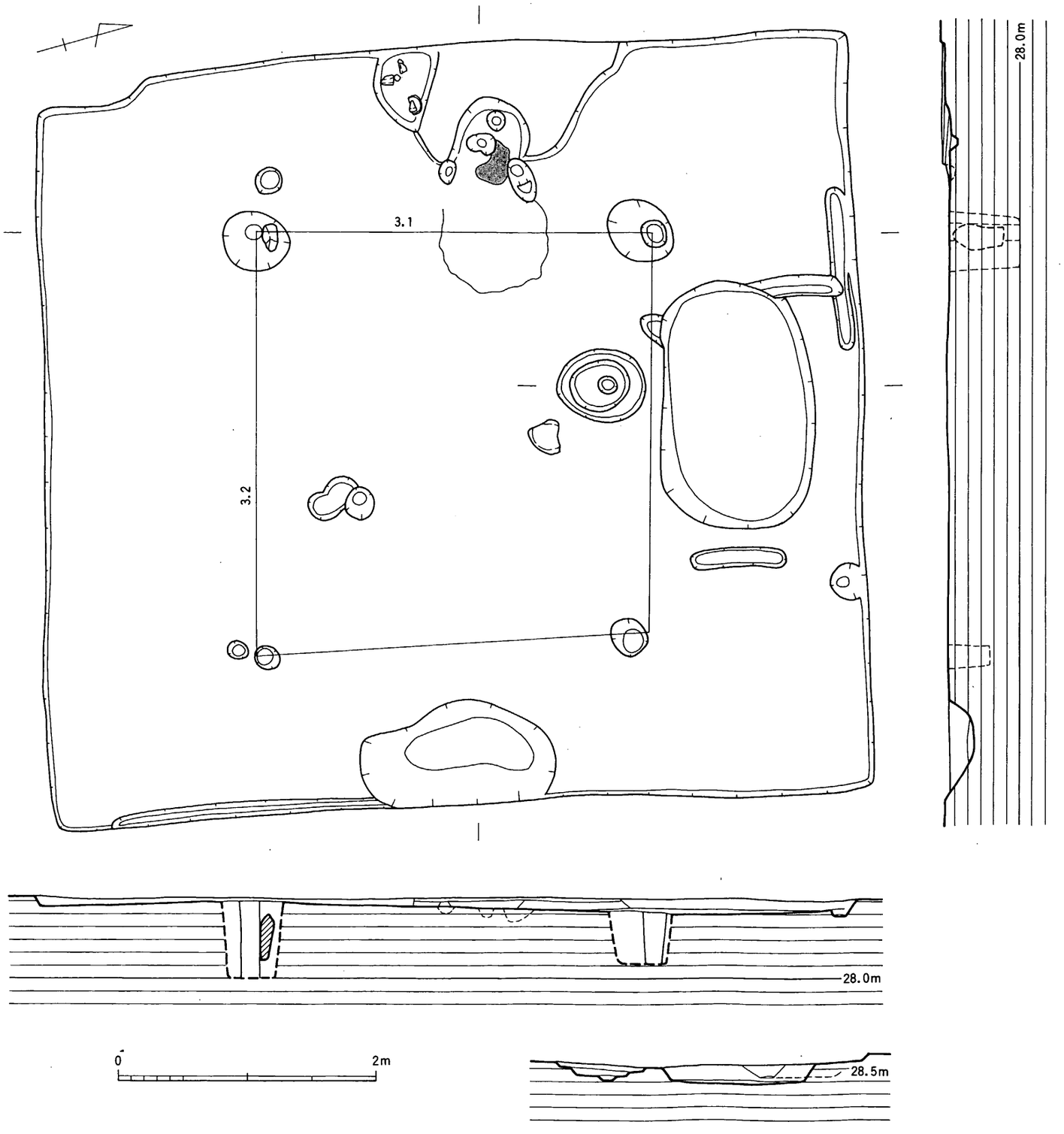
平面形は比較的整った長方形プランを有し、規模は5.9×6.4mとカマドに向かってやや横長となる。残存する深さは0.1mに満たず、大きく削平されている。火災にあったようで、埋土中に焼土・炭が多く含まれていたが、木組みを思わせるような炭化材は見られない。

カマドは西辺ほぼ中央に付設されるが袖はほとんど残っておらず、地山とほとんど区別できない部分を掘り残したものを図示した。内部には焼土が多く入り、袖風に図示した部分とほぼ同じ高さで赤色硬化した火床を検出している。また、火床および両袖の前面に小ピットが検出されたが、支脚・補強石材が抜き取られたものであろう。

主柱穴は通有の4本柱で、3.1～3.2mの間隔を以てほぼ方形に配されるが、北東の柱穴が若干ず



第21図　安雲ハタガタ遺跡遺構配置図（1／600）



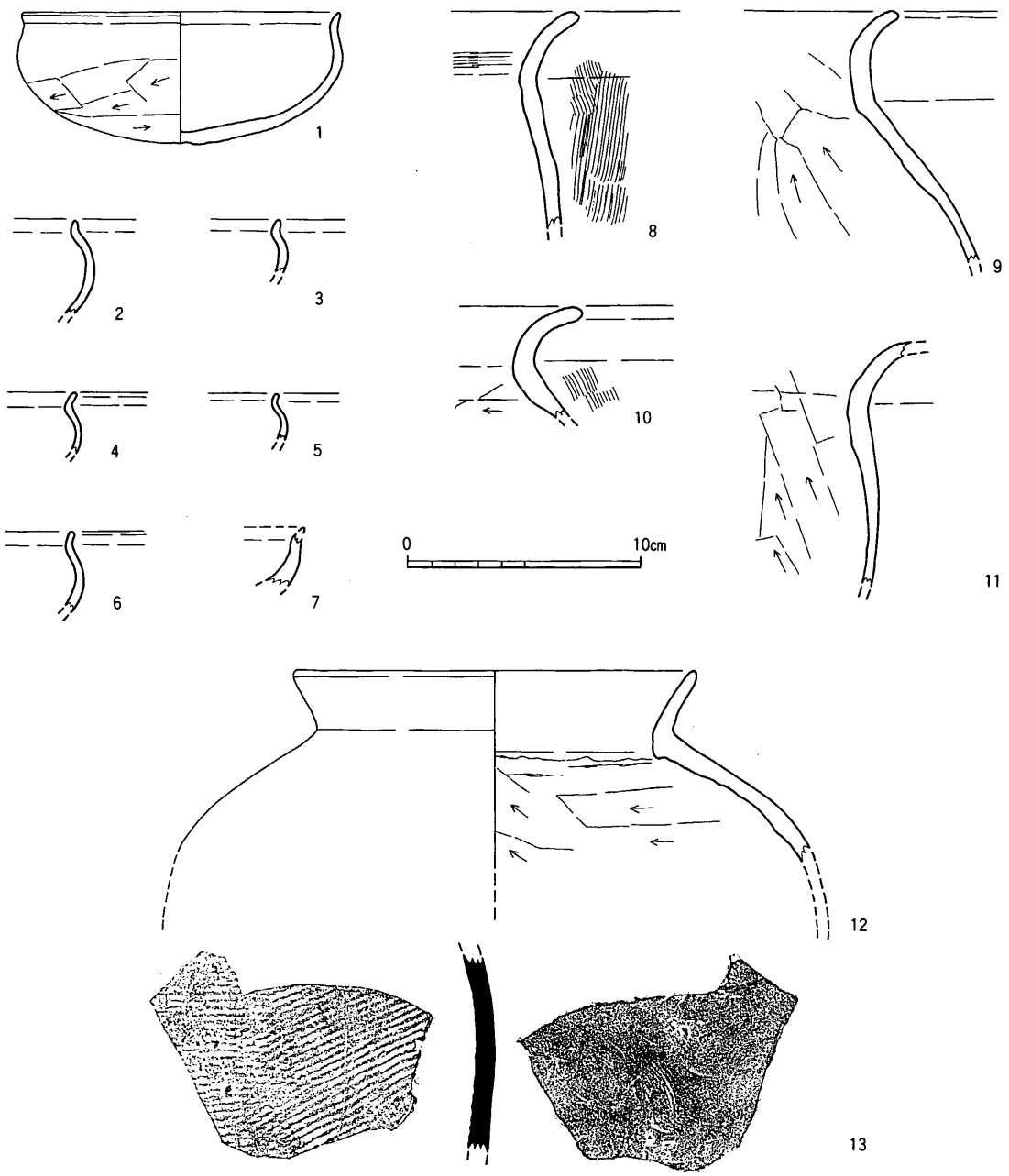
第22図　1号竪穴式住居跡実測図（1／40）

れる。また、カマドに近い２基の柱穴は掘形が0.5m近い大型で根固めをしっかり行っているのに対し、他の２基は0.2～0.3mの小型となる。特に、南西の柱穴では柱の補強材として長さ0.4mの大型石材を立てて埋め込んでいた。

この住居跡では北辺および東辺で大型の土坑を検出している。北辺土坑は軸長1.2～２mの長円形プランを有し、深さは0.2m弱である。内部には暗茶褐色土が堆積していた。また、この土坑の両小口部を挟み込むような位置に溝状の掘込みが見られ、仕切られていたことが想定される。東辺土坑はカマドに対峙するもので、長軸1.5m、短軸0.8mの不整長円形プランを呈し、深さはやはり0.2mほどである。これも埋土に特徴的なものはなかった。

出土遺物（図版20、第23図）

１・10がカマド左側の小土坑、２～５・12が東辺土坑から、他は埋土中から出土したものである。また、１～12が土師器、13が須恵器である。



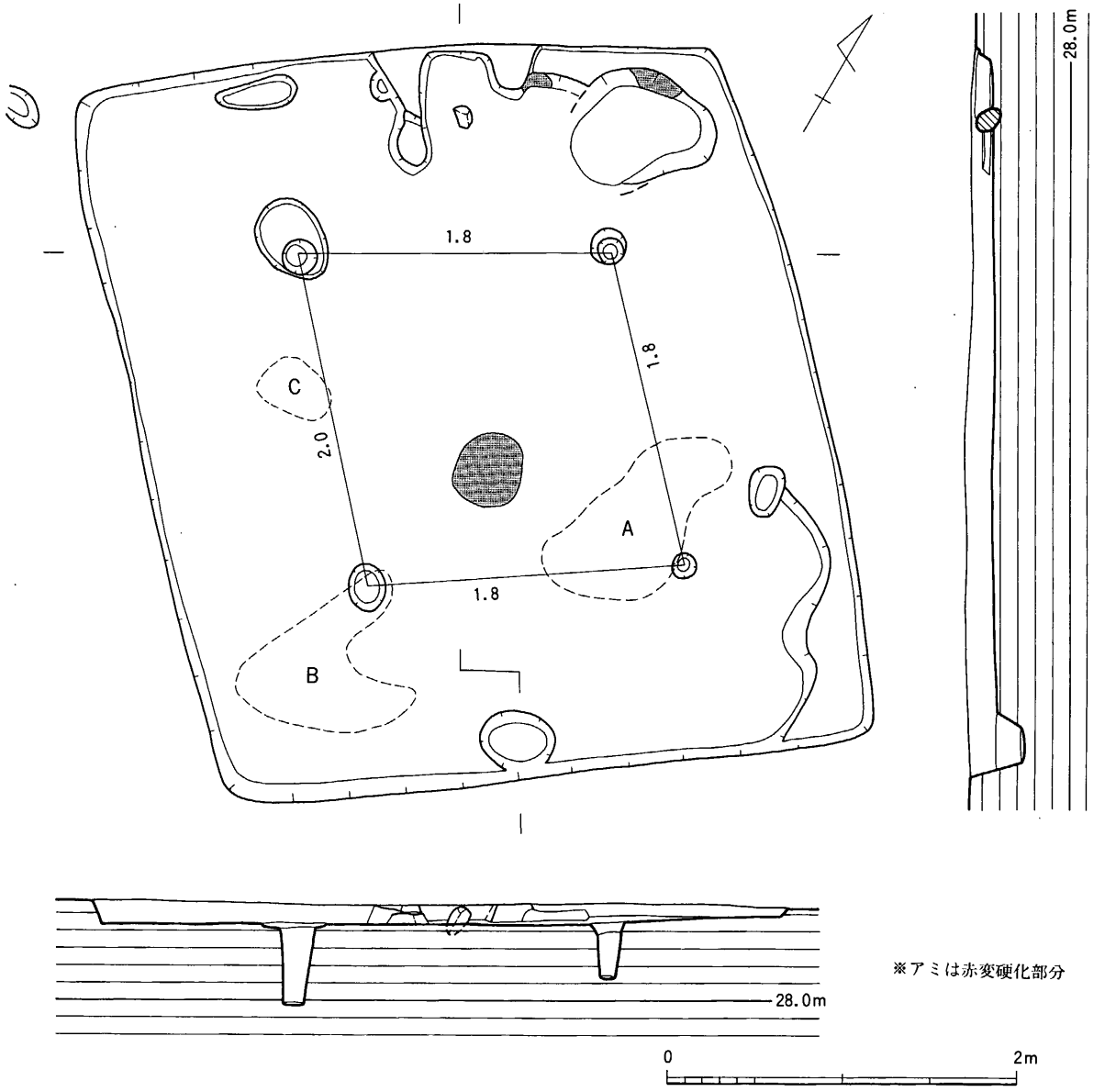
第23図　１号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1／3）

1～6は椀で、体部最大径が口縁部径を凌駕する点では共通するが、口縁部形態の細部は微妙に異なる。1～3は口端部外面がほぼ直立して端部を丸くおさめ、内面に面を持つように造られたもの、4～6は口縁部がく字形に外反して頸部・端部の肉厚があまり変わらないものである。ほぼ完形品の1では、体部外面を不定方向の、同内面を丁寧に撫でて仕上げ、赤く焼成されている。

7は手捏の椀で、これも口端部内面に面を造るようである。

8～11は甕の小片。8は口縁部の反転が弱く、体部内面を丁寧に撫でて仕上げる。9・10は同部が強く外彎し、体部内面を篦削り調整する。12は反転復原したが、やはり残存部は1/4ほどである。口縁部がく字形に鋭く屈曲するもので、体部内面を篦削りで、同外面を丁寧に撫でるようである。

13は須恵器甕片。平行叩きが付される面に焼成時の付着物があり、また黒色化し、撫で消されて微かに同心円文が見える面では灰が吹き飛んだ様子が見える。同心円文が付された面が凸部となることから底部の残片であろう。



第24図　2号竪穴式住居跡実測図（1／40）

2号竪穴式住居跡（図版15、第24図）

1号住居跡の北に近く位置する。平面形は平行四辺形に近く、規模は4.3×3.9mとなる。深さは最大で0.2mほどが残っていた。床面中央付近で円形に赤変硬化した部分が見られた。

カマドは北西片の中央からやや北へよった位置に設けられ、最大で10cmほどを確認できた袖は黄褐色粘質土で構築されていた。中央に自然石の支脚が立っていたが、火床は確認できていない。

袖の遺存状態が悪いためもあって断定できないが、右袖が短く、その先端から北東隅へ向かう不整形の浅い落ち込みの東側が赤く焼けて硬化していることを重視すれば、ここにオンドル状の設備が存在した可能性もある。カマドが北に偏して構築されていることもその傍証にしうる。

主柱穴はプランに沿ってやはり平行四辺形に配され、柱間距離は3辺で1.8m、南西辺のみ2mとなる。1号住居跡のように極端でないが、ここでもカマドに近い左側の柱穴が最も大きく造られる。

出土遺物（図版16・20・21、第25・26図）

図のように土器が数ヶ所にまとまって出土した。カマド対辺に近い主柱穴2基は土器群に覆われていた。14がA群、1・4・5・7・10・13・15・16がB群、その他は埋土中出土である。また、1～17が土師器、以下は須恵器である。

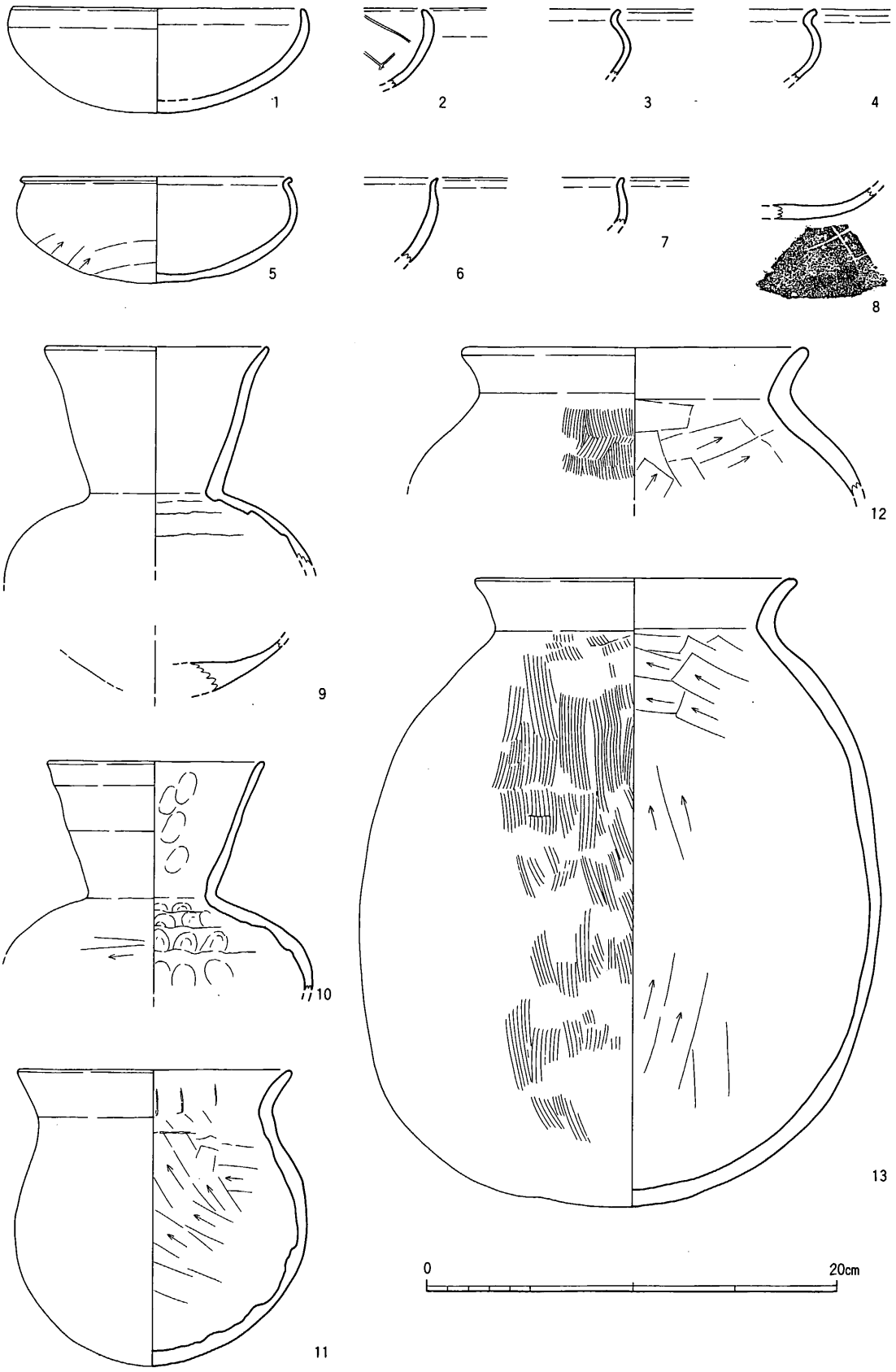
1～7は椀。1はほぼ1/2が残る。口縁部は内椀して薄く終わり、体部外面は篦削りの後に撫でたものか、丁寧に造られている。同内面は磨滅してはっきりしない。灰黄色に焼き上がる。2も同様。3～5は口縁部を小さくく字形に外反させるもの。5は約1/4が残存し、体部外面は不定方向の篦削り、内面は篦磨きのような丁寧な調整を行う。これは赤く焼成される。6・7は口端部内面に面を付したようなものである。8は椀の底部であろう。灰褐色を呈し、器表が荒れるが、外底面に篦記号状の刻みがある。

9・10は長頸壺。9は口径に比して長くのびる口縁部が緩くS字状に湾曲し、口端部をつまんで内面に小さな窪みをつける。肩部内面には粘土紐接合痕・指押さえ痕が顕著であるが、調整は口縁部内外および体部外面で篦磨きを施す。接合し得ないが、同一個体と思われる底部片も図示している。外面は不定方向の雑な篦削りを施し、内面には篦状工具で引っかいたような痕跡が見える。淡灰色～灰褐色を呈する小片。10は図示部がほぼ完存する。形状は先の9に似るが、造りが雑である。外面の肩部以上は撫で、以下は篦削りで仕上げ、口縁部内面は部分的に指頭痕が、また肩部内面には粘土紐接合痕・指頭痕が顕著に残る。赤く焼かれた土器である。

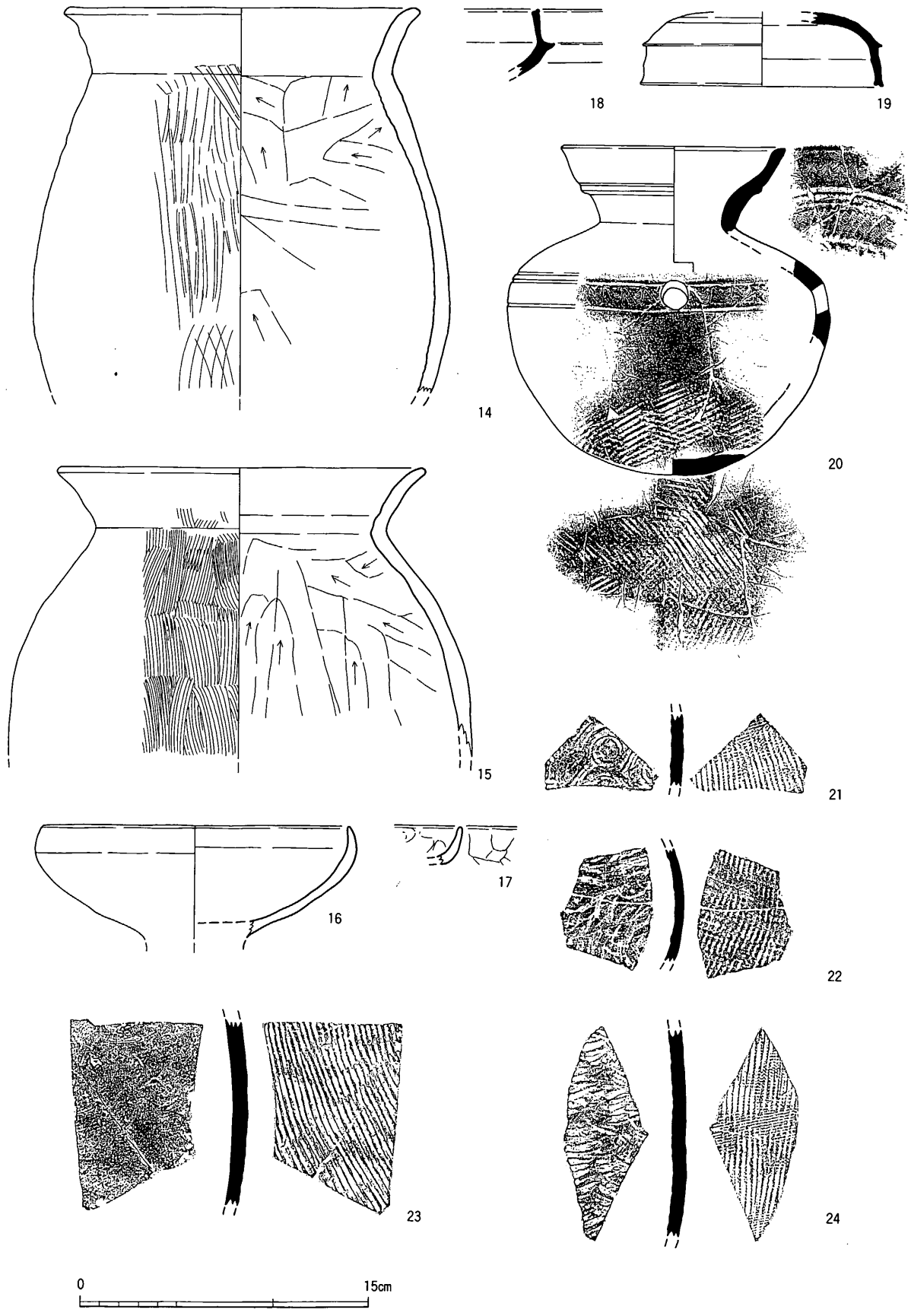
11～15の甕はいずれも口縁部がく字形に外反外彎する。11は口縁部の1/2を欠くが、体部下半はほぼ完存する。よく焼かれた土器で、器表が荒れるが、体部内面の篦削りはよく見える。口縁部内面は横刷毛であろう。胎土も粗い。12は約1/2の残片。全体に肉厚である。13は完形に近い。口頸部に比して体部が大きく、寸胴形となるが頸部の稜線はシャープである。肩部下位から底部外縁付近にいたる体部中位に煤が残存する。14は口縁部の反転が弱く、体部の張りも小さい。外面の刷毛目は疎で浅い。

13は杯部が口端部が小さく弱く内折し、端部が薄く終わる椀形を呈する高杯片で、上半部の形態は椀に似る。器表が荒れて調整痕の細部は不明だが、造りは丁寧である。内面が灰黄色、外面が赤褐色を呈する。17は手捏の小片。

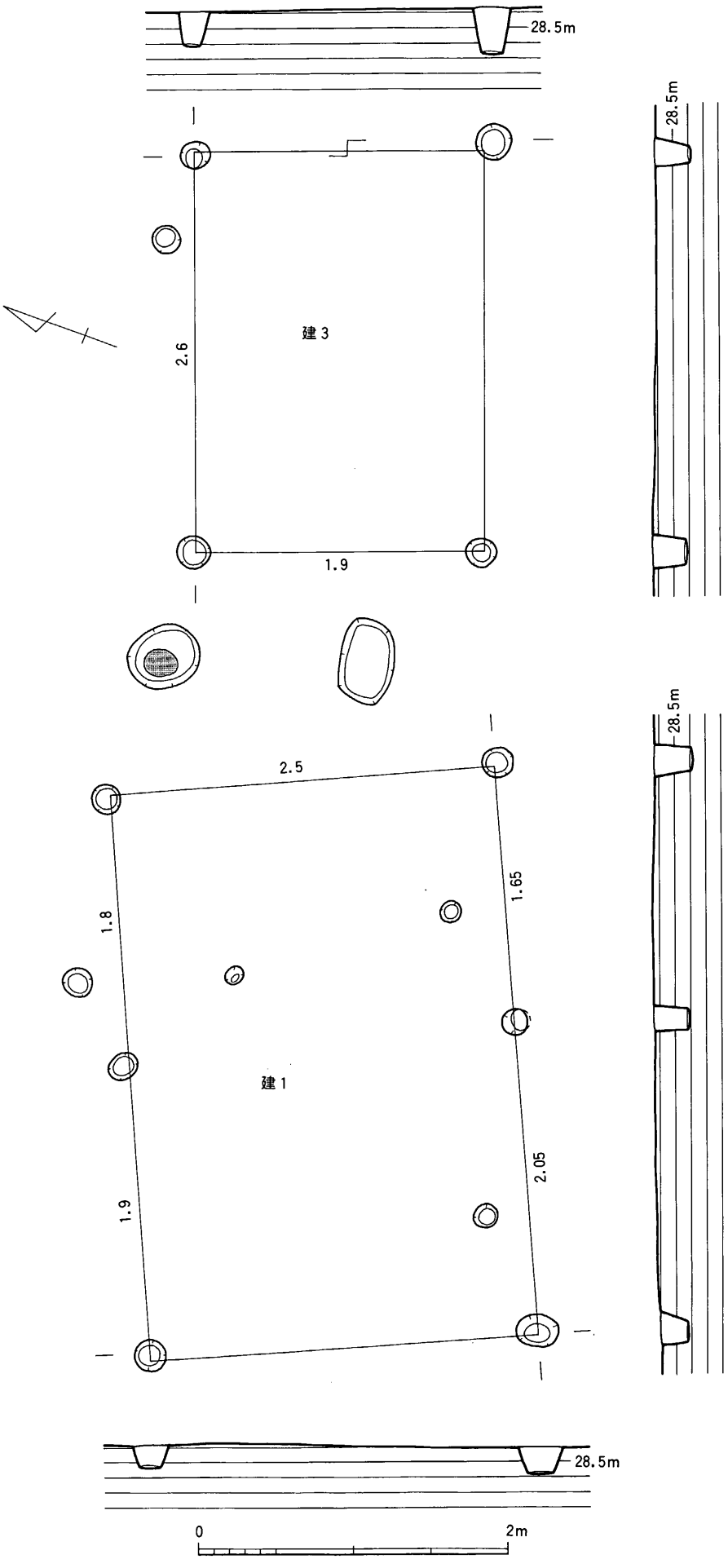
18以下は須恵器で、いずれも胎土精良、焼成も堅致である。18は受部が長く、端部に凹線を刻ん



第25図　2号竪穴式住居跡出土遺物実測図1（1／3）



第26図　2号竪穴式住居跡出土遺物実測図2（1／3）



第27図　1・3号掘立柱建物跡実測図（1／40）

で匙面とする。受部の造りもシャープである。19はほぼ全体が窺える。これも細部の造りがシャープで、天井部の篦削りも丁寧。20は口頸部が肉厚で、矮小化する感がある大型瓶。口縁部上半のほとんどを欠くが、中位の突帯以下はほぼ完存する。口端部は匙面をなし、頸部中位の突帯は断面三角形となる。その突帯の上下に繊細かつ精美な櫛描波状文を各1段刻む。体部は偏球形ではあるが、張りはさほど強くない。透孔の直上に基本的に2条の、直下に1条の凹線を刻むが、これは甘い。その間を飾る波状文も繊細なものである。なお、肩部付近には灰被りが著しく、淡灰緑色となる。21～24は甕小片で、23は内面を丁寧に摺り消すが、なお薄く同心円文が見える。

1号掘立柱建物跡（図版17、第27図）

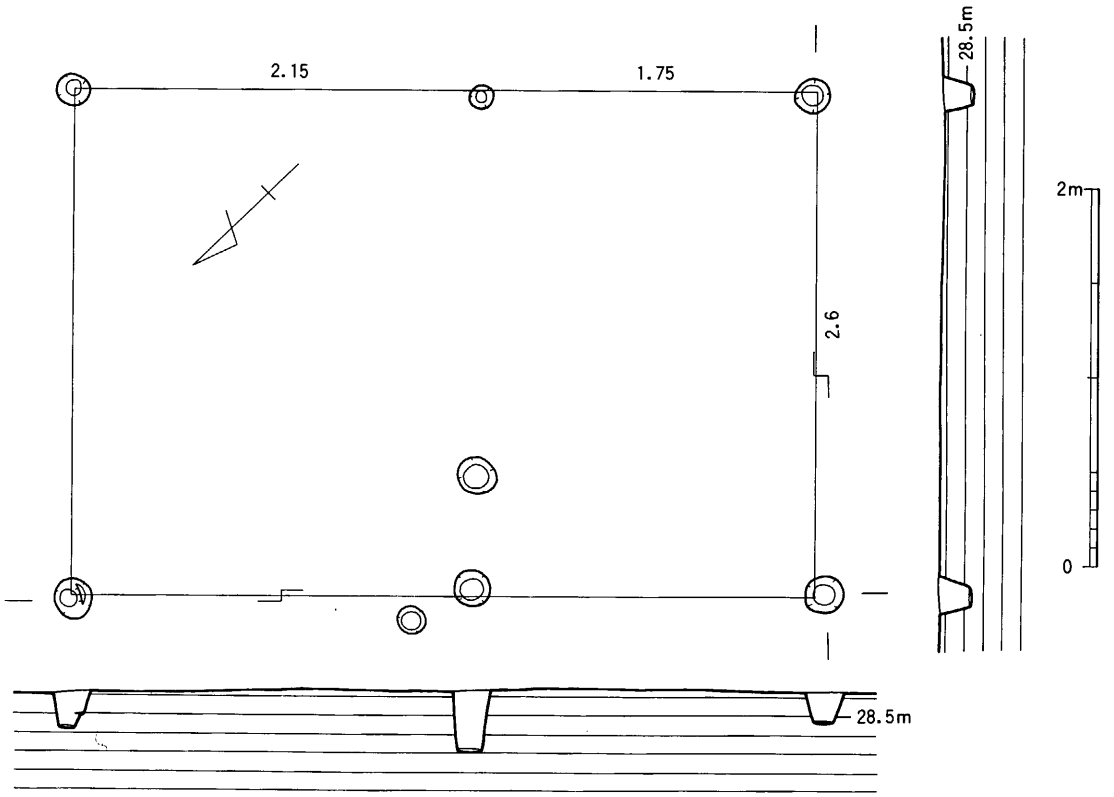
最南端で検出した1×2間の建物跡で、南側の柱筋が後述する3号建物跡の柱筋にほぼ揃うことから、両者はあるいは同時に存在したことも考えられる。6基の柱穴はほぼ正確な長方形を描いて配置され、梁行2.5m、桁行3.7mの規模となる。なお、桁行中央の柱は桁方向に若干ずれている。

柱穴の規模はほぼ直径0.2m、残存の深さもほぼ0.2mである。出土遺物はない。

2号掘立柱建物跡（図版18、第28図）

一群の建物群のうち最東端に位置する。調査区東の水田で遺構確認をしていないが同様の遺構はさらに広がるのであろう。規模は1号建物跡と同じく1×2間の規模で、正確に長方形に配列するといってもよかろう。梁行2.6m、桁行3.8mで、桁行中央の柱は2辺ともに南西へ偏っている。

柱穴規模は直径0.2m前後、深さは最大で0.3mほどとなる。出土遺物はない。



第28図　2号掘立柱建物跡実測図（1／40）

3号掘立柱建物跡（図版17、第27図）

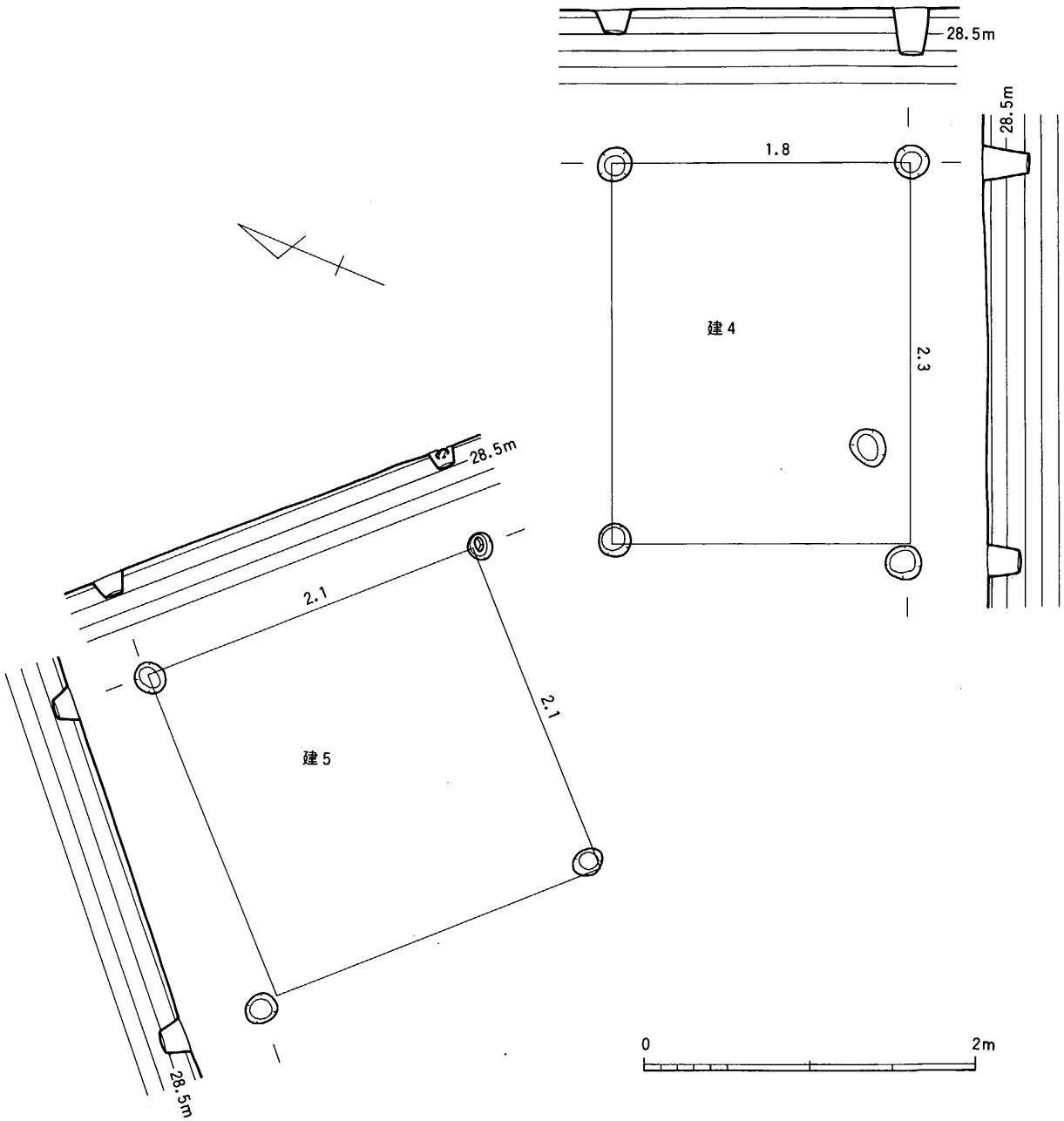
1号建物跡の北東に隣接する１×１間の建物跡。これも柱穴はほぼ正確に長方形プランに配列される。梁行は1.9m、桁行は2.6mを測り、対応する辺長も等しい。

柱穴平面はやはり直径0.2m、残存する深さも同様である。

4号掘立柱建物跡（図版18、第29図）

3号建物跡の北にあって方位をほぼ揃え、柱筋も近い。規模は梁行1.8m、桁行2.3mで、ほぼ長方形に配列する。

柱穴規模はほぼ直径0.2m、深さは最大で0.3mほどが残存する。出土遺物はない。



第29図　4・5掘立柱建物跡実測図（1／40）

5号掘立柱建物跡（図版18、第29図）

4号建物跡の西に隣接するが、それとは方位を全く異にする。配置は正確な直角をなさないが、ずれは小さい。また、各辺はほぼ2.1mとなり、正方形に配列する。

柱穴規模はやはりほぼ直径0.2m、深さは0.1m強である。東角の柱穴内に小礫が入っていたが、床から浮いた状態であった。出土遺物はない。

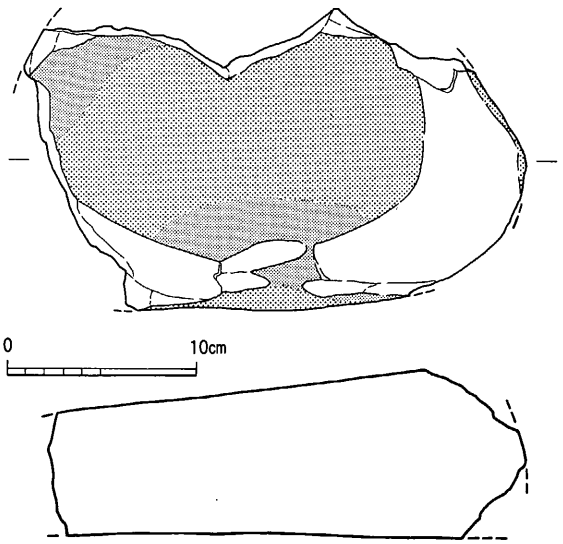
1号土坑（第31図）

5号建物跡の北に位置する。軸長0.7～0.9mの楕円形プランを呈し、深さは最大で0.3m近くを測る。なお、西小口部のテラスは発掘ミスである。埋土には暗茶褐色土が入っていたが、特徴的なものではない。

出土遺物（第30図・第32図1・2・4）

出土遺物に若干の土器片などがあり、その一部を図示した。

1は器台と思われるもので、内外面に指撫で痕を顕著に残す肉厚の土器である。2は甕の小片。4は須恵器甕の残片で、図示したように面の同心円文を丁寧に摺り消している。胎土精良、焼成良好なもので、住居跡出土品に似る。



第30図　1号土坑出土石製品実測図（1／4）

2号土坑（第31図）

調査区中央西端、SX1とした不整形の落ち込み中に位置する。平面形は上端でほぼ隅丸長方形を呈するが、下端は不整長円形となる。規模は長軸1.3m強、短軸1.2m、深さ0.5mの規模を有する。

埋土は床土を交えたような小礫混じりの灰黄褐色土であった。SX1発掘中に確認したものであるが、SX1も同様な埋土であり、先後関係は確認できていない。

出土遺物（第32図3）

口端部外面に断面方形の突帯を巡らせる土師器の鍋小片。二次的な火熱のために器表が荒れ、灰赤色に変色する。

3号土坑（第31図）

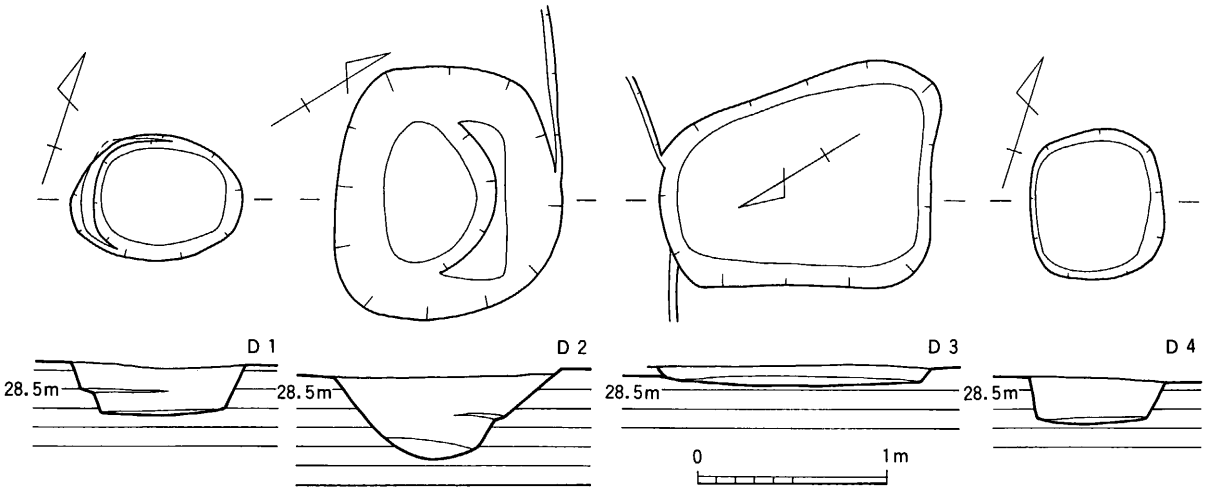
2号土坑の北東に位置し、SX2とした不整形落ち込みと一部が重複するが、これも先後関係を確認できていない。平面形は不整隅丸長方形を呈し、長軸1.4m、短軸1.2m、深さは最大で0.1mに満たない。黒褐色土を埋土とする。

若干の土器が出土する。古墳時代須恵器のほかに2号土坑同様の土師器鍋類の小片も含まれており、中世に属するものであろう。

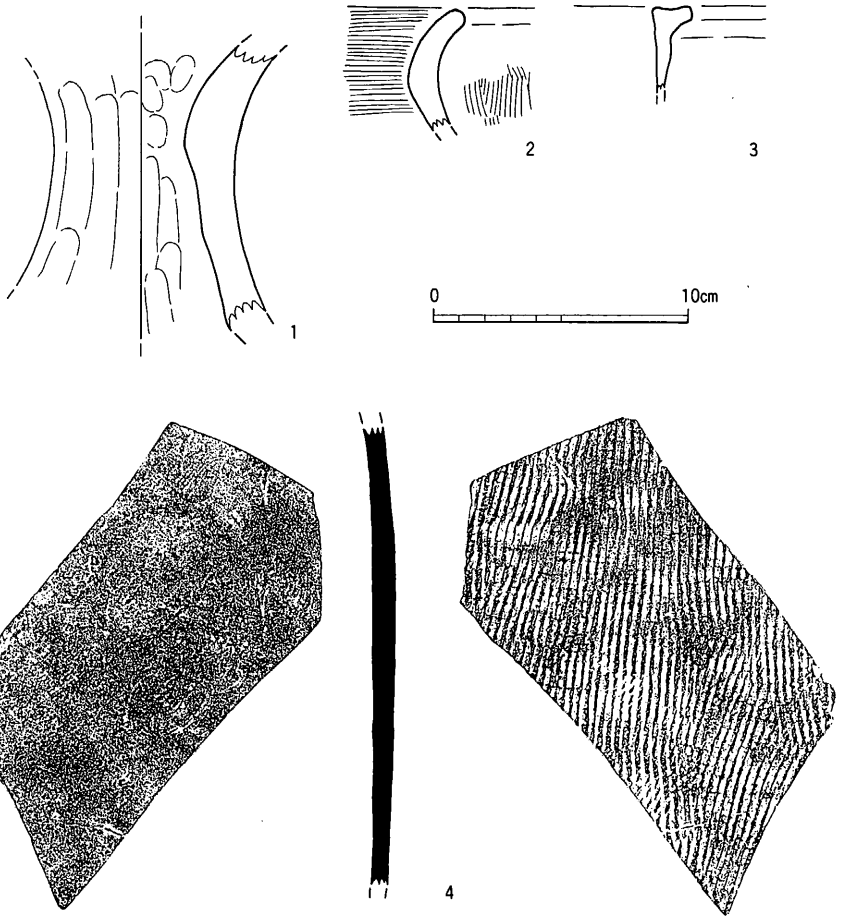
4号土坑（第31図）

2号住居跡の北東に近く位置する。平面形は整った隅丸方形に近く、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.2mの規模を有する。黒褐色土を埋土としていた。

これも数点の土器を出土するが、時期は判らない。



第31図　土坑実測図（1／40）



第32図　土坑出土遺物実測図（1／3）

溝状遺構（図版19、第33図）

調査区中央付近の西端で一部を検出した。コーナーを有しており、長さは５ｍ強、２ｍ強を測る。深さは0.2ｍ弱の浅いもので、断面形状はＵ字形となる。

内部で人頭大の河原石を検出したが、床面から浮いており、規則性も窺えない状態である。

埋土にはほぼ純粋な細砂が堆積していた。

出土遺物としては土器小片が若干出土するのみであるが、土器は弥生土器のようである。

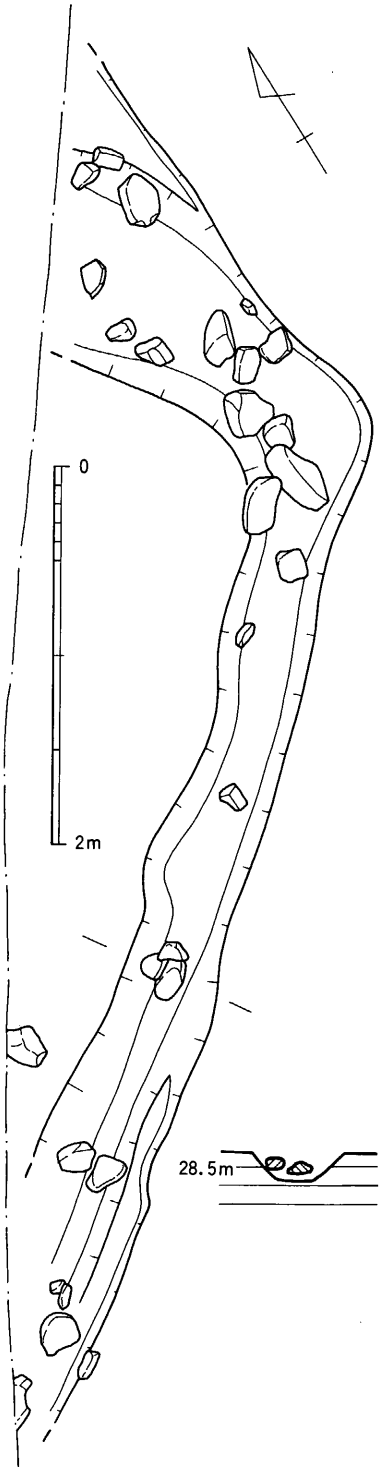
不整形落ち込み（図版13・19、第21図）

ＳＸの記号を冠したものである。調査区中央部に広がる深さ５cm前後の浅い落ち込みで、正ノ坪遺跡のような全く不整形なものとは異なり、一応の規則性が認められるが、その方向は現状の水田区画に平行あるいは直行する方向である。埋土は床土を交えたような灰黄褐色土であった。

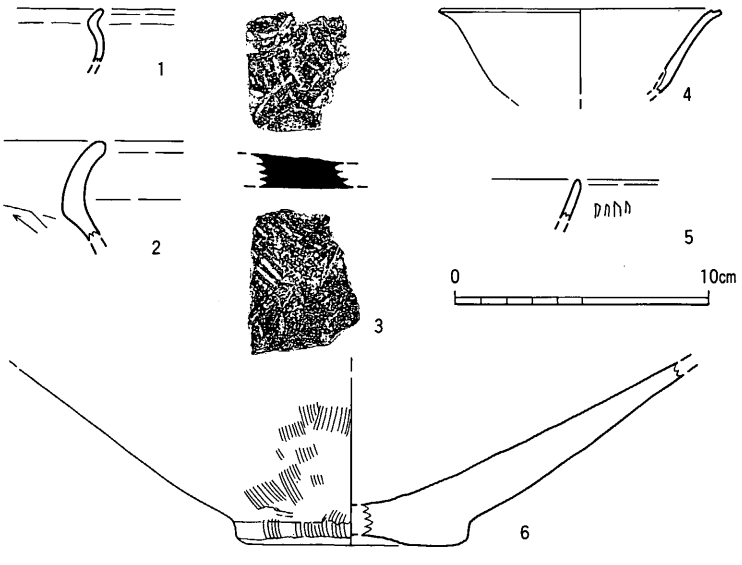
出土遺物（第34図１～３）

図示したものは古墳時代以前のもので、ほかに平底の底部を有する弥生土器小片や古墳時代の土器などもあるが、主体は中世に属する土師質・瓦質土器で、瓦器椀・龍泉窯系連弁文椀・常滑焼と思われる陶器片などである。

１は住居跡出土品に似る椀で、器表が荒れる。２は土師器甕小片。内面は篦削りで仕上げる。３は底部と思われる須恵器甕の小片。胎土は精良である。



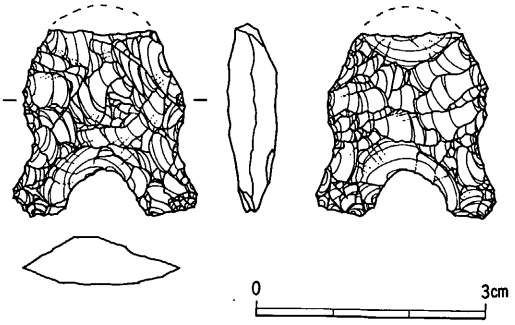
第33図　溝状遺構実測図(1／40)



第34図　その他の出土遺物実測図１（1／3）

表採その他の遺物（図版、第34図４～６・第35図）

４はいわゆる口禿の白磁皿小片。５は外面に幅広い櫛描文が配された、淡緑色釉を被る同安窯系椀の小片。６は２号住居跡内から出土したものであるがここに記す。ほぼ1/3が残存する弥生土器底部。外面に刷毛目が見えるが、全体に器表が荒れる。



第35図　その他の遺物実測図２（1／1）

第35図は表採資料のいわゆる「トロトロ石器」で先端部を欠損する。押圧剥離によって丁寧に仕上げられているが、通常みられる胴部表裏面への擦痕を観察することはできない。また、幅広の胴部に対し、両基端部つけねの左右側縁はややノッチ気味に加工されている。チャート製で、残存長2.4cm、幅2.4cm、厚さ0.7cm、重さ4.7ｇを測る。

ii）小　結

検出した主要な遺構は１×１、１×２間の掘立柱建物跡計５棟、竪穴式住居跡２軒、そして不整形土坑などである。住居跡が非常に浅いことは後世の削平が大きかったことを示し、遺構が疎であることもそれに起因しよう。

掘立柱建物跡については時期を示す遺物が出土していないが、梁行が1間の規模であることや、柱穴の大きさなどから弥生時代に属するものと想定している。類似した遺構は大平村桑野遺跡[註1]で弥生中期に属する例がある。本遺跡でも土器小片が若干出土している。また、建物の方位から見て１・３・４号建物と２・５号建物跡とは時期差を有するのであろう。

先の桑野遺跡では集落の東端に倉庫群が集中配置されていた。本遺跡では上記したように調査区北端付近で地形が低くなることや東西を河川で挟まれていることなどから、倉庫群は集落北端に位置していて、遺跡の中心は調査区南に想定できる。その場合も地形的な理由から規模の大きさはさほどでなかったと思われる。

竪穴式住居跡は陶邑編年のⅠ期中頃（ＴＫ208型式）に相当するものであろう。同様の住居跡は村内池ノ口遺跡[註2]でも調査されているが、広く築上郡域を見てもまだ稀少な資料である。池ノ口遺跡では該期の住居跡にいわゆるオンドル状の施設が付随し、いずれもがカマド右袖から連続する。本遺跡でも２号住居跡のカマド右側に焼けた面が広がるなど類似遺構が予想された。この両遺跡は直線距離にして１km強の距離を隔てるのみで、同じ黒川右岸に位置し、密接な関連を有していたものであろう。

ＳＸを冠した遺構は先に報告した正ノ坪遺跡で検出した不整形土坑群と同様の性格を有していたものと考えている。

註１　福岡県教育委員会「桑野遺跡　上の熊遺跡　小松原遺跡」（『一般国道10号　豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第６集下巻、1997）

註２　福岡県教育委員会「池ノ口遺跡」（『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第３集、1996）

Ⅳ. おわりに

旧上毛郡東部の条里施行について

今回の調査では正ノ坪遺跡・安雲ハタガタ遺跡の現水田下で不整形の浅い落ち込みを検出した。報文中に引用したように、それらが「掘込田」である可能性もあるが、単なる「開墾時の痕跡」であるのかも知れない。開墾技術について疎いのでそれ以上言及できないが、それらの痕跡は12世紀後半～13世紀前半頃に形成されたものであろうと推測された。

ところで、この新吉富村宇野・垂水地区では古代官道に比定される道路状遺構が検出され、それに方位を揃えた方形の地割、「条里」が良好に遺存するとされている（ただし、県教委発行の『福岡県遺跡等分布地図（豊前市・築上郡編）』には記載されていない）が、その施行時についての根拠は知られていなかった。今回の調査成果は、条里の施行が中世、13世紀前半頃に実施された可能性を示すものである。このことについて補足資料を提示し、検討したい。

新吉富村を含む築上郡東部、そして市西端に位置する角田川流域を除く豊前市の大部分は律令時代以降「上毛郡」と呼ばれる行政単位であった。郡衙跡は近年の発掘調査で新吉富村大ノ瀬下大坪遺跡で確認され、「大ノ瀬官衙遺跡」として国指定されたところである。また、垂水廃寺の存在などからこの地域が上毛郡域の中心地であったことが窺える。地形的に見ても、豊前市域の西半部は低丘陵が複雑に派生していて、市域東部から山国川にいたる地域がもっともまとまった平坦地を擁する。先の『福岡県遺跡等分布地図（豊前市・築上郡編）』に記載された条里遺跡も豊前市東部の平坦地に限っているが、これについては山国川西岸まで含めて考えるべきであろう。

それはさておき、近年相次いで中世居館が発掘調査されていることは先にも記した。その中で、豊前市東部、条里が施行されたとされる水田下で発見された遺跡について考えてみたい。

三毛門放生田遺跡[註1]（豊前市大字三毛門）

ＪＲ日豊線三毛門駅に隣接し、海岸まで400ｍ弱の位置にある。県営住宅建設に伴って調査を行った。ちなみに調査区と海岸の間の道路は旧街道である。この地域の条里方向はやはり古代官道に規定されているようである。

遺跡は25ｍ以上×60ｍ以上の溝で画された居館の一部である。内部に溝と方位を揃える掘立柱建物跡６棟が検出されるが、重複関係が認められず、密度も疎であることから比較的短期間に廃絶したものであろう。その時期は13世紀前半とされる。

この周辺の想定条里界線を第36図に示した。畦畔や道路に若干の出入りがあるが、ほぼ図のように想定して大過なかろうと考えている。この条里界線と居館の関係を見ると図左右方向（正確には北西・南東方向）では半町の位置に区画溝が位置しており、畦畔から予想される対辺溝も同様となる。図上辺についても、半町を少し切る数値であるが、界線と居館の間に若干の空閑地を設ければ半町の位置と見なすことができるであろう。数値の操作がいささか乱暴であるが、このことから本遺跡は条里地割に合致するものと思われる。



第36図　三毛門放生田遺跡周辺地籍図（1／5,000）

また、この地域の条里施行が官道を基準になされたものであろうと先述したが、この遺跡北東辺（図上端）から官道までは直線距離にして約2.65km余を測る。本遺跡のように官道から３km近い距離を隔てて、なお官道に方位を揃える強い根拠は想定しえず、この遺跡は条里施行後あるいは施行時に形成されたと考えられる。

小石原泉遺跡[註2]（豊前市大字小石原・皆毛）

工業団地造成に伴って10数haの広大な面積を調査し、中で中世の居館跡２遺跡を検出している。仮に北側を１号居館、南側を２号居館として記述を進める。両者の間には幅25ｍほどの溝（河道跡）が蛇行して走り、居館も一部が破壊されている（第37図）。

１号居館はＬ字状の溝の一部が残存し、図左右幅85ｍ、上下幅10ｍ余が範囲であったことが確認されるが、建物の配置から推測して一辺100ｍ余（1町）に復原可能である。内部に多数の掘立柱建物跡が一部で重複して検出される。２号居館は左右60ｍ、上下70ｍの規模の区画溝が残存し、やはり1町四方の屋敷地が想定される。ここでは内部にも方位を揃える溝が残り、これが屋敷地の仕切の溝か、あるいはさらに別個の屋敷地が重複しているのか、報告を待ちたい。両者の細かな年代は整理中であり詳細は不明であるが、およそ中世前期の遺物が出土するという。

ここで問題としたいのはこれらが条里界線とどういう位置にあるかである。１号居館の上端（北東辺）は官道推定線から約700ｍ、ほぼ6.5町に位置し、左端（北西辺）は大字境に重なることからも条里にのるとしてよかろう。この場合、６町四方を単位とする「里」と半町のずれを生じているが、その意味については筆者には評価できない。しかし、それでもなお１号居館は図左右方向で界線に揃い、上下方向で「半町」のずれをもつなど、条里地割に強く規制されるといえる。他方２号



第37図　小石原泉遺跡周辺地籍図（1／5,000）

居館は南端（南西辺）が官道から約440ｍ（４町）、右端（南東辺）は１号居館の左端に揃い、これも条里界線に見事に合致する。したがって、この遺跡でも居館は条里地割に合致するといえる。

村内遺跡[註3]

一般国道10号バイパスは村内宇野地区を斜めに横切って建設され、それに伴い多くの遺跡が調査された。そのいくつかを例示する。

現水田下の池ノ口遺跡では官道そのものが検出された。路体幅６ｍで、砂利を敷いた路面や幅１ｍ前後の両側溝が確認されている。方位はＮ56°Ｗ。遺跡内では多くの竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が検出されるが、古代に属すると推定できるものは方形掘形をもつ５・６号建物跡だけである。この２棟は２×４、２×３間の規模でほぼ方位を揃え、官道から150ｍ弱の隔たりをもつが、建物方位はＮ65°Ｗ前後となり、官道とは10°ほどのずれをもつ。

長田遺跡は官道から600ｍほど南西に位置し、掘立柱建物跡や溝を検出する。問題とする建物跡は柱穴が小さく、柱間も不揃いなことから中世に属するものと思われるが、２棟並んでいる。方位はほぼＮ35°Ｅである。また建物跡から13ｍほど離れてそれと平行に走る、幅1.5～２ｍ、深さ0.5ｍの１号大溝が検出された。取水口らしい部位を伴い、ほぼ８世紀代に機能したと考えられている。これらはほぼ官道と直交する方位をとる。また、この溝を延長すれば現水路に続き、その水路は垂水廃寺北西限からほぼ110ｍ、１町に位置することから遺制を残存するものであろう。

竹ノ下遺跡は官道から約800ｍ南西、友枝川の段丘縁辺に位置し、条里が施行された場合の南東端となる。ここでは２×２・２×３間総柱建物跡や側柱建物跡などが７棟調査されたが、区画溝は認められず、建物群の範囲などは不明である。柱掘形はいずれも円形であるが、出土土器からほぼ８世紀代に想定されている。建物跡はいずれも主軸をＮ58～64°Ｗにとり、さきの官道に近い。

竹ノ下遺跡の西に接する、ウツケ畑形跡では、10世紀末～11世紀前半とされる建物群がＮ35°Ｅほどの方位をとるが、これも官道に規定された結果といえる。

以上の宇野地区発掘調査の成果から、垂水廃寺北西を限る県道付近と友枝川の間の段丘上では条里地割に規制されたと考えられる建物跡や溝が分布することがわかってきた。おそらく、長田遺跡１号大溝を北西限とするものであろう。年代は８世紀に遡ると考えられる。一方、大溝西側では池ノ口遺跡の２棟の建物跡が掘形の形状からほぼ８世紀代と考えられるが、官道近くに位置するにしては方位が10°ほどずれる理由について、先の豊前市の例から考えると首肯できない点がある。また、それ以外の建物跡・溝など条里施行を思わせる遺構は検出できていない。長田遺跡１号大溝を官道以南の条理地割の西限とすれば、池ノ口遺跡の建物方位のずれ、遺構の存在しないことが説明できる。現在でいう「市街化区域」的な土地利用が存在したのであろうか。

本編で報告した正ノ坪遺跡は長田遺跡１号大溝の北西にほぼ隣接する。遺跡の内容は報告のとおり、12～13世紀前半頃に大規模な土地改良がなされて耕地化したと考えている。それ以前の遺構を全く検出していないことから利用形態は不明であるが、１号大溝を境に土地利用が異なっていたとする想定にたてば、条里地割がおよんでいなかったことも十分に考えられる。

以上の中、豊前市東部における２遺跡では条里施行の上限を明らかにしえないが、遅くとも12世紀後半～13世紀前半までに官道から海岸線近くまで条里が施行されたことはほぼ確実である。ちなみに、ここで基準とする官道の整備時期についても明確な根拠を示すことができないが、７世紀後半に建立されたとされる垂水廃寺、そして８世紀代に想定される大ノ瀬下大坪遺跡の官衙遺構がそれぞれ官道に接して、方位を揃えて造営されることからそれまでには完了していたとしてよい。条里地割が広範に施行された時期の詳細については竹ノ下遺跡の成果から8世紀代に遡及する可能性が高いが、初期の施行範囲を含め、なお資料の蓄積を要する。

本稿で目指した地域の条里制施行の問題は、新吉富村教育委員会および豊前市教育委員会が実施しつつある大規模圃場整備事業に伴う発掘調査の内容が整理されるとともにより解明されよう。

註１　福岡県教育委員会「三毛門放生田遺跡」（『福岡県文化財調査報告書』第121集、1995）

註２　豊前市教育委員会が発掘調査、整理中。同市栗焼憲児氏に資料の提供をいただいた。

註３　福岡県教育委員会「池ノ口遺跡」（『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第３集、1996）
福岡県教育委員会「ウツケ畑遺跡」（『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第６集上巻、1997）

図　　版



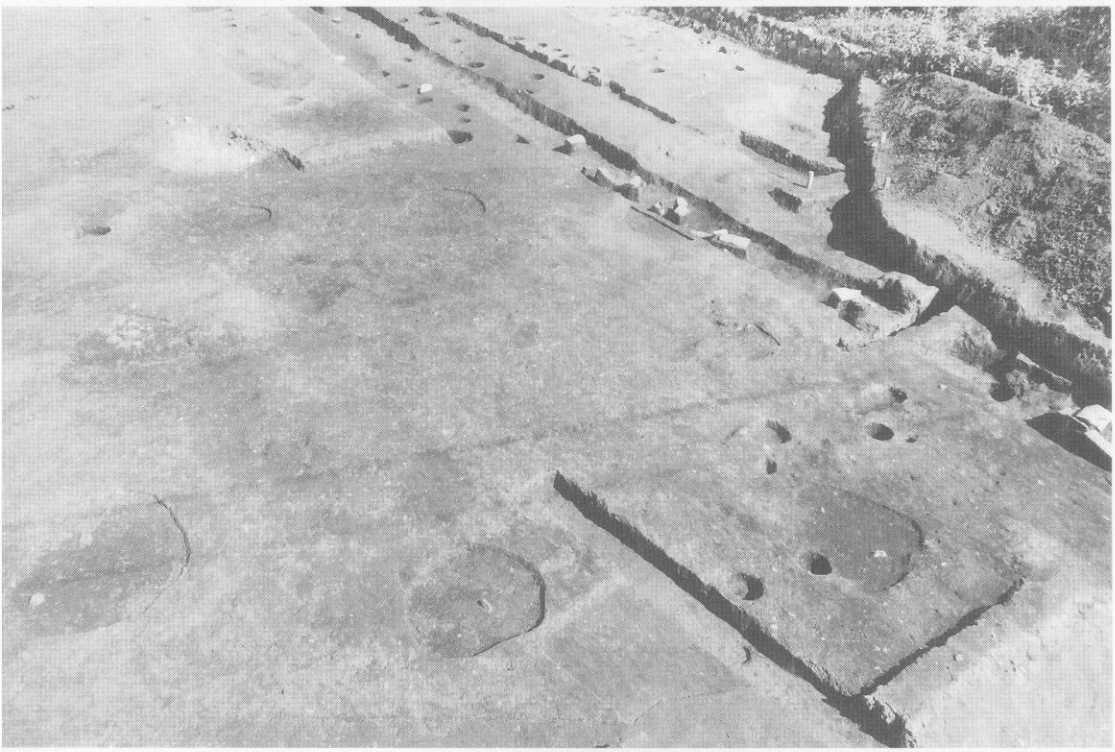
垂水廃寺周辺航空写真（上が北）
1．垂水廃寺
2．正ノ坪遺跡
3．安雲ハタガタ遺跡
4．大ノ瀬官衙遺跡



垂水廃寺遠景
（南西から、空中写真）



調査区全景（西から）



掘立柱建物ＳＢ030（南西から）



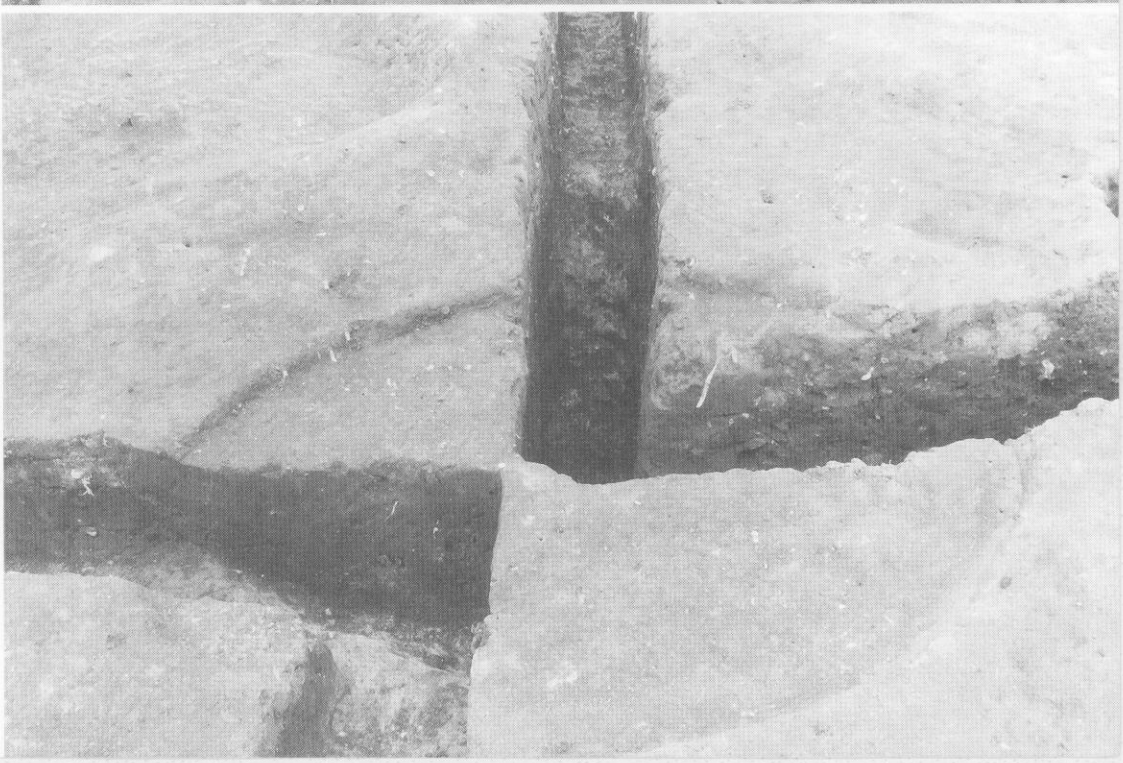
同整地層検出状況
（北隅、北西から）



同整地層検出状況
（西隅、北西から）



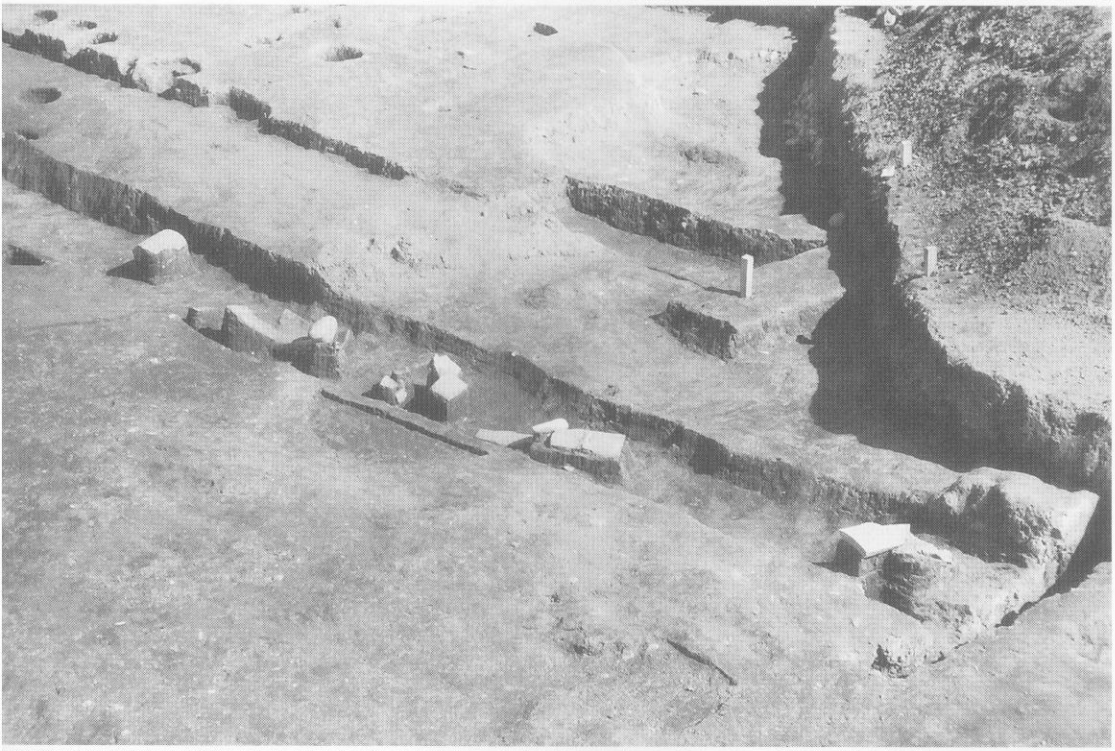
整地層断ち割り状況（北東から）



柱掘形断ち割り状況（北東から）



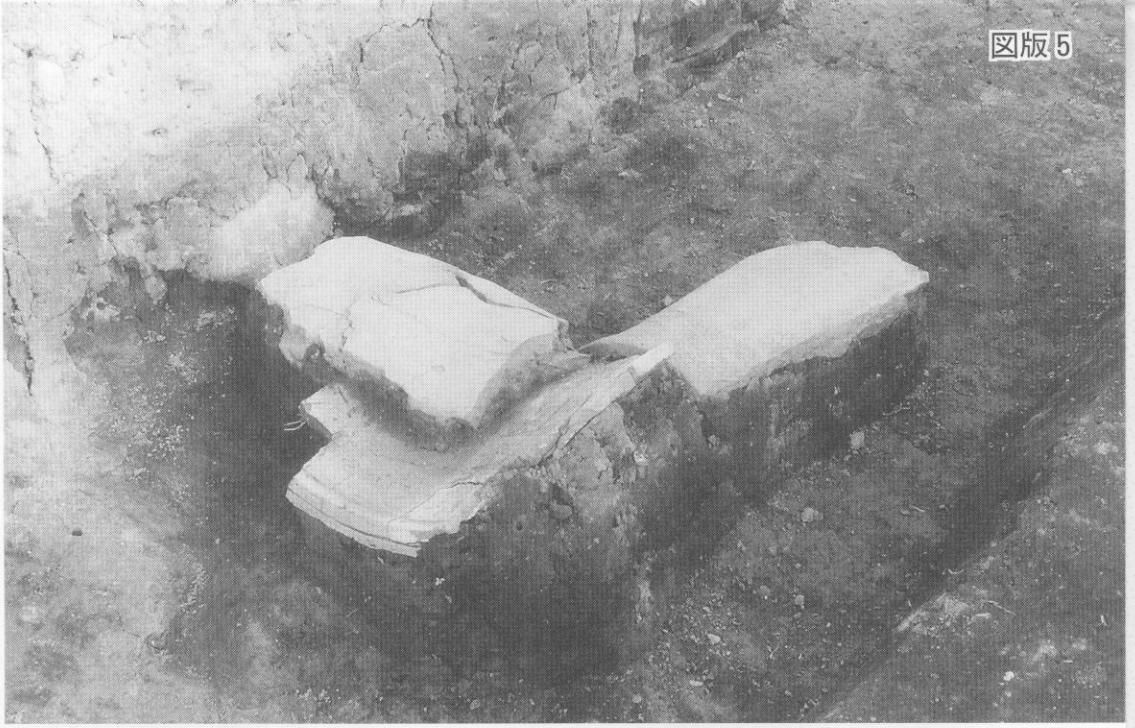
溝状遺構SD033全景（南から）



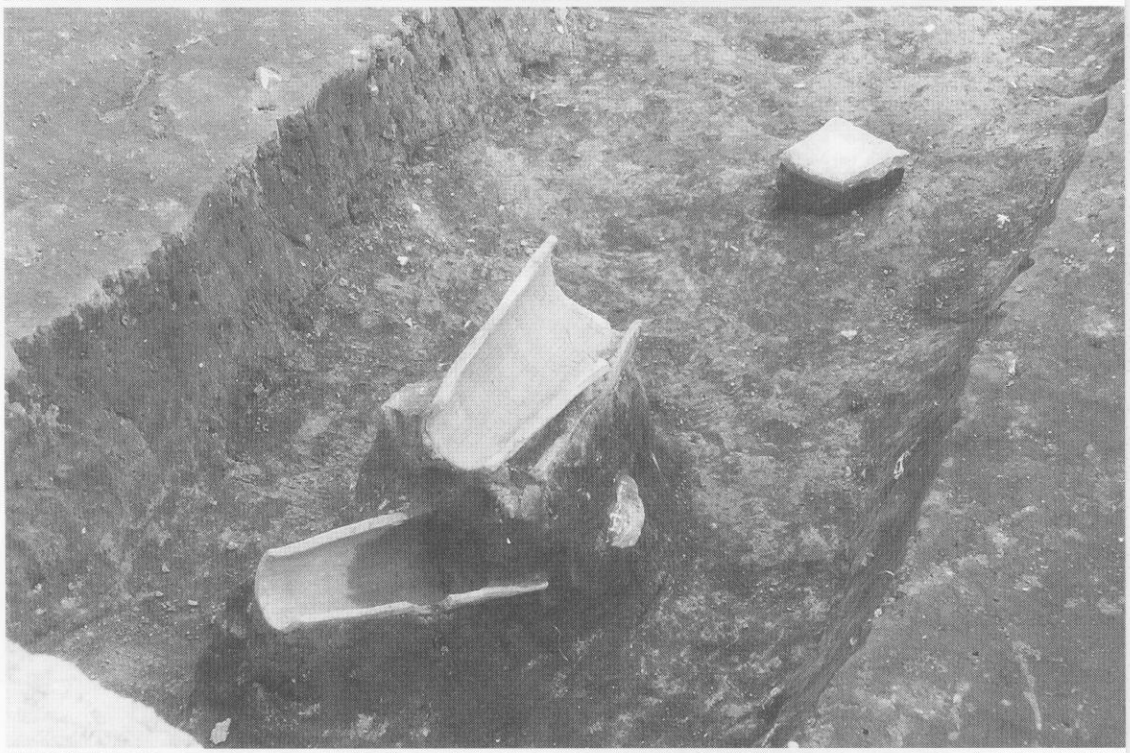
同南半部（南西から）



同遺物出土状況１（北西から）



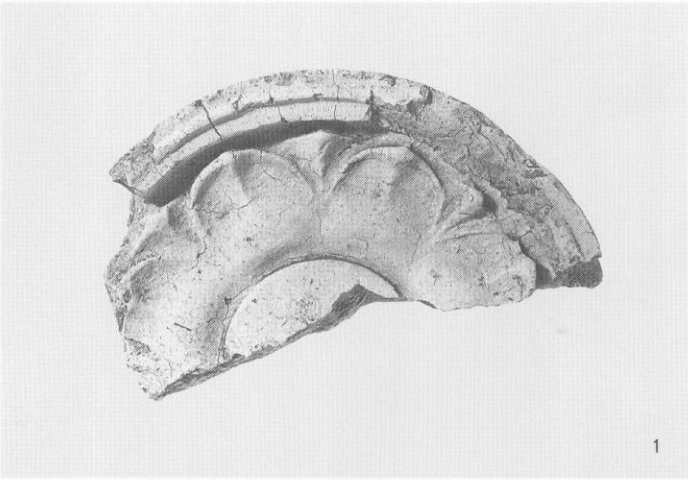
同遺物出土状況2（北西から）

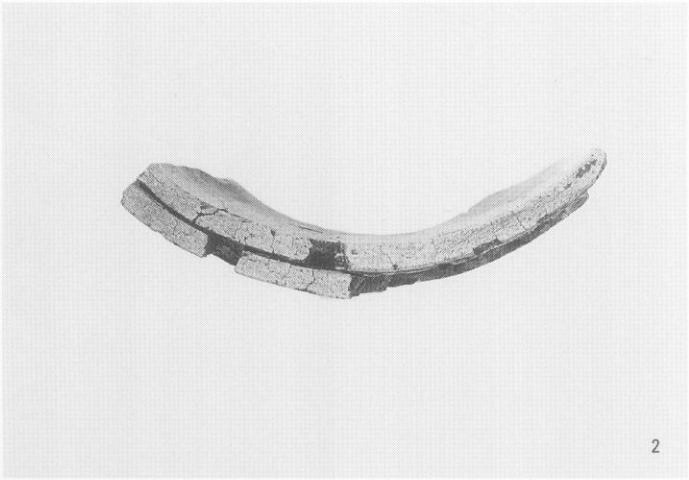


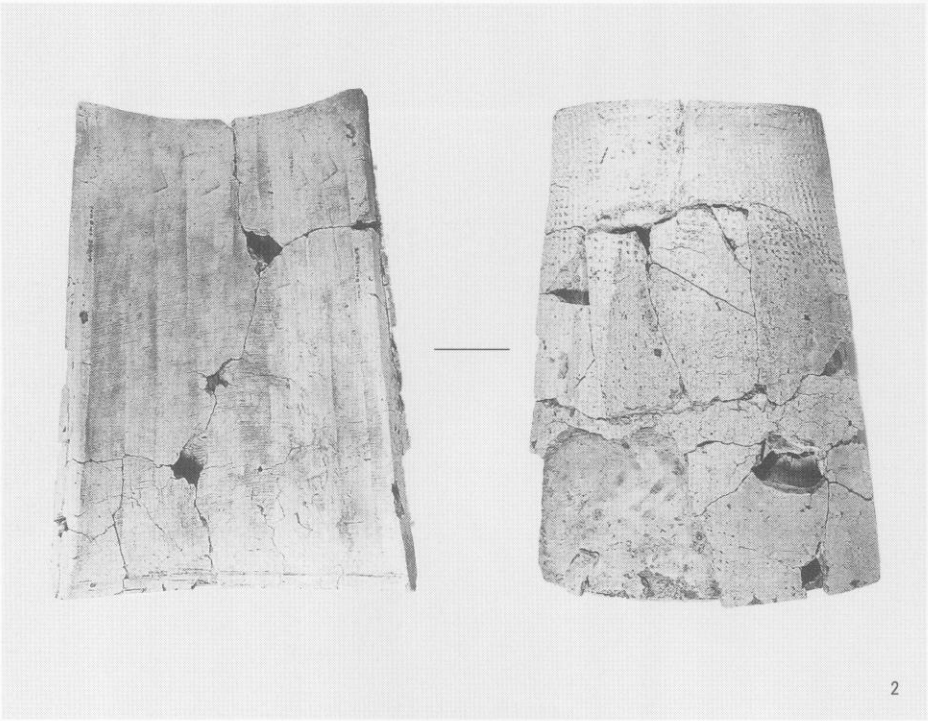
同遺物出土状況3（北西から）

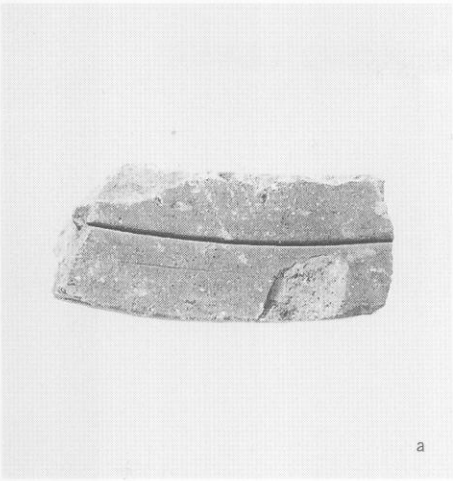


溝状遺構SD032全景（西から）

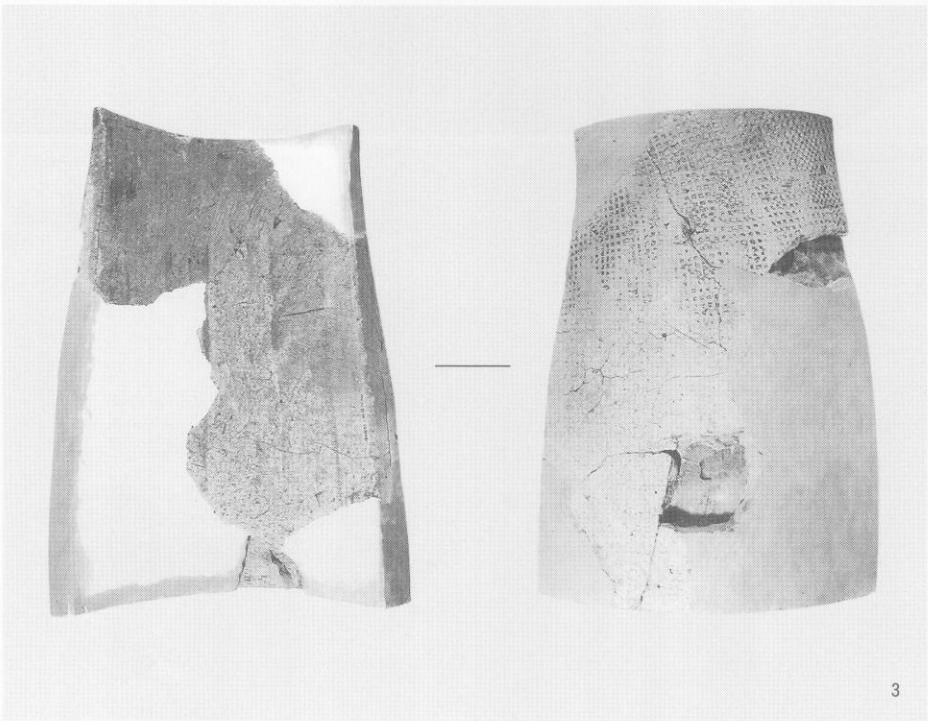

1

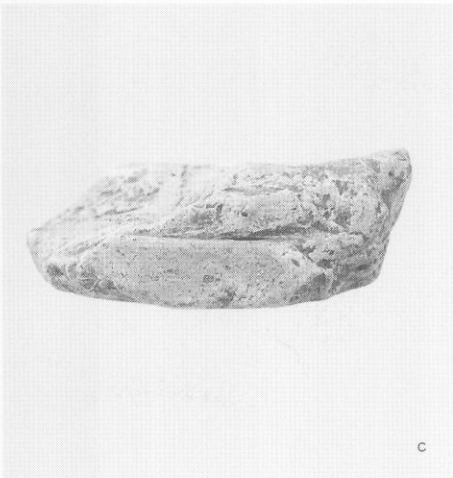

2


2

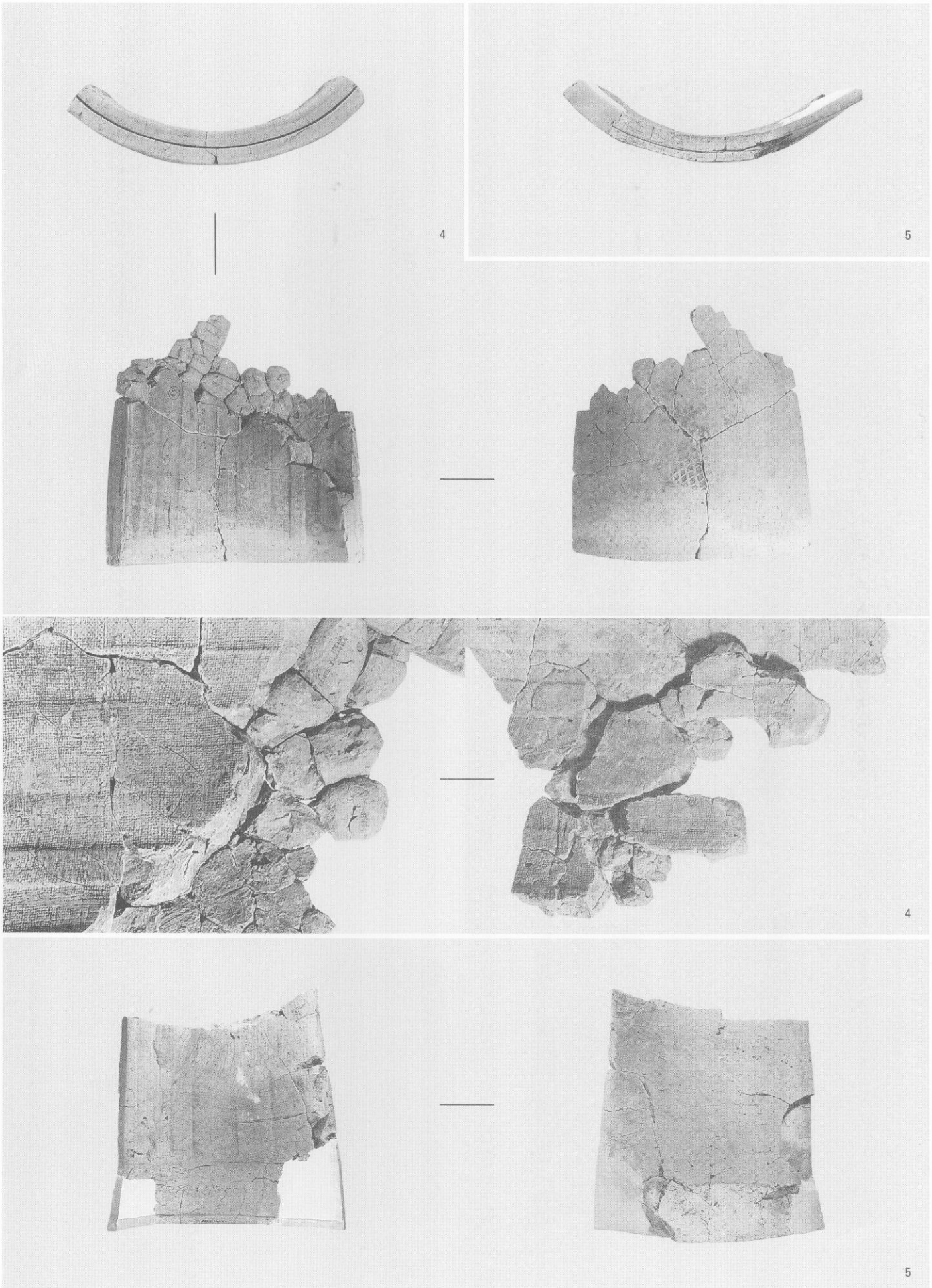

a


b

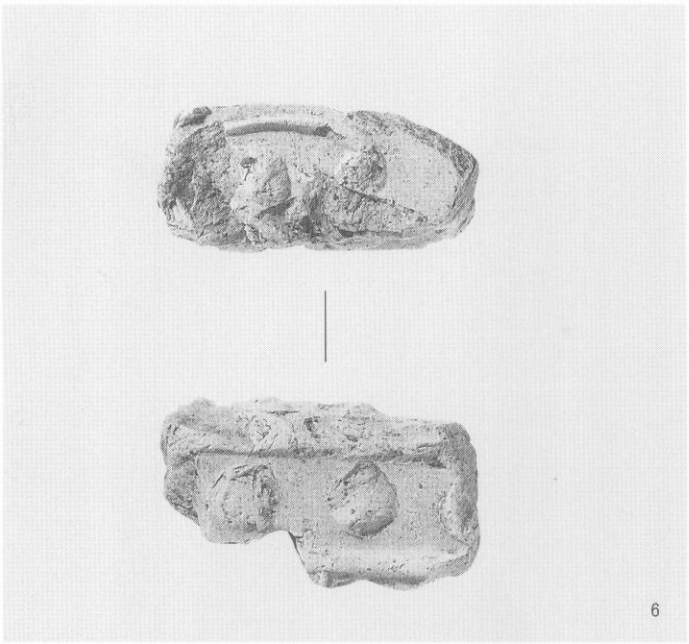

3

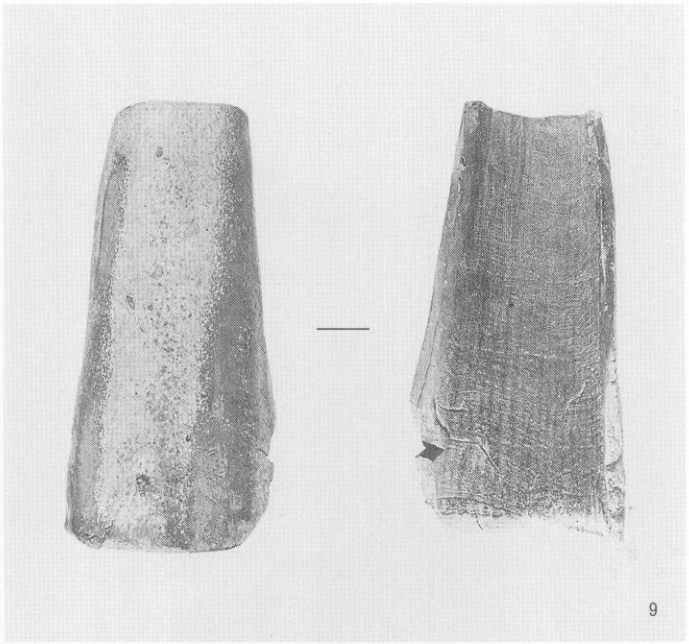

c

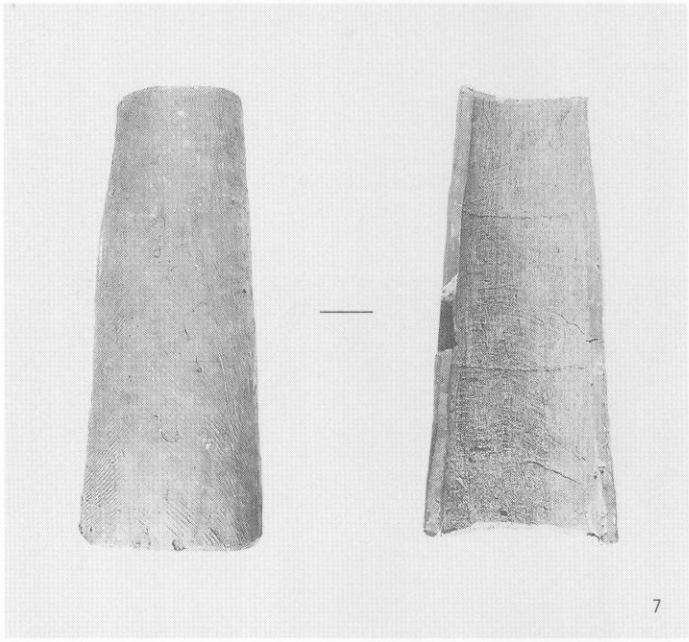
各遺構・層位出土瓦類 1

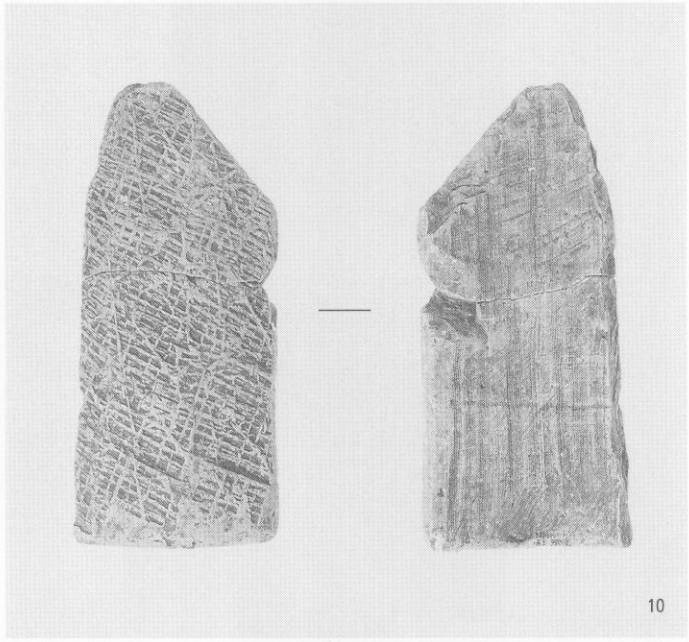


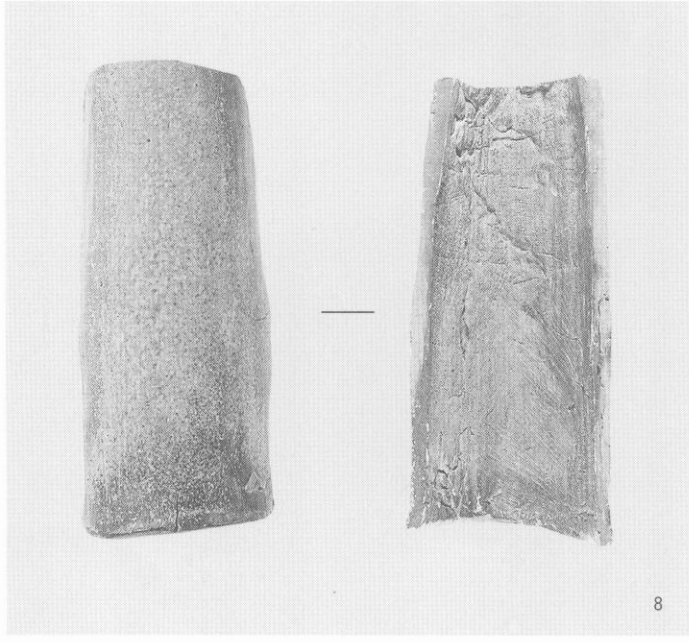
各遺構・層位出土瓦類 2

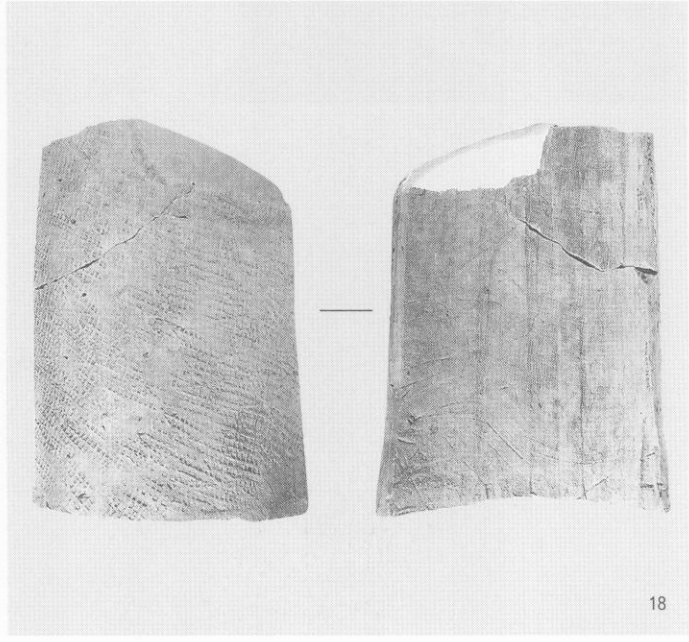

6


9

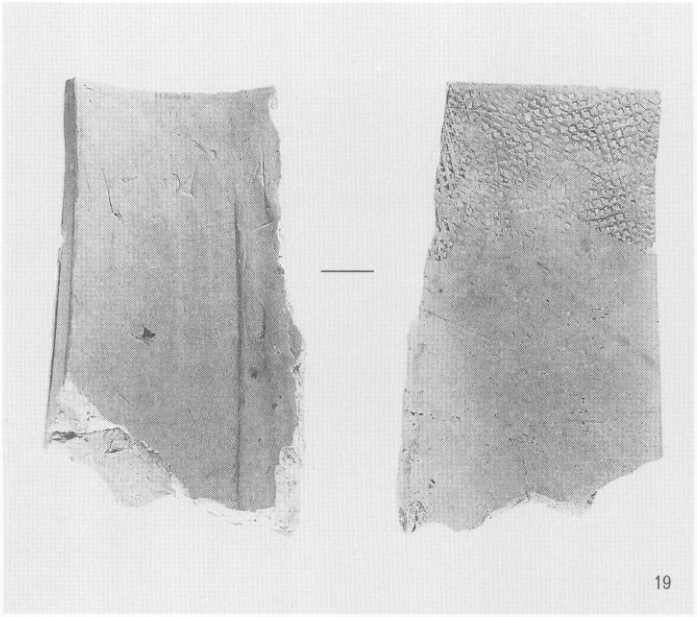

7

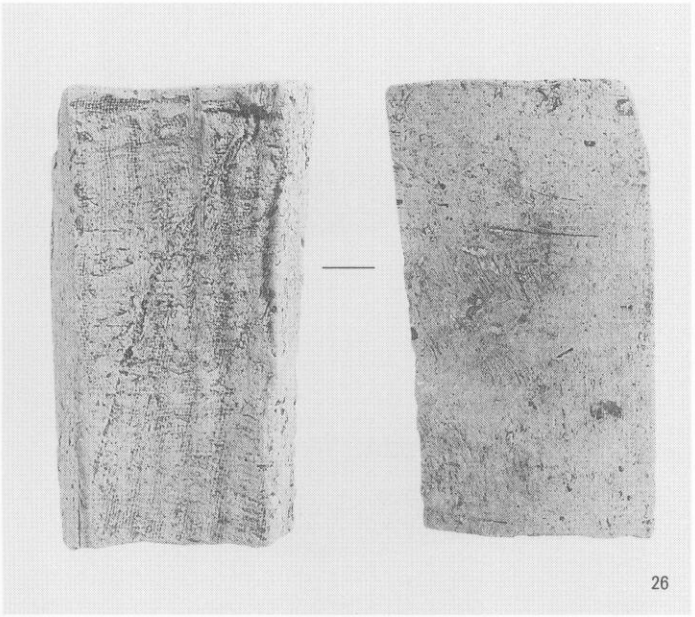

10

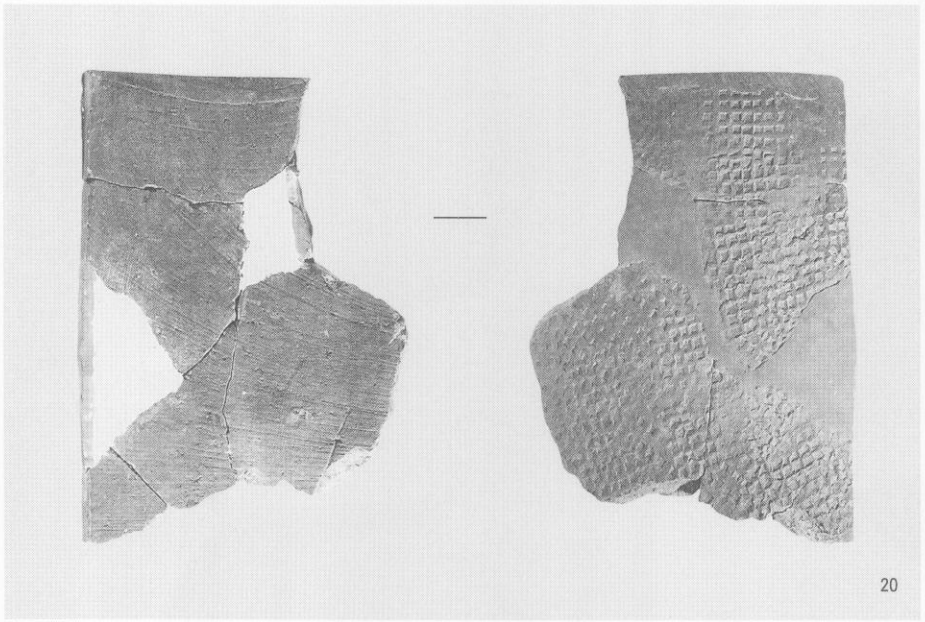

8

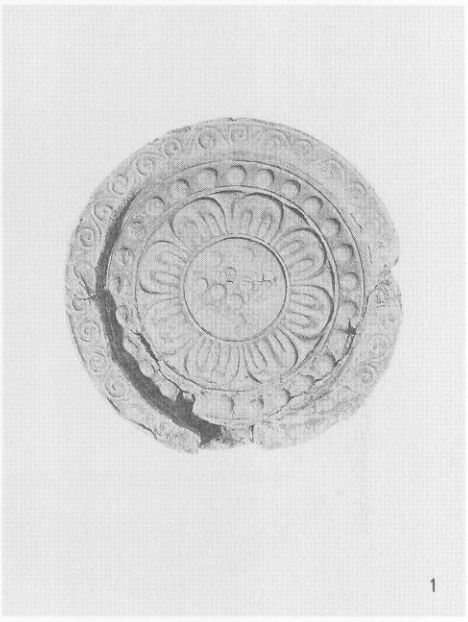

18

各遺構・層位出土瓦類 3

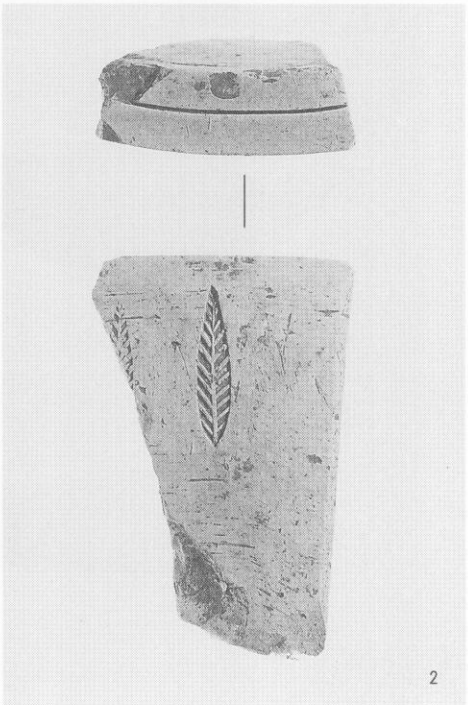

19


26

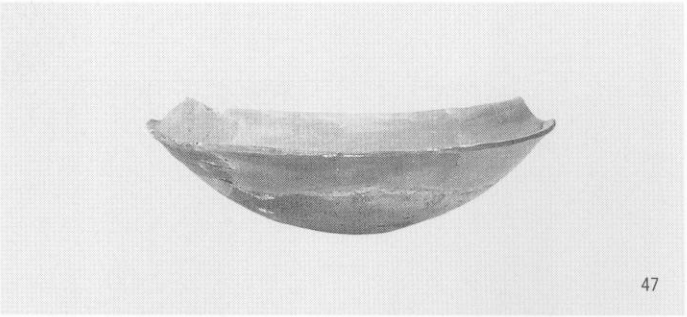

20

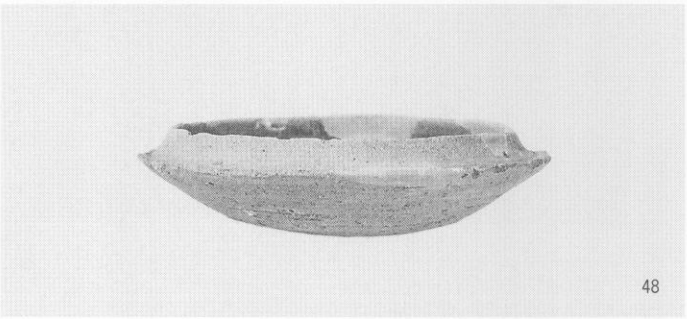

1

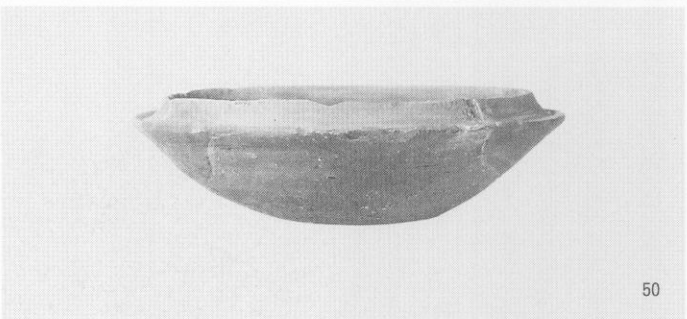

3


2

各遺構・層位出土瓦類 4 （1 ～ 3 は既出土資料）


47

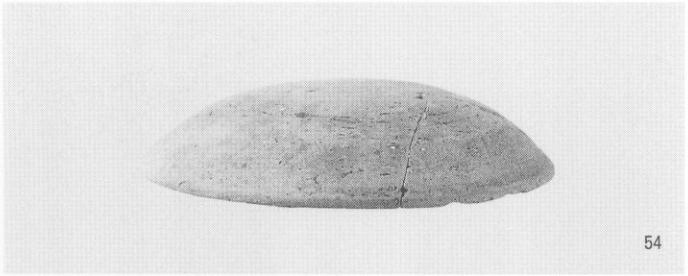

48

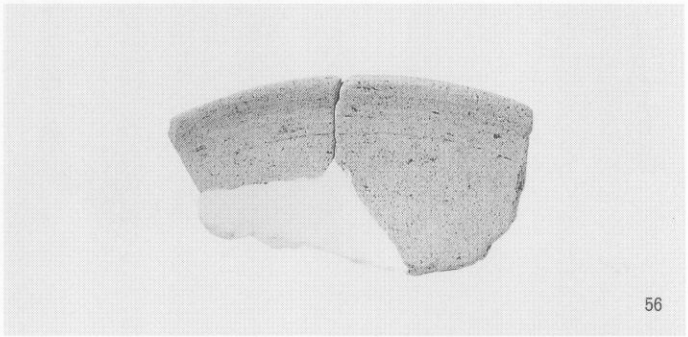

50

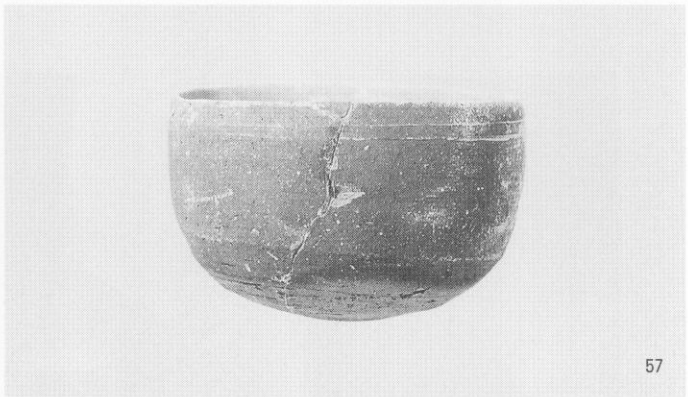

51

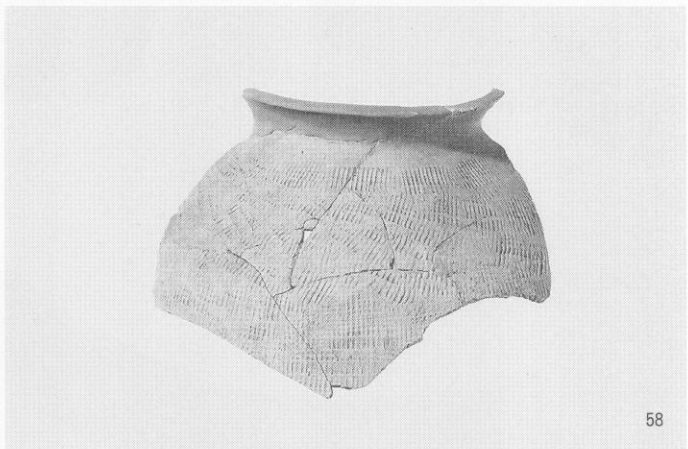

52

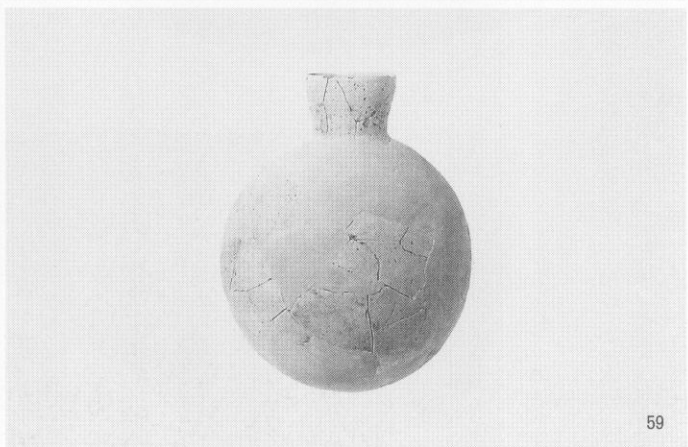

53


54


56


57


58


59

各遺構・層位出土土器



正ノ坪遺跡全景（南東から）



同中央付近（北東から）



同西端付近（北西から）

正ノ坪遺跡出土遺物



安雲ハタガタ遺跡全景（調査前、北東から）



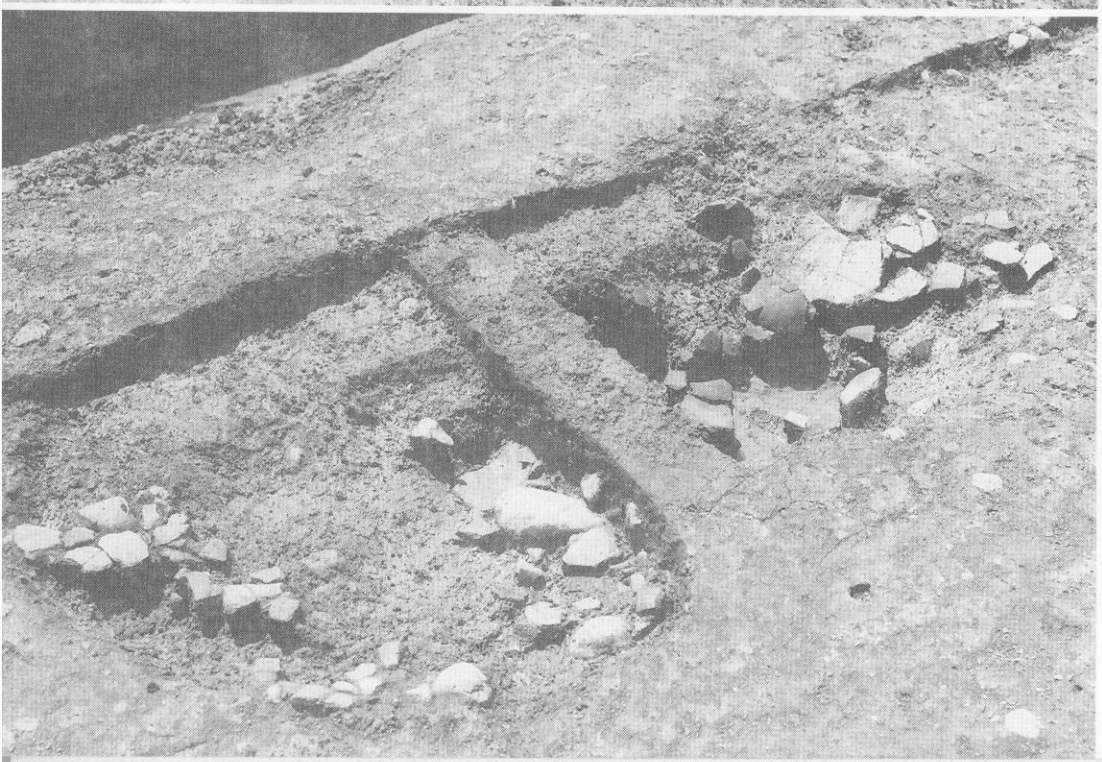
同全景（調査跡、北東から）



1号竪穴式住居跡（西から）



同カマド左側土坑（南西から）



同東辺土坑（北西から）



2号竪穴式住居跡遺物出土状態
（北西から）



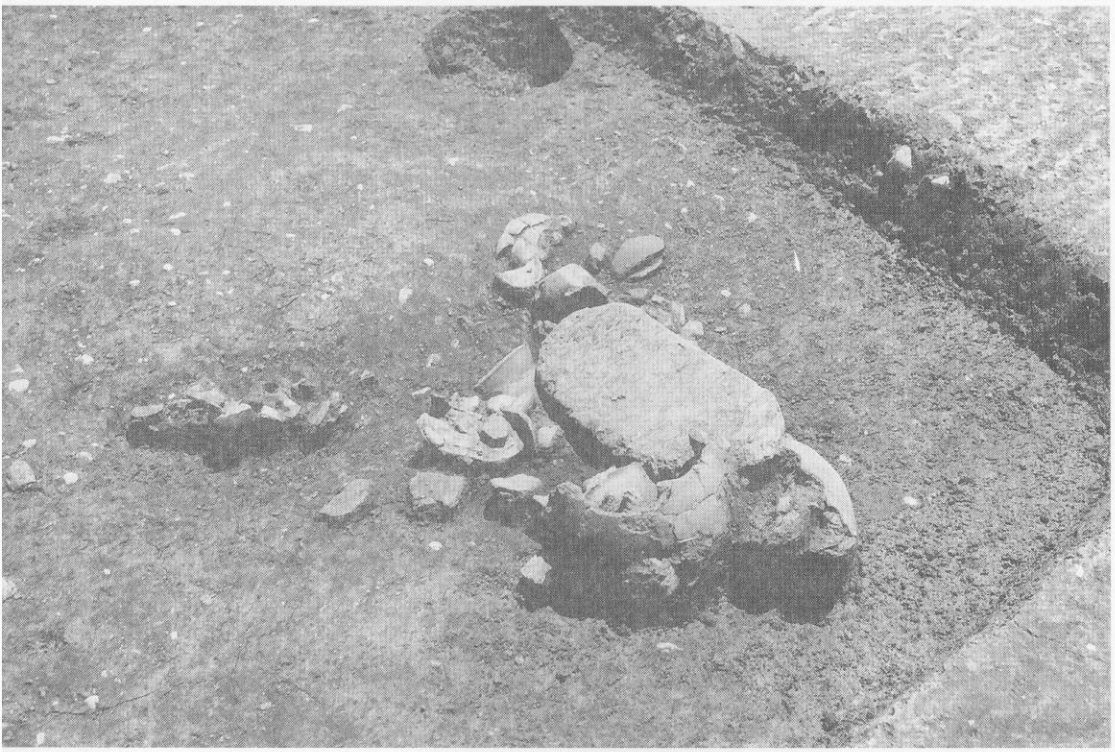
同完掘後（北西から）



同カマド（北東から）



同A群遺物出土状態（南東から）



同B群遺物出土状態（西から）



同B群遺物出土状態（北西から）



掘立柱建物跡群（北西から）



1・3号掘立柱建物跡（南西から）



2号掘立柱建物跡（南西から）



4・5号掘立柱建物跡（北西から）



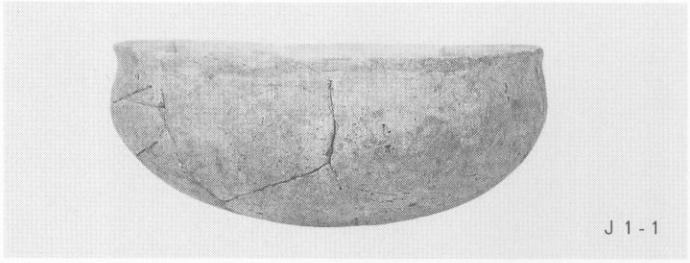
溝状遺構（北東から）

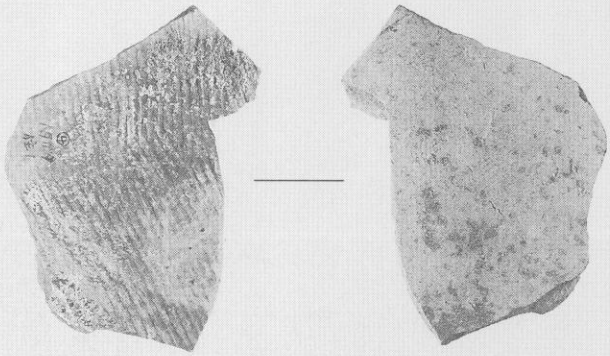


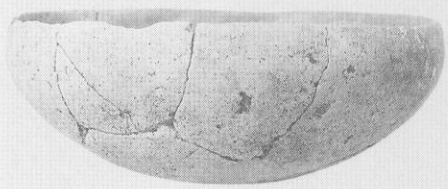
調査風景（住居跡）



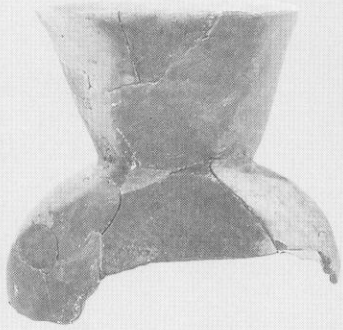
調査風景（２号住居跡）

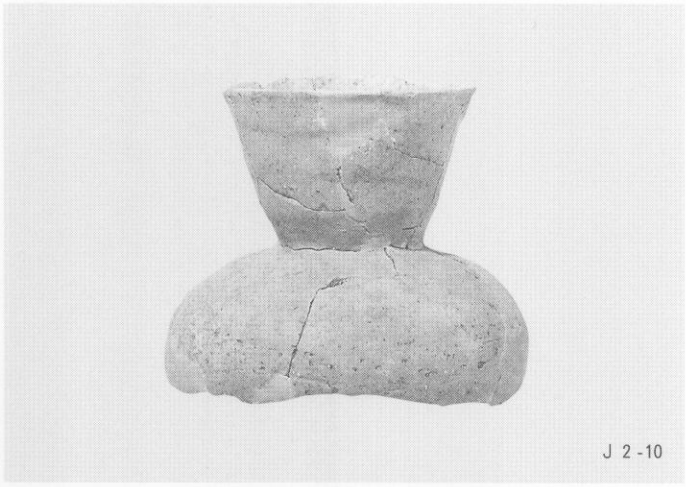

J 1 - 1

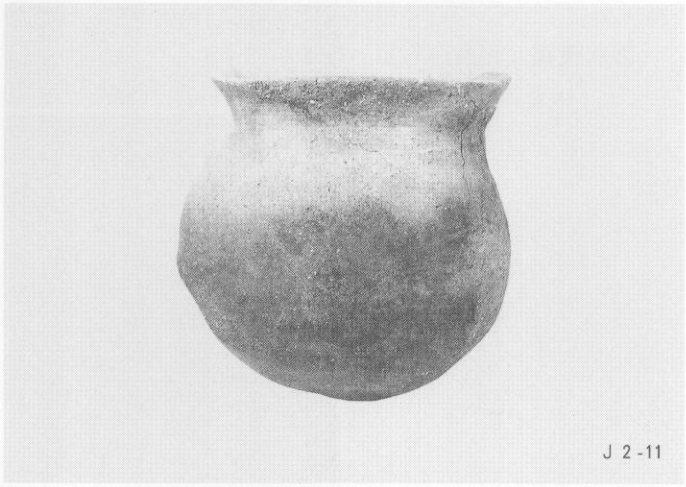

J 1 -13

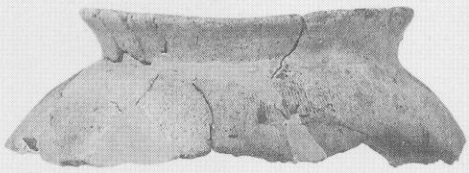

J 2 - 1

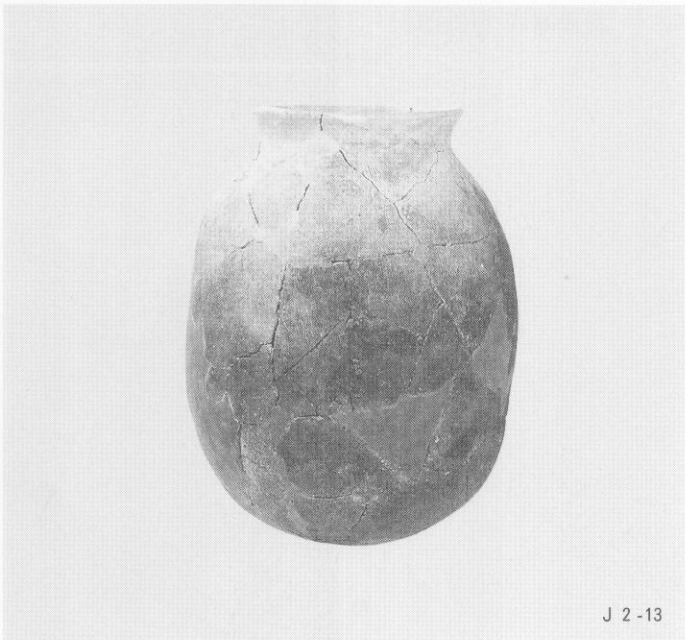

J 2 - 5


J 2 - 9


J 2 -10


J 2 -11

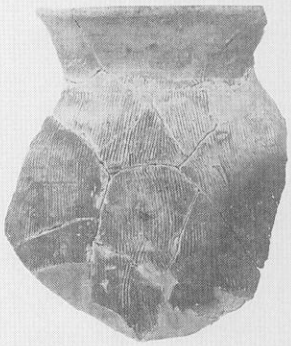

J 2 -12

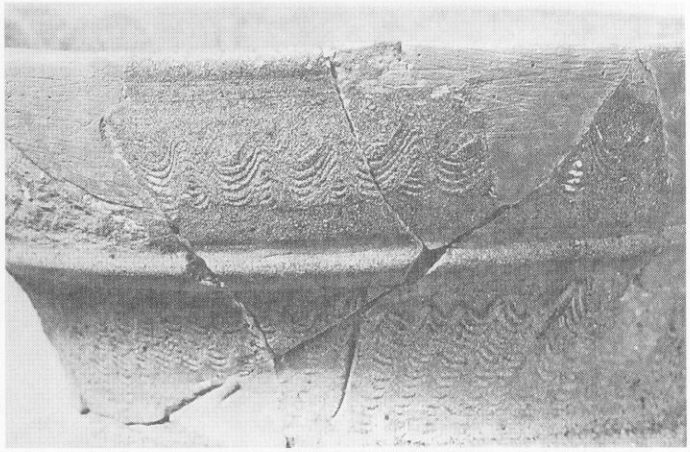

J 2 -13

出土遺物１（１・２号住居跡）

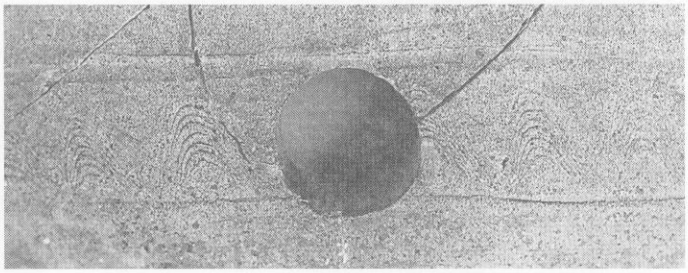

J 2 -14

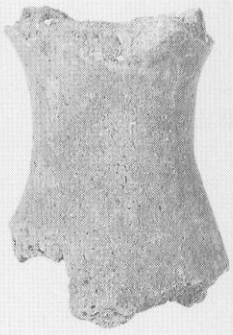

J 2 -20

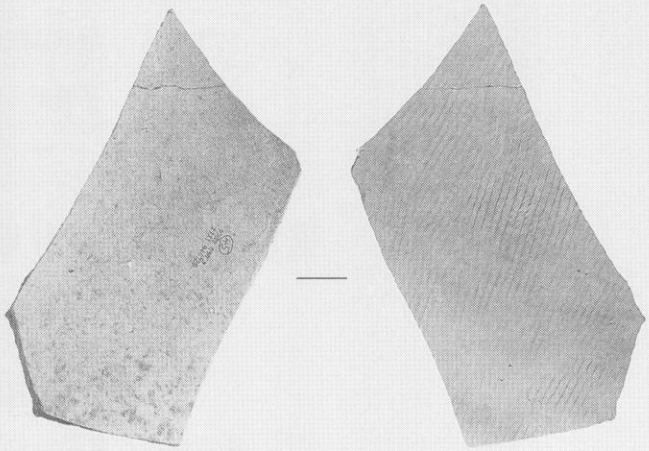

J 2 -15

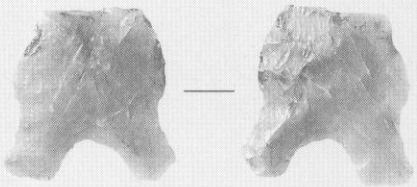



J 2 -16




D 1 - 1


D 1 - 4


表採

出土遺物２（２号住居跡ほか）

報告書抄録

ふりがな	たるみはいじ・うのちくいせきぐん
書名	垂水廃寺Ⅱ・宇野地区遺跡群Ⅰ
シリーズ名	新吉富村文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	矢野和昭・吉村靖徳・飛野博文
編集機関	新吉富村教育委員会
所在地	福岡県築上郡新吉富村大字垂水1325－3
発行年月日	西暦1999年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
垂水廃寺跡（たるみはいじあと）	福岡県築上郡（ふくおかけんちくじょうぐん）新吉富村（しんよしとみむら）大字（おおあざ）宇野（うの）1449ほか	40644	970010	131度10分05秒	33度34分39秒	1995年8月24日～11月2日	約1,500㎡	果樹植栽
正ノ坪（しょうつぼ）遺跡（いせき）	同　大字宇野（おおあざうの）303-1ほか	40644	970085	131度9分49秒	33度34分35秒	1994年11月15日～12月19日	約5,000㎡	県営圃場整備事業
安雲（あくも）ハタガタ遺跡（いせき）	同　大字安雲（おおあざあくも）788ほか	40644	970084	131度9分16秒	33度34分24秒	1994年6月21日～7月14日	約1,000㎡	県営圃場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
垂水廃寺跡	寺院	奈良時代	掘立柱建物跡・溝	瓦	
正ノ坪遺跡	生産遺跡	鎌倉時代	不整形土坑	土器	
安雲ハタガタ遺跡	集落跡	弥生時代	掘立柱建物跡5		
		古墳時代	竪穴式住居跡2	土師器・古式須恵器	
		鎌倉時代	不整形土坑	土器・陶磁器	

垂水廃寺Ⅱ・宇野地区遺跡群Ⅰ

新吉富村文化財調査報告書

第12集

平成11年3月31日

発行　新吉富村教育委員会

福岡県築上郡新吉富村大字垂水1325-3

印刷　株式会社　西日本新聞印刷